

E ~~3289~~
1a

虎の皮を着た勇士



講談社版 世界名作全集



3259 | Руставели,
| а | ш

Витязь в тигровой
шкуре (на япон.
яз-ке) | ЗТР

сентябрь 1955 г.

1955 г.

899.962.1-1



E 3259
10

騎士の剣は押れて、赤く血にまっている。タリエールは矢傷を水で洗い、てあてしてやった。
「して、私敵はなにものですか。」
「いや、私の運がわるかったのです!...」
と、やがて傷ついた騎士は語りをしはじめた。



(林 唯一・絵)

この物語について

ロシアの南どなりにグルジアという国があります。紀元前数百年に歴史がはじまる古い国ですが、東と西のかけ橋といわれるようないい位置をしめていたため、たえず東と西から敵にねらわれて、苦しんでいました。十二世紀の後半にゲオルギイ三世が出て国家を統一し、つづいてその娘タマラの時代にこの国はもつとも強大になりました。タマラ女王は一一九二年にオセチアの王子ダヴィド・ソスラニを夫にむかえ、封建諸侯をおさえて、黒海からカスピ海、北はカフカズから南はエルゼルにいたる大王国をきずきました。敵も手出しがでなくなり、したがってこの時代に、グルジアの経済と文化がたいそうさかんにおこったのであります。

この物語はこういう時代を背景にして生まれました。国の中がもめて弱くなり、外国のあなどりをうけてはだめだ、ということがグルジア復興のおしえでしたから、物語はそれを反映し

て、国を愛する精神と、ひろく外国に目をむけて、いろいろな民族と手をつなぎあうという精神と——つまり愛と友情という考えにたらぬかれています。作者にとってはすべての人々はきようだいであり、人類という一つの家族の仲間でありました。

中世は宗教的にやかましい制限のあつた時代ですが、それにもかかわらず、この物語がのびのびと人間みたまつぷりに書かれていることは注目されると思います。とりわけ、女性を自由な、意志の強い人としてはたらかせ、女性への尊敬、男女平等をうたっているのは、当時としてはめずらしいことでした。この本がタマラ女王の後、つい近年まで、いく百年のあいだ焼かれたり川に投げられたりして、ひどいめにあつてきた原因の一つはそこにあつたのです。

作者シヨタ・ルスタヴェリの経歴ははっきり知られていません。生まれたのはグルジアの一方地方メスヘチアにあるルスタヴィという村で、十二世紀末から十三世紀はじめにかけて活動していました。教養の高い詩人だったようで、ビザンチンで学び、プラトンの哲学やホメロスの詩、またアラビア、その他諸国の文学にも通じていたといわれています。この物語は一一八七年ごろ、タマラ女王の注文によって書かれ、そのお札にルスタヴィ町がつくられたとのことで

す。この町は、ただいまではグルジア共和国（ソヴィエト連邦の一構成国）有数の工業都市となつています。

作者の作品でいまに伝わるのは、この物語一つだけです。しかしこれ一つだけで作者の名は不朽となり、ときには「グルジアのホメロス」とまでたたえられています。ソ連邦の教科書には、国語の本にも、歴史の本にも、かならずこの作者とこの物語のことが書かれています。最近の八年生（中学二年）用国定文学教科書を見ると、そのために十三ページもささげられています。

これは中世のロマンチックな長編叙事詩です。六千行より成り、使われていることは四万を越えています。これを散文の形にして訳したのがこの本ですが、内容でも、意味でも、また文章そのものでも、かなり原文に近くうつしたつもりです。この本一冊におさまったのは、古い詩によく見られる同じ意味のことばのくりかえし、同じような形容詞や形容語の重複などを省略したからです。それでもまだくどいと感じる読者もあるかと思いますが、中世の詩の気分をそこにみただければさむいのです。したがって、この本は、けっして原作の抄訳やダイ

ジェストではありません。

ソ連邦では一九三七年にルスタヴェリ七百五十年祭がもよおされました。これを機会に原作の完全なロシア語訳をめざす委員会が組織され、りっぱな仕事すすめられてきました。

この本のテキストとしたのは、モスクワの国立芸術文学出版所から一九四一年に発行されたシャルワ・ヌツビゼの訳本および同出版所から一九五三年に改訂版として再刊されたゲオルギイ・ツアガレリの訳本であります。

一九五五年八月

袋

一

平

目次

一、運命の二騎士

アラビア王ロステワシ	一六
とらの皮を着たふしぎな騎士	二四
王女チナチンの秘密の命令	三〇
アフタンジルの遺言	三六
さすらいの旅路のはてに	四二

洞窟どうくつの出会いであい.....五

友情ゆうじょうのちかい.....六

二、タリエールの物語ものがたり

インド王おうパルサダン.....六

美しい若木わかぎのなやみ.....七

タリエールと王女おうじよダレジャン・ネスタン.....九

ハタイ戦争せんそうのてんまつ.....六

勝利しょうりのうたげ.....五

意外いがいなむこえらび.....一〇

ホラズム王子おうじの死し.....一〇

王女ネスタンおうじよがさらわれたてんまつ

フリドンの都みやこ

王女おうじよをたずねて十年ねん

信義しんぎの別れわか

三、アフタンジルの歌うた

アフタンジル、アラビアに帰るかえ

大臣だいじんのとりなしの失敗しつぱい

アフタンジルの脱走だつそう

二騎士にきしの再会さいかい

十一年じゅうねんめの旅たびたち

一二四

一三〇

一三五

一三三

一三七

一四四

一五〇

一五九

一七三

フリドンの友情……………二七

四、グランシヤロの花

キヤラパンと海賊……………二九

ファチマのもてなし……………二九

入江やしきの殺人……………三〇

ネスタンが商人の妻に救われたてんまつ……………三〇

ウセイソのうらざりとネスタンの逃走……………三六

魔天城のとりこ……………三六

空飛ぶ使者……………三三

三つの手紙……………二四

五、キャラバンの道みち

洞窟宝庫どうくつほうこ……………

二四九

三騎士の顔あわせきしのかお……………

二五〇

摩天城の戦いまてんじょうたたか……………

二六〇

浴海国の会合えんかいこくかいごう……………

二六六

ムリガザンザリの相談そうだん……………

二七三

キャラバンはアラビアに着くつ……………

二七九

アフタンジルとチナチンの結婚けつこん……………

二八七

インド平定へいてい……………

二九三

むすびのことば……………

二九七

この物語のおもな人々

タリエール

タリエール



この物語の主人公。インドの

一領主の子で、

インド王バルサ

ダンの総司令

官。封建時代の

騎士の肉体の特

長——力と美と

をかねそなえている。そのおどろくべき力は、はじめてかれが登場するアラビア王の狩りの現場で見られる。たんに強いばかりではなく、ハタイ戦争や摩天城攻略の場合に見られるように、天才的な戦術家

でもある。一面また人情ぶかく、心がひろい。うらぎったハタイ王のいのちを助けたりする。ものすごい肉体の力にもすごい愛の力がこたえている。かれはもえる感情の人である。はじめて王女ネスタンを見て氣を失い、またさらわれた王女をしたって、泣き狂う。性格のつりあいがとれていない。それはかれのはげしい情熱と愛の力のためである。

アフタンジル

この物語の副主人公であるが、むしろ主人公よりも活躍する。かれは騎士の理想のあらわれである。アラビア王ロステワンの総司令官。タリエールの特長は力が美にあるとすれば、アフタンジルの特長は力と知恵にある。強く勇敢であると同時に、よくしんぼうし、よく判断する。やくそくをまもり、しようじきで、一本氣である。しかし、必要があるとき

には、アスマー

トとの出会い、

あるいはフアチ

マとのかけひき

の場面に見られ

るように、外交

的手腕をもちあ

わす。また星を

見て遠い人をし

うして肉体の強

調和されて、この人物像に見いだされる。

アフタンジル



ダレジャン・ネスタン

インド王バルサダンの王女。タリエールはめすの
とらを見て王女のことを思い出すが、まったくこの
人には残忍と紙ひとえの大きい内部の力がある。ホ
ラズム王子を殺す一節には、政治的な考えもみとめ

られる。つまり、国の仕事にも興味がある女性であ

る。それだけにしっかりした性格の持ち主で、とら

われの長い苦し

い生活にもびく

ともしない。タ

リエールへの手

紙に見られるよ

うな、感じやす

いやさしい女心

もゆたかにある。

ダレジャン・ネスタン



チナチン

アラビア王ロステワンの王女。ネスタンとは人が
らがまるでちがう。やさしく、ものしずかで、内気
な性質である。世の中を見る目はあかるく、人にた
いするおもしろいやりが深い。父のなげきをとりのぞこ
うとして、アフタンジルをあてのない遠い旅へおく

チナチン



り出す。しかも
かならずかれが
帰ることを信じ
て、いく年でも
待っている。こ
のあかるい性格
がかの女をアフ
タンジルに近づ

けるもとになっている。

ヌラジン・フリドン

ムリガザンザリの領主(王)。若く、勇敢で、宴会
と狩りが大すきで、友としては気のおけない、しか
もたのもしい騎士。タリエールに助けられた恩義を
わすれず、そのかた腕となり、アフタンジルと力を
あわせて、とらわれの王女のすくい出しに部隊をひ
きいてはせむかう。

ロステワン



ヌラジン・フリドン

アラビア

ロステワン

王。かぎり
ない富を持
ち、しかも
公平な君主。
善良で、心
は大きく、
賢明で、も
のおしみし



ない。ただほこりが高く、おこりっぽい。そのため、あやしい騎士にほこりを傷つけられ、そこからこの物語のいとぐちがひらかれる。客にたのまれては、いやといえないものがたさは、またこの物語をほからかな結末へとみちびく。

アスマート

ネスタンの侍

アスマート

女(どれい)。ネスタンに献身的につかえ、後にはタリエールに献身的につかえる純真な女性。世の中のどんな



おそろしいことも苦しいことも、かの女のひとすじの気持をまげることではできない。かの女が経験した

ような生活は、おそらく世界のどんな人でもたえることはできないであろう。この物語では特に感動的な人物である。

ファチマ

グランシャロの大商人の妻。この物語ではもつとも市民的な、おもしろい人物である。かるはずみで、むら気で、とんでもないことをしかすが、本性はきわめて善良で、同情深い。また機智にも富んでいる。かの女の

ファチマ

登場は南の国の風物をおおりに高くはこんで、物語の現実性と色彩をつよめている。



虎とらの皮かわを着ぎた勇ゆう士し

原作げんさく・ルスタヴエリ
袋ふくろ 一いつ 平へい

一、運命の二騎士

アラビア王ロステワン

アラビアにロステワンという王さまがいた。たいへんなお金持で、そのうえかしく、公平で、おきてをよくまもり、戦争には、とても強かった。

王さまには王子がなかつたけれど、チナチンという王女があつた。それは太陽もその光をうしなうほど、美しい娘であつた。ひと目見て、胸をとどろかせない人はなかつた。よほどの賢者か詩人でなければ、王女をほめることばを見つけることはできなかつた。

ある日、王さまは大臣はじめ諸侯を呼び集めて、会議をひらいた。

「ばらも花のときが過ぎればかれ、それにかわつて、新しいばらが庭をかざらなければならぬ。私の日はもうかたむいた。老いはどんな病氣よりもつらい。王者の光もくらい地獄に消えていこう

としている。どうしたらいいか？　どうかえんりよのない意見をのべてもらいたい。」

「なにをおっしゃいます、王さま！」と、大臣たちはいった。「ばらはすこしもしぼんではおりません。どんな会議よりも、王さまのおことは重い。お心にかけているとおりに——王女さまにお位をおゆずりあそばさすよう。なるほど、王女さまは女性ではありませんが、王位は天からさずかるもの。それに、おせじではございません——チナチンさまは王冠をいただくにまったくふさわしいおかた。ライオンはわが子が男性であるか、女性であるかに、なんの区別をいたしませんよう！」

まもなくアラビアじゆうに王さまのおふれがまわった。

——神のおぼしめしによつて、私はわが娘に王位をゆずる。かの女は人々すべてに幸福をあたえるであろう。かの女の即位を祝つて、もれなくきたり集まるように！

アラビアの人々はこのこらず王さまの宮殿にやつてきた。アフタンジルもそのひとりであつた。かれは諸侯の子で、軍の総司令官、いとすぎのようにすらりとした勇士であつたが、心にはふかい傷をおつていた。かれはチナチンを見てから、たえずそのおもかげに苦しめられていた。

——しかしこれからは、あの水晶のお顔をたびたび見るおりがあるう。私の沈んだほおにも、

みがさすことがあるかもしれぬ。

総理大臣ソグラートが進み出て、王女を玉座に案内した。父王みずから、わが娘に金のかんむり

をかぶせ、王標を手わたした。それから王も他の人々も数歩さがって、いまはもう女王になつたその人に敬礼した。同時にらつば、ふえ、たいこがいつせいにやさしく鳴った。チナチンは目にいっぱいなみだをたたえて、黒いまつ毛をふせた。

「泣いてはいけない！」と、王さまはいった。「おまえはアラビアの女王になつたのではないか。この王国をおまえの手でかしくまもり育てていかなければならない。太陽は雑草をもばらをもいちように照らす。身分の高い人と貧しい人とに区別があつてはならない。思いやりはどんな悪い人の心をもやわらげる。家はどんなお客にもあけはなしであるように。人に分けあたえるものは、おまえのもの、かくしておくものは、永遠に失われるであらう！」

父のおしえはふかくチナチンの心にしみた。戴冠式のあとはずばらしい祝宴となつた。父王も陽気にさわいだ。歌声がひびいた。

チナチンは子どものころから親しんでいた家庭教師を玉座に呼びよせて、いった。

「お倉の封印をみんなやぶって、王家の財宝をのこらずここへはこび出すよう、けらいたちにいをつけてください！」

はこび出された。チナチンはそれを宮廷の人々にも、一般の人々にも、また通りがかりのこじきにも、おしみなく分けてやった。



「あたしはさつそく父のおしえにしたがいます。お倉はぜんぶひらきます。どなたでも、おすきなものをお自由にとおとりください。それから、うまやの馬もはなちます。」

数知れない金銀たからものは、雪がふるように群集の上にもふりまかれた。うまやからたくましいアラビア馬を引き出すものもあった。老いたるも、若きも、男も、女も、むちゆうになつてこれらのおくりものにとびついた。ただ父王の顔にはなにかくらいかげがさした。

「王さまが急におふさぎのようすではありませんか。」と、ソグラートはアフタンジルをかえりみた。「けらいどもや客人をおしかりになることができないので、それでごきげんがわるくなつたのではないかしら？」

「そうかもしれせん。」と、アフタンジルはこたえた。「では王さまをおなぐさめしましょう。それが私どものつとめなのですから。」

大きかずきをささげて、ソグラート、つづいてアフタンジルがテーブルから立ちあがつた。

「王さまのお氣持はよくわかります。王女さまが財宝をまき散らし、お国の金貨はたちまちからになつて、アラビアの力は失われたのですから。そのおなげきはもつともですが……。」

「待て！」ロステワンは悲しげな微笑をかくそうともしないで、まっすぐにいった。「だれが私のことをけちだといふのか、だれが私がまちがつたといふのか！ 私の顔にかげがさしたといふな

ら、それは私が年とって、お墓の入口に立っているからなのだ。矢でまを射り、かけながら玉を投げて、アフタンジルにひけをとらない、この父のようなむすこを、天がさずけてくださらなかつたからだ。」

王さまのことを聞いて、アフタンジルはにやりと笑った。歯が真珠のように光った。

「こら、なにが、おかしい？」と、王さまはとがめた。「あるじにたいして、ぶれいではないか！」
「そのわけはいま申しあげます。」と、アフタンジルはこたえた。「ただその前に、私がしようじきになにを申ししても、けつしておとがめにならないことを、おやくそくねがいたいのです。」

「よし、とがめないから、なんなりと試してみなさい。」

「王さまはただいま、競技にかけては私にひけをとらない、とおっしゃいました。しかし勝負する前に自慢するのは、へたな選手にかぎります。射撃にしろ、なんにしろ、優勝はわぎのすぐれたほうにあたえられるのが、この道のさだめです。」

「そのことは気にいった。私はおまえの挑戦を受け、弓矢にものをいわせよう！ 審判役には二人の狩猟士を任命する。かれらにこの話の結末を見てもらおう。」

歌声をやぶって、どっと徹声があがった。王さまもうきうきとし、客たちもよろこんだ。

「命令する——負けたものは三日間、帽子をかぶらないこと。」と、王さまはいった。「それから十

二名の狩獵士は從者たちといつしよに矢箱を持っていき、たえず私たちに矢をわたすこと。かれらは獲物の数を公平にかんじようしなればならない。アフタンジルのけらい、シエルマジンなら、ひとりでもやつてのけられるのだが、ここにいないのはざんねんだ。」

王さまはさらにどれいたちに、夜明けとともに野原にけものどもを追い出すよう、また親衛隊の人々は遠巻きにけいかいするよう、いつけた。山のようにごちそうがならび、川のように飲みものがあふれたにぎやかな宴会は、これで一時、中休みとなつた。

その日もくれて、あくる朝、はるかにあかつきの光がさしてきたころ、アフタンジルはかがやく金の帽子をいただいて、馬を城門にのりつけた。アラビア王も狩りのしたくに身をかためて、やはり馬にのつてあらわれた。原のかなたには、けものを追いたてる勢子たちのやりがきらきら光つていた。騎士たちはときの声をあげ、口ぶえをならして、原をかけた。とび出したけものめがけて、八方から矢が飛んだ。

足のはやい野性のしか、ろば、やきなどがむらがつて、めんくらつて走つた。王さまもアフタンジルもつかれを知らない腕で弓をひきしぼつた。獲物をねらつた。まきあがるほこりが霧のように日の光をさえぎつた。ふみあらされた草原は血に染まつた。からになつた矢筒は、すぐ從者たちによつて補充された。けものどもは野のはてへ追いつめられた。野はまがりくねつた川で終り、けわ

しい岩の崖辺のむこうは、馬では進めない密林につらなっていた。けものどもはこの密林に逃げこんだので、これで狩りは一だんらくとなつた。「この勝負は私のものらしいよ！」

「獲物は私のほうが多いようですがね！」

王さまとアフタンジルとはたがいにそんなじょうだんをいいあつた。

「さて、おまえたち。」と、王さまは狩猟士たちに向つた。「この勝負、どちらが勝ちか、えんりよなしに申してみよ。」

「たとえおとがめをこうむりましようとも、この競技、王さまの負けはだれの目にもあきらかである、と申しあげるよりほかはございません。アフタンジルが走りながら射かける矢は、一つもはずれなく相手にあたり、かならず一発で仕止めております。ところが王さまの矢は、私たちが地面から引きぬくのほねをおつたのでございます。」

ロステワンはなさけないような顔をしたが、心のなかではうれしかった。——わが教え子よ、よくぞ勝つた！ これほどの腕まえ、世にならぶものがあるうか！

王さまも、アフタンジルも、従者や狩猟士たちも、川岸においてくつろいだ。水にはいつてたわむれるものもあり、岩にこしかけて、森の景色をながめるものもあつた。

とらの皮を着たふしぎな騎士

森のはずれの川岸で、泣いている男があった。そばには真珠をちりばめた馬具をつけた黒い馬が立っていた。男は見るからにどうどうとした騎士で、上着のうえにまとったとらの皮、またとらの皮でつくられた帽子が、人の目をひいた。手にしたむちは手くびよりも太く、さきに金の彫刻のある柄がついていた。この騎士のほおを、あとからあとから涙が流れて、つららのように光った。

見知らぬ騎士は王さまの目にとまった。王さまは従者のひとりをやつて、かれを呼びむかえようとした。だが、川の流れをじつと見て、その黒い目から水晶の雨があふれている騎士に近づくと、従者はなにか気おくれして、ことばが口に出なかつた。

「もし、王さまのお召しですが……。」命令の重いことをかえりみて、従者はやつとささやいた。

聞えたのか、聞えなかつたのか、騎士は顔もあげないで、もの思いに沈んでいた。ここまでひびいてくる王さまの一行のにぎやかなさわざも、かれの耳にははらないようであった。従者はもう一度、声を大きくしてかれを呼んだ。しかし騎士は、もえさかるほのおに心を焼かれてでもいるかのように、ただその美しい顔をなみだでぬらすばかりであった。

従者の報告を聞くと、ロステワンのひたいはさつとぐもつた。王さまは十二人の狩猟士、つまり弓の名人たちを呼んで、おごそかに命じた。

「武器をとって、すぐ命令をはたせ！ その強情ものの目をさまし、ここへつれてこい！」
騎士ははじめて人々の近づくけいを感じた。かれはぶるつと身ぶるいして顔をあげ、武装した一隊がせまるのを見た。かれははじめて、低くうなった。

「しまつた！」

かた手でなみだをはらうと、こしにさした剣と矢筒をなおして、馬にとびのり——人々の呼ぶ声を風にながして、あやしい騎士はいちもくさんにかけて出した。

親衛隊の兵士たちはかれをとりおさえようと、そのあとを追つた。だがあるものは地面にたたきおとされ、あるものは馬にけられ、矢を放とうとするものはむちでなぎ倒された。王さまは激怒して、新の一隊をおくり出したが、これもかたつばしから投げ飛ばされた。王さまは若いアフタンジルをしたがえて、みずからかれを追いかけた。

騎士はみるみる遠ざかつた。その馬は伝説にある、つばさを持った黒い天馬のように、宙を飛んで、あつというまもなく、天にのぼつたか、地にもぐつたか、すがたを消した。

人々はいつまでも野のはてからはてに馬を走らせて、騎士のゆくえをさがした。人々は死者を悲

しみ、傷ついたものの手あてをした。

「せつかくの樂しみがだいなしになつた。」と、王さまはいつた。「私は心にいやしがたい手傷をうけた。生涯のよろこびも毒された。これは神のおぼしめしなのであろうか？」

王さまは人々を集めて城にひきあげた。祝宴はとりやめとなり、客たちは散つた。ふえやらつぱの音はひびかず、ハーブやシンバルは沈黙した。ことのあらましを聞いて、チナチンは心配した。

「それで、王さまはおやすみになりましたか、それとも、なにかご相談でも？」

「ご寢所におはいりになつたまま、悲しんでおられます。」と、役人はとたえた。「アフタンジルさまのほか、どなたもお近づけになりません。」

「ではあたしもおじゃましないことにしましょう。ただ、ちよつとお目にかかりたい、とだけ王さまにつたえてください。」

これを聞くと、王さまは役人にいつた。

「私も娘に会いたい。あれなら私の悲しみを吹きはらつてくれるだろう。私の心のいたでをなおしてくるだろう。そしてこれからの毎日をおたやかにしてくれるようにしてくれるかもしれぬ。」

まもなくチナチンがあらわれた。くらしい夜に月がのぼつたように、へやの中はいっぺんにあかるくなつた。

「おお、娘！ 私はきょう、ひどいめにあった。それもおまえの声を聞けば、かるく忘れ去るではあろうが、まあこういうわけだ。」と、王さまはくわしくあやしい騎士の事件を物語った。

「この私にキスもせず、まるで悪魔のように消えうせた。夢か、うつつか、自分でもわからない。だれかに毒でももられたかのように、私は苦しい。私は人のわらいものになる。どうして、このままおめおめと生きていかれようか？」

「王さま！ そう思いつめてはいけません！」と、王女はいった。「人々をいたわる人に、なんの罪がございましょう？ 人々のために善をなす人に、なんで悪が手を出すでしょう？ もしこの世にそういう騎士がいるならば、だれかしらと会わないはずはなく、したがってかれをさがす道もあるはずです。またもしそれが悪魔のたぐいであるならば、そんなことでよくよするのはおろかなこと、きれいに頭からふりすてて、お気持ちをとりなおすことができましょう。そこでさっそく急使を八方へおつかわしになることです。かれらはやがて帰ってきて、その騎士がなにものであるか——人の子か、それとも遠い国の幽霊かを、ご報告するでしょう。」

宮廷の役人たちはロステワンの命令をうけとった。

「ただちに急使を八方へおくり、怪騎士のゆくえをつきとめよ！ どうしてもいけない諸国へは手紙を出して、返事を求めよ。」



急使^{きんし}たちは見^み知らぬ道^{みち}々へと散^ちつていった。いたるところで騎士^{きし}をさがし、まる一年^{ねん}もさまよつたけれど、かれのうわさをさえ耳^{みみ}にしたものはいなかった。急使^{きんし}たちはうかぬ顔^{かお}をしてもどつてきた。

「申しあげます。」と、かれらはいった。「うえもかわきもいとわず、さがしましたが、だれひとり、とらの皮^{かわ}を着^また騎士^{きし}に会^あつたものはございません。たとえ会^あつたにしろ、私^{わたし}どもの力^{ちから}ではおよびません。どうぞかわりのものをおつかわしくくださいますよう。」

「なるほど、王女^{おうじよ}のいったことは正^{ただ}しかった。」と、王^{おう}さまはいった。「悪魔^{あくま}がすがたをあらわして、私^{わたし}たちを悲^{かな}しい運命^{うんめい}につきおとそうとしたにちがいない。よし、気持^{きもち}をとりなおそう。王^{おう}の顔^{かほ}にくらいかけがあつていいわけはない!」

いやな気分^{きぶん}をはらいのけようと、ふたたび宴会^{えんかい}をひらき、楽師^{がくし}や歌手^{かて}や道化^{どうけ}を呼^よんで、陽気^{やうき}にさわぎ、お客^{きやく}たちにはまたほしいものをいくらでも分けあたえた。

王女^{おうじよ}チナチンの秘密^{ひみつ}の命令^{めいれい}

アフタンジルはわがやしきにくつろいで、たてごとの糸^{いと}をかきならしながら、歌^{うた}を口^{くち}ずさんでい

た。ふいに王女の黒人の召使いが低くこしをかがめてはいってきて、王女がお呼びであることを告げた。

アフタンジルは夢かとはばかりよろこんだ。礼装を美々しくとのえて、宮廷にাগり、王女の屈間へ案内された。

王女はてんの毛皮のマントをはおり、寶石かがやくかぶりものをいただいて、神々しいばかりに見えた。巻き髪がまつわる雪よりも白いうなじは、目にまぶしかった。アフタンジルは王女のすすめるこしかけにすわった。

「お目にかかれて、これほどのしあわせはありません。」と、かれはいった。「かがやく太陽に会えば、月も光をうしないます。あなたの前では、私の心はただあやしくみだれるばかりです。お氣にかかることでもあれば、なんなりとお命じください。」

「その氣にかかることで、おいでをねがったのです。」と、王女はいった。「あなたはふかい秘密をかくしておられます。あなたのお心には、あたしのおもかげがきざみつけられています。あたしはよくそれを知っています。しかし、ただいまから、あなたは二重の義務をはたさなければなりません。第一に、あなたはあたしたちの第一のけらいです。第二に、あなたはあたしの騎士です。すぐ、あのあやしい騎士をさがしに出発してください。あの狩りの日このかた、父の胸からは、一ときも

にがい思い出が去らないのです。父は苦しみ、あたしの心も黒い雲にとぎされています。かれが悪魔でないかぎり、草の根をわけてもさがし出し、つかまえてください。あなたよりほかに、それができる勇士はいません。期限は三年。成功してお帰りになるその日こそ、生涯に二度とない、いちばんしあわせな日となるでしょう。すみれは咲き、道にばらをして、あたしはあなたをむかえます。あなたを夫と呼ぶのは、その日です。」

「そのおことばをいただいて、私になんのいなやがありませんよう？」と、アフタンジルはこたえた。「私はいまから永久にあなたのだれいす。私はすすんでこのいのちをささげます。あなたはかぎりないよろこびで私の心をみたくさいました。どんな星々よりも強いあなたの光に照らされて、私は世界のはてばてまでも、へめぐってまいります。」

ちかひのことばはひびき、ふたりの話はそれからそれへとつきなかつた。

別れのときがきた。別れはつらかつた。かれは去りぎわに、もう一度王女のほろをふりかえつた。やりを突きさされたように、胸がいたんだ。

「くれぐれもお忘れないように。」と、王女はいった。「これはあくまでも、あなたとあたしのあいだだけの秘密です。王さまはあのとおりのかたですから、もしあなたが出發するわけを知つたら、かならずおとめになるにきまつています。」

「はい、そのことなら、けっしてごしんばいにはおよびません。」とこたえて、アフタンジルは王女の前をさがった。

——もうこれで、いつ王女に会えるかはわからない。それまでは真珠もルビーも光を失い、こはくはいっそう黄色くなるだろう。だが愛する人へのちをささげるのは、騎士道のおきてなのだ。

その夜、かれのまぶたはよく合わなかった。うとうとと王女のすがたを見て、さめれば二十倍に悲しさがこみあげた。みじかい夢のあいだにも、なみだはほおをあふれおちた。

夜があげると、かれは身じたくをととのえて、ロステワンの城へ急いだ。役人の手をへて、アフタンジルの書面が王さまにわたされた。

《王さま！ 将官や兵隊がこしにさしている剣はなんのためでありましょう？ それはうらぎりを罰するためであります。いま、まわりの国々はざわついていきます。それらの国々の王に、よくこのことを知らせる必要があります。そのために私はまわりの国々から、さらにそのさきさきまで、くまなくめぐってまいろうと思えます。私はいたところに、チナチンのおん名を高くあげるつもりです。剣をとってはむかうものはこらしめをうけ、おだやかにしたがるものは父のおめぐみがそそがれるでしょう。みちみちも急使をさしたてて、報告とみづぎものを、おとどけいたします。》

王さまはこれを読むと、すぐアフタンジルを呼び出して、かれに門出の祝福をあたえた。

「おまえに敵するものはあるまい。おまえはライオンのようにはしこくて、強い。おまえの知恵はわき出る泉のようにゆたかである。元気でいっておいで。ただ、できるだけ早く帰ってきて、私たちにいつまでも別離の苦しみをなめさせておかないように！」

「そのように過ぎたおほめのおことばには私はなれておりません。」と、アフタンジルは低くおじぎした。「もし私のいくさきさきが王さまのご威光で照らされてあれば、私はかならずぶじにたち帰り、ふたたび王さまにお目にかかることができるでしょう。」

愛するわが子にするように、王さまはアフタンジルをだいて、キスした。アフタンジルは城をあとにした。王さまは目になみだをたたえて、そのあとをいつまでも見おくっていた。

アフタンジルは大国の光榮と軍の將たるほこりとをもつて、チナチンのおもかげをあかるく胸に抱きながら、二十日のあいだ、夜もねむらず、昼も休まないで、ただひとりあちこちに馬を走らせた。ついにかれは祖国の国境に、おのが領地にたどり着いた。人々はこぞつてかれを出むかえ、数数のおくりものをし、宴會にと招いたけれど、かれは道を急いで、ほかのことはかえりみなかつた。ただ城には三日だけ滞在した。それは天然の要害をなす岩山の上にとられて、国のまもりとなっている城であった。かれはそのあいだ狩りを楽しみ、忠実な部將シエルマジンと話すことをよろこんでいた。シエルマジンはあるじと同じくらしい年配で、あるじの信賴にあたいするりっぱなさむ

らいであった。

「シエルマジン、はずがしいことではあるが、きょうはすつかりおまえにうちあけるよ。」と、ア
フタンジルはいった。「いままではどんなことでもおまえにかくしておいたことはなかった。だが、
ひそかに流す涙だけは見せなかった。いま、そのおかたはやさしい心をひらいて、苦しんでいる
魂をおすくいなされた。のぞみの光は見え、私の気持はほのぼのとあかるくなった。そのおかた
はこうお命じになった。

「國々をへめぐって、矢のように飛んで消えたそのあやしい騎士をさがすように。そうすればあた
しはおまえを愛する夫にえらぶであらう。」

王さまの命令にしたかうのは、部下の第一の義務。あるじに忠実につかえるのは、けらいのつと
め。どんな攻撃も、どんな敵も、おそれてはならない！ おまえは私にいちばん身近い人々のひと
り、しかもおまえいじょうに信頼するものはいない。これだけのことはくれぐれもたのんでおく、
私の土地、軍隊、そしてこの城をいっさいおまえにまかせるから、よくこれをまもり、戦いが
おこったときは親衛隊を指揮するように。」

シエルマジンは目をしばたいて、あるじの顔を見た。それには気がつかないふりをして、アフ
タンジルをつづけた。

「……いいか、部隊長たちには命令をくだし、王さまには報告を出し、私には手紙を書いて急使をおくるように。なにごとにも勇氣を失ってはならない。戦いするときでも、また狩りのときでも、私
のことを思い出して、私に見なうことが必要である。ただこの話はかたく秘密にしたままで、三
年待て。あらしがポプラをおらなかつたら、私は帰つてくるだろう。帰つてこなかつたら、その日
を命日に供養をなし、王さまには私かもはやお目にかかれないこと、不運のさかずきを飲みほし
て、私が異國の上になつたことを、申しあげてくれ。それから貧しい人々には、金、銀、銅の財宝
をおしみなくめぐむように。神の前では司祭者となり、私の子どものころを思い出して、母のよ
うに、ねんごろに回向をたのむ。」

聞いているうちにシエルマジンの顔は苦しげにゆがんできた。かれは胸をしめつけられて、思わ
ず大つぶのなみだをばらはらとおとした。

「あなたにおきざりにされて、どうして私はくらしていけましよう？」と、シエルマジンはいった。
「しかし、どんなにおねがいしても、もうあなたをおひきとめすることはできません。あなたにか
わつて國をおさめる？ なにごとでも、あなたに見ならつてやる？ そんなことが私にできるで
しょうか？ いいえ、とても、とても。そのくらいなら、私は地下に横たわるほうがましです。ど
うぞ、私をどいつしよにつれていってください。どこまでもおともすることを許してください！」



「これはもうきまつた話、兄弟のちかひのように、したがわなければならぬのだ。」と、アフタ
ンジルはこたえた。「もともと愛のほのおに巻かれたものは、ひとりぼっちでいくのがならぬ。美
しい真珠のためには、それ相当の代価を支払うもの。不信と邪悪の心にはやいばが突きさされよ
う！ あるじの秘密をまもること、それはけらいの大きな名譽というもの。しかもおまえには私に
かわつてどんな仕事でもする力がある。敵軍を追いはらつて、王国のまもりをかためるように。お
そらく私は帰つてくるだろう——ほんのすこしのあいだ待つだけではないか。不幸がくるときは、
ひとりであろうと、百人であろうと、同じこと。私はひとりでも不幸にうち勝ち、戦いには、ひる
まないつもりだ。ただ三年たつてももどらないそのときには、世になきものと思つてくれ——とも
あれ、きょうからは、貴族も軍隊もすべておまえに属するのだ。」

アフタンジルの遺言

アフタンジルは書いた——。

「熱心につとめにはげむわが家の子たち、教師たち、わが親しき友に告げる！」

諸君はわが道、わが思想に、かげのように離れられない人々であつた。わが城に集まつて、この

書面を聞いていただきたい。

まるで無から有が生ずるかのようになり、ふいに思いついて、私は遺言状を書いた。この遺言状は私の運命をきめるものである。豪華なうたげよりも、愉快な競技よりも、なおさすらいの旅をよしとえらんで、私はここを去る。私にしたがうものは弓と矢だけである。

私はロステワン王とその国土とをあとにする。私は一介の巡礼のように、遠い国々をさまよい歩く。私は諸君を心から信じ、わが王国が敵のかかるとにふみにじられることのないようにと、ただそれだけをいのる。

わが領地はシエルマジンにまもらせる。私がぶじに帰るか、土の下に横たわるか——かれはそれを待つであろう。太陽が花咲く庭をいつくしむように、かれはすべての人をいつくしみ、手でろうをやわらげるように、罪をおかした人を正すであろう。

私にわかる人は、私にとって兄弟よりもなお親しく、なおとうとい。私にと同様に、諸君はこの人に仕えなければならない。呼び出しがあつたときは、私をてほんに思い出して、勇気をもって出陣しなければならぬ。

三年たつてもなお私が帰らないときは、私のためにいっぺんの回向をおねがいする。書き終つて、巻きおさめると、アフタンジルは金のおびをしめて立ちあがり、別れのつらさをお

ししずめて、親衛隊の兵士たちを呼んだ。

「私の馬を引け！」

兵士たちは、狩りのおともでもするつもりで、あるじのあとにつづいた。

「もういい。城へもどれ！ 私は、きょうはひとりで行ってくる。」

アフタンジルはいつもとちがつて、おともをつれず、ただひとり、馬に拍車をあてると、まだ霧がけむっている草原を、あらしのようにかけ去った。

兵士たちはぼんやりとそのあとを見おくった。どうしていいのか、わからなかった。だれがかれに追いつくことができよう？ だれの腕がかれをつかまえることができるだろうか？ 遠い旅の道で、敵の剣でもかれをおびやかすことはできないだろう。

日が沈むころ、側近の人々は狩りから帰ってきた。城にアフタンジルのすがたはなかった。あるじに会うよろこびは、しんばいと不安にかわった。かれをさがすために、足のはやい馬をえらんで、多くの人々が八方へかけ散った。

「ライオンさながらのおかた！ あれほどの大将にかわる人を、どうしておむかえすることができよう！」

これがだれの胸にもわいたうたがいであった。人々は草原のはてはてまでもさがしまわった。道

という道をのこらずしらべた。だが、すべてはむだに終つた。戦場できたえた将兵たちも、熱いなみだにかきくれた。

人々ががっかりして、みな城にもどつてきたところで、シエルマジンに會議をひらいた。かれは長い巻きものをひろげて、つらそうに目をおし、それから声をあげて読みはじめた。集まつた人はあるじの遺言を聞いた。服がやぶけるばかりに、胸をかきむしつた。

「アフタンジルさまのいない生活は生活ではない！」と、かれらはシエルマジンにいった。「しかし、かれが財産と城とをあなたにまかせたのは正しいことです。私たちはあなたのどんな命令にもしたがって、法の力を尊重しましょう。」

かれらはあらためてシエルマジンに敬礼して、臣下のちかいをたてた。

さすらいの旅路のはてに

《ばらがこおる寒さにほろびたなら、なんと悲しいことであろう。》

聖書を書いた人のひとり、エズラの詩のなかでは、そううたわれている。

祖国をあとにさすらいの旅に出た、ルビーのようななくちびるとポブラのようなからだをもつたそ

の人の苦しみは、ちょうどこの詩のことばにあてはまる。

アフタンジルは野を越え、川を越えて、アラビア人の国をすぎ、外国へ進んだ。困難はとうてい語るも書くもできないほどであった。まつ毛は霜にあったように、ほおにこおりついた。

——なぜ、このような苦しみにあうのだろうか？ 生きているよろこびも、ふえやことの音も、わすれてしまった……。

この世におさらばしようと、いくど剣をとりあげたか知れなかった。だが、そのたびにチナチンのおもかげが、かれの腕をおさえた。

——王女に会えば、私はまた幸福になれるのだ！

そう思つて、かれは氣をとりなおした。

——しっかりとしろ！ まだ道は遠いんだぞ！

アフタンジルは自分をしかりつけて、またさきへ馬を進めた。遠い国々、見知らぬ外地をいくつかすぎていった。かれは注意してとらの皮を着た騎士のことを人々にたずねた。夜は砂漠で、手まくらしてねた。死ぬほうがずっと楽だ、などと考えるのは、そんなときであった。

世界の道はつきた。アフタンジルははるかかの空をながめた。この星々の下に、かれが通らない土地はもうなかつた。それなのに、かれの苦しみをとりのぞいてくれるその人には、ついに出会わな

かった。そのあいだに多くの年月はながれて、いまはやくそくの三年に、あと三カ月しか残っていないなかつた。

それは地のはての砂漠の国であつた。だれひとり通る人もなく、空は氣味わるいほど高かつた。ただひとり、砂漠をさまようさびしきは、フアフル―テツジン・グルガニの詩へ「ヴィスとラミン」にうたわれた、ヴィス姫とラミンの別離のいたましさにもおとらないものがあつた。

その夜のやどりをさがすために、かれは高い山にさしかかつた。山のむこうにはまだ砂漠がひろがつていた。この砂漠を通るには七日間かかる計算であつた。山のふもとには水のきれいな川がながれ、川がせばまつて急流となるあたりの兩岸には、森がくろぐろとしげつていた。

アフタンジルは森のはずれにすわつて、ゆびおりかぞえてみた。あとわずかの日しか残つていない。かれはがまんできなくなつて、泣いた。むなしく過ぎ去つた三年近い年月が、いたいたしく思いかえされた。なみだもかれるか、と思われたとき、ふとみような考えがうかんだ。

なにか急にいいことがおこるのではないかしら！ ありそうもないことがふつてわき、善が悪にかわるということもある！ へんに胸さわぎするのはなぜだらう？

しかしかれはすぐ、そんなあてにならない考えを吹き消して、自分に聞いてみた。

それよりも、これからどうするかを決めることがだいじだ。これで探索をうちきるか？ そ



れなら、なんのために三年近くもはてからはてへとさまよい歩いたのか？ いたずらに外国で月日をおくつて、あやしい騎士だに見ないまま、なんでおめおめ、かのきみのもとへ帰ることができか？ それができなければ、探索をつづけるよりほかはない。よし、つづけよう。だが、もう残る日数がない。期限はきれようとしている。砂漠をひとりさがしまわっているあいだに、その日がきて、私が帰らなかつたならば、私の運命はたちどころにきまつてしまふだろう。シエルマジンがわるい報告を持つて、ロステワン王の前にあらわれるにちがいない。私は死んだことになる。王さまはなげきのうちに喪を発し、私の運のつたなさをあわれんでくださる。そうなつたら、ますます帰れなくなるではないか？ しかもなんのおみやげもなく、手ぶらのままで！

考えれば考えるほど、かれの心はまっ黒なやみにとぎされて、苦しみもだえた。

——神よ、あなたの審判は正しいのだろうか？ 私のさすらいの苦しみは、ほんとにむなしかつたのだろうか？ よろこびをうばい、心にふかく悲しみを植えつけた。それでもなお私のなげきは終るときがないのだろうか？

かれは自分に強くい聞かせた。

——どんな苦しみもたえしのべ！ 気おちしてはならぬ！ 悲運に負けて、死を急ぐのは罪であらう。よく考えるがいい。神なしで、創造主なしで、なにができるというのか？ ないものはない

——それが神意ではないか。かの怪騎士については、うわさすらも聞かなかつた。私は空の下にあるものをのこらず見、いたるところへいった。もはやかれを見つけるといふ希望のかけらもない。悪魔がかりに人間のすがたであらわれたとき、これをカッジ（魔法つかい）といつて、人々はおおされた。カッジをつかまえることはできない。かれがカッジでなかつた、とだれが保証するのか？

アフタンジルはまだ力が残っているあいだに、帰ろうと心にきめた。川をわたり、森をすぎて、また砂漠へ出た。日もとどかないほど、遠い遠い道であつた。まる一ヵ月、生きた人を見ず、矢筒の矢を役だてる生きたけものも見なかつた。

かれみずからが、そのけもののように日をおくり、夜をおくつた。けもののように、うえにたえられなくなつた。やつと野牛のむれに出合つた。フィルドウシの詩《シヤフ・ナメ》の主人公ロス・トムの腕のように長い矢で、野牛をしとめた。アフタンジルはおおいそぎで、火打ち石をすつて、たき火をおこした。そこには林があり、草があつた。肉が焼けるあいだ、馬を草地にはなした。

かれはふとなにものかの近づくけいを感じた。見ると、数名が馬にのつて、こちらへ走つてくる。

——強盗かもしれないぞ、——とアフタンジルは考へた。——さもなければ、こんな無人の荒野をうろろろしているはずがない。

かれは弓に矢をつがえて、ねらいをつけた。ふたりの男がぐったりした若い男をかかえている。若い男のひたいに大きな傷口があいていて、まだ熱い血潮がふきだしている。頭はがくりとたれ、顔はろうのように青ざめている。「待て、強盗めら。」と、アフタンジルはさげんだ。「なんの用があつてここへきた？」

「とんでもない、だれが強盗だというんです。」と、かれらはこたえた。「はやく助けてください。助けることができないなら、せめて私たちに同情してください。いっしょに泣いてください。」

「いったい、どうしたというのだ？」アフタンジルはかれらのそばへいって、聞いた。「私たちは北中国のハタイのもので、三人兄弟です。国にいれば、国は大きいし、城はあるし、こんなひどいめにあうことはなかったのですが……。」と、かれらはこもごも話しました。

「狩りの獲物がすくなくてこまっていたおり、ふとこのへんのやぶに、けものや鳥がたくさん集まっている、というのを耳にした。兄弟はおおぜいの部下をひきつれて、川辺に野營の陣をはった。うわさにたがわず、おびたしいけものがむらがっていた。かれらは大よろこびで、野に谷に、矢のつづくかぎりけものを追った。狩りは三十日間も長びいた。」

兄弟の手なみは部下の兵隊たちもびっくりするほどすぐれていた。そこで獲物のかんじようをする段になると、たがいにじまんをはじめ、はては、けんかしそうにまでなつた。

《おれの腕まえがいちばんだ。》

《いちばんたくさんあたっているのは、おれの矢だ。》

《待て。》と、長兄がいった。《そんなことをいい争っていてもきりがない。たがいの腕まえをはつきり見せるのが早道じゃないか。それは別にむずかしいことではない。狩りのてだすけをする勢子たちをみんな痛してしまつて、おれたちだけで、じかにけもの一本勝負すればいい。》

しかの皮の上着をぬいで、一つにたばねて、それにたいして、兄弟はやくそくをした。このやくそくは神聖なものとされていた。やくそくができると、装備のせわをする従者三人だけを残して、あとの人々をぜんぶ、城へ帰した。

三人兄弟は三人の従者をつれて、森や谷間をかけめぐつた。まるで戦場のように、けものの血がながれた。鳥どもも、かれらの頭上をぶじに飛びすぎることではできなかった。

かれらの目に、とつぜん、こちらへ馬をとばしてくるひとりの騎士がうつつた。馬は黒毛で、足なみはながれるようによどみなく、のっている人の肩には、とらの毛がかかっていた。この人にくらべると、あかるい月さえ見おとりがした。目からは強いはずまが出て、近づくにしたがって、いつそらまぶしくなつた。

兄弟たちは自分のほこりを傷つけられたように感じた。

《ぶれいものめー》

そうさけんで、かれらは道に立ちふさがり、騎士をつかまえようとみがまえた。長兄は力ずくでおさえようとし、つぎの兄は馬にねらいをつけ、末の弟はまっさきに進み出て、体あたりをころみようとした。

騎士はおなじ速度でやってくる。水晶にルビーをちりばめたような顔がはつきり見えてきた。見ると、騎士はなにかふかいもの思いに沈んでいて、兄弟たちには目もくれない。呼びかけには返事もしないで、そのまま人なき荒野へとぬけていく。

《ぶれいもの、逃げるのか！》

このするどいさけび声で、はじめて騎士はふりかえり、おどすようにむちをあげた。末の弟はいのち知らずの若者であった。かれは見知らぬ騎士に追いつがって、さっと剣をつき出した。

《待て、といったら、待たないか。》

剣は相手にとどかなかつたが、そのとき風をきって、むちが鳴った。末の弟のひたいから、まっかな血潮がほとばしった。かれは馬から地面へころげおちた。騎士はこれになんの注意もはらわず、ふたたびもとのしせいにかえって、みるみる荒野を遠ざかっていった。……
《……まるで、太陽か月のように、すこしも道をかえないで、ただ一直線に走っていきました。そ

のあとが、ごらんのようなありさまなのです。」と、ハタイの兄弟はその話をむすんだ。

この話のあいだに、アフタンジルの目の前には、かがやかしい顔をした騎士に黒い天馬のまぼろしが、あざやかにうかんできた。長い年月、世界じゅうをめぐるあるいたことはむだではなかつた！ ついに、秘密の目的を達することができるとすれば、いままでの苦しみも、朝の霜のようにとけてしまいうちがいない。

「お話を聞いておどろいたが、じつは私は、その騎士をさがすために、自分の国をあとにしてきたものです。」と、アフタンジルはいった。「そのために、長いあいだ、知らぬ他国をさまよい歩いてきました。それをいま、その騎士のゆくえをあなたがたは私に教えてくださった。これは神の助けともいうべきものです。だから、私にと同様に、あなたがたにも神の助けはあるはずです。この若い弟さんの上に光をそそいで、やみを追いのけてくれるでしょう。ここは涼しくて、安らかな場所です。傷ついた人をゆっくり休ませて、気力をもどしてあげなさい。」

洞窟の出会い

アフタンジルはハタイの兄弟たちに別れを告げると、馬にとびのり、拍車をあてた。馬はいまし

めの綱からとき放されたたかのように走りだした。遠く日がさす方へむかつて、いっさんに走った。アフタンジルの胸の苦しみは、火が消えたように、しずまった。

——しかし、——とかれは考えた。——どんなふうに会見たらいいのだろう？へたなことをいったら、あの人間ぎらいの男をおこらすにきまつている。どうしても知恵をはたらかせるよりほかはない。じつとしんぼうして、理性にしたがうにかきる。だが、人の目から身をかくさなければならぬ。あつたわけがあつて、あくまでもひとりぼっちでいるというなら、おたがいにうちとけることはできない。私がかれと会うことは、もはやさけられない運命である。私がかれを粉みじんにするか、かれが私をうち殺すか、どちらかであろう。いづれにしても、私の苦しみはむだではなかつた！かれに会えば、すべてがわかる。かれがどんな人間であるにせよ、おそかれ、早かれ、とちゅうでひと休みはするであろう。たとえ風を追い越し、あるいはかべにかくれようと、神よ、かれを私からひき離さないでください！

こうしてアフタンジルは騎士を追跡した。二日二夜、ひとねむりもせず、飲みもせず、食べもしないで、したがって一分間の休みもなく、かれは野原をかけていった。

日の暮れ近く、高い山のふもとにつきあつた。大きい岩の洞窟が見え、下には川がながれていた。川岸には、すぎの森がこんもりとしげり、木々のいただきは雲にかくれていた。

アフタンジルは木々の枝をかきわけて、浅瀬をわたり、馬をつないでから、ひとりこつそりと洞窟の方へしのびよつた。そこに葉のしげつたふといすぎの木が立っていた。かれはこの木によじのぼつて、よりすをうかがつた。騎士はまっすぐに洞窟へ馬をむけていた。

騎士が洞窟の前に着くと、中から黒い服の娘があらわれた。やはりうれいに沈んだおももちで、目いっぱいなみだをたえていた。騎士は馬からおりて、やさしく娘の肩をだいた。妹でもいたわるようなふぜいであつた。なみだで傷口がなおつたかのように、やがて娘は氣をとりなおして、馬のたずなをとり、騎士から劍や弓をうけとつて、洞窟の奥へ消えた。騎士もそのあとを追つた。そこにはもうこいやみがたちこめていた。

アフタンジルは木の上から、このしじゅうをすつかり見とどけた。

——なるほど、なにかふかいしさいがあるらしい。これはもうすこしようすを見なければなるまい、——とアフタンジルは考えた。

夜があげると、娘は洞窟から出てきて、黒馬に水を飲ませ、馬具をつけ、くらをおき、すつかりしたくをととのえた。騎士がこのかくれ家に一日もじつとしてはいられないのだ、ということがわかる。

騎士は娘をだき、キスして、馬にまたがつた。やみを照らす光のように見えた。そこから、いと

すぎのようなおいが風にのつてただよってきた。ライオンがやぎをおそうように、かれはライオンをもうち負かすことができるだろう……かれは木のしげみをわけて、野原にむかい、きのうの道を引返していった。

アフタンジルは自分の目を信ずることができなかつた。

あなたはむずかしい仕事に私を助けてくださった！——と思わず神に感謝した。——思いもかけぬ幸福をめぐんでくださった。さっそく、あの人間ぎらいな騎士の話を聞きださなければならぬ。それには自分のことも話して、あの娘の同情をひき、かれと会うのに剣をふるわなくてもすむようにしなければならぬ。

アフタンジルは草原にはなしておいた馬にまたがって、大きな岩のあいだに口をあけている洞窟へ近づいた。騎士がもどってきたものと思つて、中から娘がむかひに出た。そこには見知らぬ男が立っていた。娘はおどろきのさけび声をあげて、くるりと中へ引返した。アフタンジルは、追いつがつて、小鳥をつかまえるように、娘をとらえた。ひめいが大きいかだまをかえしてひびいた。わしに見こまれたはどのように、娘ははげしく身もだえした。

「タリエール！」怒りにふるえて、娘は助けを呼んだ。

アフタンジルは娘の前にひざまずいて、けつして悪いことをするものではならぬ、とねっしんに

いった。

「おちついてください。私も人の子です。この世をひっくり返し人々をさがしに出て、やつとそれを見つけたものです。泣いたり、さげんだりしないで、どうかあの人のことを話してください。」

「きちがい。」と、娘はこたえた。「あなたとあたしになんの關係があるの？ 世の中がひっくり返ったのなら、あなたのばかな知恵でたてなおしたらいいじゃありませんか。ことわっておきますが、あの人の秘密を知ることが、あなたにはぜったいにできません。あたしに話させようとしても、むだです！ あの人の苦しみは、口にも筆にもうつすことはできないのです。泣くよりは、笑うほうがいいにきまっています。それでもあたしは泣くほうを選ぶでしょう。」

「私のかぎりない悲しみを知らないから、そんなふうにおっしゃるのです。」と、アフタンジルはいった。「あの人がいなければ、私はふるさとをすてて、さまよい歩かなくてもよかったのだ。こうして会ったからには、私は一歩もさがりません。私を信じて、秘密をうちあげてください。」

「ふしぎだわ、どうしてこの人はここにきたのだろう。」と、娘はつぶやいた。「いいえ、長話は無用です。あたしは短くおこたえます。秘密はうちあげられません！ 出ていってください。」

アフタンジルは手をついて嘆願した。だめだ！ にわかにはげしい怒りがこみあげてきた。かれは立ちあがる、娘の髪の毛をつかんで、その上に剣をかざした。

「もう一度私にむだなさすらしいの旅に出て、益のないなみだをながせというのか。そんなむごいことがあろうか？　ここで眞実を話してくださいとすれば、もはやあなたを敵と見るよりほかはない。」

「おどしで勝ちを得られません。」と、娘はいった。「またおゆるしになつてもおなじこと。血を分けた兄のようなあのおかたの運命は、どっちみちたれに知られてもならないのです。ここで秘密をまもっているのは、もうせつばつまったはでのこと。さあはやく殺してください！　死ねばあたしも不幸から不幸へつづく旅からとき放されるといふもの、かえつて楽になるでしょう。あたしのいのちなど、わらくずよりもねうちがないのです。それにしても、あなたはどなたで、どこからきた人か——それがわからないで、どうしてあなたを信じていることができましょう。」

アフタンヅルはさとつた。まったく力づくで秘密を知ることにはできない。それには別の方法をえらぶ必要がある。ほおを涙でぬらして、うなだれた。

「おゆるしください。女をいじめて、なんのいいことが、ありませんよう。」

娘はしばらくだまつていてから、また急にたえかねたように泣きだした。あおざめた顔に、かすかにばら色がさした。アフタンヅルは娘の気持がいくぶんでもほどこけてきたように感じた。だがまだ不信の色はその顔からぬぐい去られてはいなかった。かれはひぎをついて、しずかに話しはじめた。

「ごらんのとおりに、私はらんぼうな武士です。あなたにささげるものはなにもありません。あるとすれば、ただ私のま心だけです。私はだれからも見すてられて、ひとりぼっちのさすらい人、あなたの同情を得られないとしたら、もはや生きる道もないのです。」

娘は肩をふるわせて、ため息した。おどろきと怒りはしずまった。なにを見知らぬ男が語ろうとするのか、それを聞いてみるほどの心がまえになったように見えた。

「私は愛する人から、とらの皮を着た騎士をさがし出すようにたのまれたのです。その騎士は私は幽霊としか思われませんでした。しかし、たのまれたいじょうは、さがし出さなければなりません。なにもかもうちすてて、三年のあいだたずねまわりました。死か、生か、それはあなたのおことば一つにかかっているのです。」

「ふいにお会いしたとき、あなたは心に悪いたねをまきました。」と、娘はいった。「けれど、ともかくあなたはひとりの友だちを得ました。それはあなたの姉ともなり、妹ともなるでしょう。ただ、秘密の目的に進もうとするには、あたしのいうことに注意してしたがわなければなりません。さもないと、世界をのろい、名誉もなく身をほろぼすようなことになりますよ。」

「いま私はこんな話を思い出しました。」と、アフタンジルはいった。「ふたりの人が知らない土地を歩いていきました。すると、とつぜん、前の人がふかい井戸へおちたのです。うしろの人は、井



戸の上からのぞきこんで、

「へしつかりしろ！ いま綱をさがしてもどつてくるから、それまで待て。きつと助けてやるから！」とさげびました。

相手はだんだん水につかっけていきながら、それでも悲しげな微笑でこたえた、というのです。

「もし、もどつてこなかったら、おれはいつたいどこへ逃げるんだ。」

私にとつても、たのみの綱はあなたひとりの手にあるのです。もちろん、なにごとによらず、あなたのおっしゃるとおりにします。けっして自分の力をおしみません。」

「そのおことばで安心しました。あたしの忠告をお聞きになれば、きつとさがしていたものを、さがしあてることができるでしょう。あたしたちと不幸を分けあうおつもりなら、いつさいがあきらかにされるでしょう。」娘はアフタンジルの目をじつと見ながら、語りついで。「とらの皮をまどつている人はタリエール、あたしはアスマートといいます。あの人ほど敵におそれられている人はなく、またあの人ほど世界じゅうをめぐるめぐっている人はないでしょう。食べものはあの人がつてくる森のけもの、野の鳥です。あの人があどのくらいこをるすにしているかは、あたしにもわかりません。もどりましたら、あたしからよく話してあげます。きつといいお友だちになるでしょう。あなたは愛するかたにこのことをご報告できると思います。それまでここに足をとめていらつ

友情のちかい

アスマートがアフタンジルを親しい仲間と信ずるようになったころ、ある晩、浅瀬の水をはねかす音と、馬のひずめの音が聞えてきた。娘はかれを洞窟の奥のこいやみの中へかくした。

「がまんして、あたしが呼ぶときまで、かくれていなければなりません。」と、娘は注意した。「かゝるはずみなことをして、あの人間ぎらいな人をおこらせたいへんですからね。」

アフタンジルは矢筒の矢をそろえ、剣のつかに手をかけて、身がまえした。月あかりで見ると、ふたりはまたひとしきり悲しげに泣いてから、アスマートが馬のくらははずして、馬を洞窟の中へひいてきた。騎士がそれにつづいた。アフタンジルがうつとりと見とれるほど、りっぱな男ぶりであった。娘はとらの皮をしいてねどこをつくった。騎士はおもいたため息をついて、その上にすわった。またまつげのはじにきらりとダイヤモンドが光った。

アスマートは火打ち石をすって火をおこした。火は洞窟の中のを追いはらった。タリエールは火の方へ手をのばして、焼き肉をひときれつまんだけれど、すぐもとへもどした。胸がふさがつ

ていて、食物ものを通らないのである。まもなく、戦いにのぞんだ戦士のように、うとうとまどろみはじめた。するとこんどは、なにかにおどろいて、うなり声とともに目をさました。

「どうなさいました？」と、娘は聞いた。「なにかまたありましたの。」

「いや、新しい話ではないがね。」と、タリエールはつらそうにこたえた。「おおぜいの兵隊をつれた王さまに会ったことがあるんだよ。狩りをするので、騎士たちがけものを追いたてていた。それを見ると、私はたまらなくなった。ただひとり、人目をさけて、まるでそのけもののようにさまよい歩く、自分の運命がなまけなくなつてね。馬をおりて、川岸の森の中に身をかくし、考えこんだ。あしたの朝まで、そのままじつと考えるつもりでね。」

「あなたは人間や人の話をきらいすぎますよ。けもの仲間になつて、それで身をほろぼしても、だれのためにもならないじやありませんか。ですから、せめて同じさすらいの仲間を、信頼できる友だちをお持ちになつて、たがいに力になり、なくさめあうことができたら、どんなにいいかしれやしません。」

「いい話だがね。」と、タリエールは沈んだ声でいった。「しかし、私の病気をなおすような薬があるだろうか？ 天からおくられたのではなくて、私に友情をみせるような人間がいるだろうか？ なんにもかくさないで、悲しみを分けあうことができるような、そんなつらい運命の人間など、ほ

かあるはずはないよ。私の苦しみがわかるような友だちといえば——この世の中に、おまえただひとりだ。」

「どうかおこらないで聞いてください。」と、アスマートはいった。「あなたの苦しみをやわらげる人が、天からあたしにおくられたのです。きょうから運命はいいほうへとむきかわったのです。不幸となやみは終わりました。自分のたちばを見いだすには、知恵が必要です。あなたは知恵を失つて、ほんとにけものみたいにおなりでした。毒の実をついばんで死ぬ鳥となるよりも、友だちと組んで、美しいものに目を楽しませるほうが、どれほどましでしょう。」

「どうもよくわからないが。」と、タリエールはいった。「天が私に親友となる人をおくった、とでもいうのかい。おかしいね。私を人なき荒野に追いやり、人なきこの岩あなにとじこめたのも、天の意志ではなかったのかね。」

「なぜつかえてはいけません。」アスマートは心をきめた。「じつは、あなたと友情を結び、ごいっしょに世界をめぐる、というある騎士がいるのです。剣をぬいて決闘しないということ、ごちかっってください。」

「ちかうとも。そんなありがたい人に、だれが剣などぬくものか。またあの人にもちかうよ、——あの人のためにこうして十年も苦しんでいるのだから。親友となり、どこへでもいっしょにいき、

この世の苦しみも楽しみもともに分けあうことをちかいます。」

アスマートはすぐアフタンジルを呼びにいった。

「ご安心なさい。いよいよ、目的に近づきましたよ。」と、かの女はアフタンジルの耳にささやいた。ふたりの騎士はむかいあった。どちらが太陽か月か、見分けがたいほど、そろいもそろって、世にもめずらしいりっぱな騎士たちであった。ふたりは愛する兄弟のようにキスした。なかばひらいたくちびるのばらの中に、真珠の列が光った。ふたりはかたくだきあった。あおざめていたほおがルビーの色にかわった。感動のあまり、ただなみだにむせぶばかりであった。

「もうなみだはたくさんよ。」と、アスマートはいった。「さもないと、せつかく出た太陽もくもつてしまいますわ。」

タリエールは新しい友の手をとって、自分のとなりにすわらせた。

「さて、おまえはだれで、どこからきて、どこへいくのかね。私もおまえにはなに一つかくさないつもりだよ。」と、タリエールは聞いた。《おまえ》ということばづかひまで、もうすっかりうちとけたものであった。

「私はアラビア人で、国には自分の城も領地もある。」感動をかくさないで、アフタンジルはいった。「私は前に一度、おまえを見たことがある。野のはての川岸で泣いていたのを、おまえもおぼ

えているだろう。あのときおまえは呼び出しにこたえず、そのむちで野を血に染めてかけ去った。ついに王さまみずからあとを追ったが、おまえはカッジのように消え失せた。王さまはくやしさと悲しみにたえず、世界じゅうに追手をさしむけたが、なんにもならなかった。そこで私が呼ばれた。呼んだおかたは王さまの姫君で、いまはアラビアの女王。このおかたの知と情はかねてから私をとりこにしていたのだが、私を呼んで、

「すがたをかくしたかの騎士の知らせを城にもたらせば、おまえののぞみをかなえてあげる。」と
いって、その期限を三年とおきめになった。それから三年近く、世界をむだにさがしまわったすえ、はからずも、おまえのむちで頭をわられたハタイ人の兄弟に会い、はじめておまえのことを耳にしたのだ。」

「さつきもアスマートに話したことだがね。」と、タリエールはいった。「そのことはふしぎによくおぼえてるんだよ。狩りを楽しむ人もあるし、なみだにくれる人もある。人によって運命はさまざまだ。私は自分の運命のことで心が結ばれていたもので、つい王さまをむごいめにあわせましたのだから。それにあの黒馬がまたたいへんなやつでね。空飛ぶ鳥よりもはやくはしる。あつというまにすがたは消えて、だれだつてつかまえることはできない。ハタイ人については、罪はむこうにあると思う。道に立ちふさがつて、さきに手出しをしたんだからね。むくいを受けるのはしかたがな

い。しかしおまえにはずいぶん苦勞をかけたものだね。この無分別ものをさがすために、どれほど長い困難な道をとおってきたことだろう。」

「おまえにくらべれば、なんでもないよ。」と、アフタンジルはいった。「私は愛する人のことも忘れよう。つとめの義務もなげすてよう。生きるも、死ぬも、おまえといっしょだ。」

「不幸な男に同情し、悲しみを分けあうという、おまえの心には、私はふかく感動させられる。だが、愛する人と別れていいものだろうか。それにかわるものをおまえにあたえることができるだろうか。おまえは女王さまのいいつけをかたくまもって、私をさがしまわり、ついにこの岩あなを見つけた。しかし、私の運命について、話することができるだろうか。おそろしい物語は私を焼きつくすにきまつている。」

「この人は、兄弟として、あなたのお話を聞くおつもりなのですよ。」と、アスマートはわきからいった。「もしいっさいを知ったなら、あなたとごいっしょにすばらしい宴会をひらくかもしれないじゃありませんか。天からさずかったものは、すべて美しいはずです。」

「そうだと。」と、アフタンジルはいった。「天からさずかった道は、おまえの太陽に近づくよう、おまえに力をかすことにある。」

「兄弟のちかいをたてたものは、自分をまもるために逃げないで、死の前がんばらなければなら

ない。では、聞いてくれ。その前に、アスマート。」と、タリエールは娘にむかい、「冷たい水をくんできて、私のひたいをひやしてくれ。いくぶんでもいたみがかかるようになるように。それでも息が絶えたなら、土が私のゆりかごとなるように、地面にあなをほってくれ。」

タリエールはきゆうくつなえりのボタンをはずした。にわかには顔色がくもった。くちびるはふるえて、ことばにならず、こらえられないなみだがあふれおちた。

「私の愛する人をぬすんだのはだれだ。私の生活、私の希望をぬすんだのはだれだ。おお、うるわしい樂園のはこやなぎよ。おまえをきり倒したのはだれだ……。」

二、タリエールの物語ものがたり

インド王おうパルサダン

七つの土地とちが集あつまって、大インドだいをかたちづくっていた。そのうち六つの土地とちはパルサダンという王おうさまの手にてにぎられていた。それは諸王しよおうの上にうえ立つ王おうといわれるくらい、勇敢ゆうげんで、お金持かねもちで、強い王おうさまであった。あたりの国々くにくにはみんなかれをおそれていた。

七つめの土地とちの領主りやうしゆはサリダンといって、これがタリエールの父ちちであった。サリダンも戦いくさいに強つよく、力ちからは万人ばんにんにまさっていた。かげであれ、おもてであれ、かれに打撃だげきをあたえた人ひとはいなかった。狩りかりがすぎ、あそびがすぎで、つまらない日ひなど一日いちにちもなかった。ただ国くにをおさめるのが重荷おもひに感じかんじられてきたし、いつそ国くにをゆたかにしたいと考かんがえたので、あるとき、とういう決心けつしんをした。

——敵てきは手ても足あしも出でて、うらぎりのおそれもなく、私わたしの王権おうけんはゆるぎもしない。だからいまパル

サダンの臣下となつても、なんらはずかしいことはない。

かれはインドの首府に書面をおくつた。

「バルサダン王さま！ わが領地をあなたの手にゆだね、あなたの臣下となることは、私のかねてのぞみであります。忠節の名を後の世までものこしたいと思ひます。」

バルサダンはよろこんで、すぐ返事を出した。

「領主さま！ ご決心を祝福します。あなたを私と同じ権利のある君主としておむかえます。わが王宮においてください。親のように、あるいは兄弟のように、お会いしましょう！」

こうして領地はそのままに、アミルバール、すなわち軍部大臣にえらばれ、スパサラール、すなわち大将の称号をあたえられた。サリダンは王位をくだつて、バルサダンの臣下になつたけれど、まだそれほどの年でもなかつたから、大将の権威をそこねるようなことはなかつた。

「あれは得難い大将だ。」と、よく王さまはいつた。「敵にとっては、かれは手のつけられない疫病神だよ。」

王さまには子どもがなかつた。それがバルサダンのただ一つのなやみであつた。そのころ、タリエールが生まれた。王さまはこれに目をつけた。

「この子を私のあとつぎにしたい。」と、王さまはサリダんにたのんだ。「私にも、いつどんなこと

がおこるか、わからないからね。」

王さまは生みの子のようにタリエールをかわいがり、王子のように教育した。教師たちはかれに英雄の道を説いた。いつしか、かれはばら色のほおをした少年に成長していた。この少年をなぐさめるために、しばしばとら狩りがもよおされた。「まるで楽園のはこやなぎのようにりっぱだ。」と、かれはいたるところで評判された。

その時分に、王妃が女の子を生んだ。王さまはよろこび、国じゅうがおまつりのようにさわいだ。王さまにはお祝いの品々が山のようにおくられ、王さまはまた人々におしみなく財宝を分けあたえた。

王女はダレジャン・ネスタンと名づけられた。タリエールは王女といっしょにくらし、いっしょに遊んだ。王女は幼いときから、晴れた日のようにかしこく、太陽にも月にもおとらないほど美しくかった。心のない、石のような男でなければ、かの女をわすれることはできなかった。王女はもう大きくなり、タリエールは球技に長じ、ライオンをねこのように退治することができるほどの年ごろになっていた。王さまは王女に位をゆずることにきめたので、タリエールは王さまのゆるしを得て、父サリダンのやしきに帰った。

パルサダンのいっつけによつて、ネスタンのために塔が建てられ、宝石でちりばめられたのりか

ごがつくられた。庭にはばら色の水の泉がさらさらどふきあふれて、塔へ涼しい風をおくり、香炉からは昼となく夜となく、かわいた木の皮のかおりがたちのぼっていた。王さまの妹、つまりネスタンのおばにあたるダワールという婦人が、王さまのたのみをうけて、かの女に学問を教えていた。ダワールは魔法使いの未亡人で、魔法ができるといわれていた。

このきらびやかな宮殿で、この美しい庭園で、ネスタンは春の空のおくりもののように花と咲いた。パレスチナのガバオン山にあるしゆるの木のように、すくすくとそだち、ダワールやふたりの侍女を相手に遊んでいた。その侍女のひとりがアスマートであった。

タリエールは十六才の春をむかえた。王さまはますますかれを愛し、昼もはなさず、夜もやしきへ帰さなかつた。競馬や射撃では、かれは人々の目を集めた。飛んでいる鳥を射おとし、広場ではどんな遊びにも競技にも負けたことがなかつた。およそ、くつたくとということを知らなかつたが、ただ心の奥にはいつしか、王女のおもかげがふかくきざみこまれていた。

そのうち、タリエールの父サリダンは、いのちのさかずきを飲みほして、世を去つた。宴会と遊びごとの停止命令が出た。敵どもはおどりがつてよろこび、王に忠実な人々はなげき悲しんだ。タリエールはまる一年、ひきこもっていた。すると、王さまの命令がつたえられた。

「わが愛する子、タリエールよ。いつまで悲しんでいてもしかたがない。やしきを出て、軍隊を指

挿せよ。おまえはきよからアミルバール（武將）だ！」
王さまはかれに指揮官の名と、世襲領地とをあたえた。かれは父の思い出をふりはらって、王宮にあがった。インドの領主たちは待ちかねたようにかれを出むかえ、わが子のようにキスした。おきてどおりに、奉公の仕事はもうきまつていた。かれはまだ年も若く、しんぱいだったので、軍部大臣となることをしきりに辞退したけれど、王さまは聞きいれなかった。けつきよく、かれはこの重い役めをひきうけた。

美しい若木のなやみ

ある日、タリエールが狩りから帰つてくると、王さまはかれの手をとつていった。

「きよは、おまえを王女に会わせてやるよ。」

タリエールは王さまとつれだつて、涼しい庭にはいった。あまい声でさえずりながら、小鳥は枝のあいだを飛びまわり、ばら色の木は木々のかげでやさしい音をたてている。塔のバルコニーの前には、ピロイドとにしきの幕がさがつていた。

タリエールは王さまが長いあいだ王女をかくしていたことを思い出した。かれはいつになく、胸



さわぎをおぼえた。王さまは重いにしきの幕をあげた。

「軍部大臣が狩りの獲物の鳥をネスタンに進呈する。」

侍女にむかつていう王さまの命令をタリエールは聞いた。

アスマートが顔を出した。かの女はビロードの幕をかかげた。タリエールはネスタンを見た。かれの胸をやりがさしつらぬいた。なにかあついほのおにつつまれた気持で、かれはアスマートに獲物をわたした。

王女がこのおくりものをうけたとたん、タリエールは気が遠くなった。からだじゅうの力がぬけ、足もとから地面がすつと離れていった。

人々のわめき声や泣き声か耳にはいつて、タリエールはわれにかえった。船出を見おくるときのように、召使いたちがおおぜい集まっていた。かれはふわりとしたねどこに横になつていた。それを上からのぞきこんで、高官たちは泣き声をあげ、近親の人々は血が出るほど、ほおをこすっていた。「かれはサタン（悪魔）にとりつかれたんですよ。」と、医者たちはいった。

タリエールは目をあけた。それを見ると、王さまは奇蹟がおこつたようによろこんで、かれをだいた。

「おお、わが子よ、よく生きかえつてくれた。」

しかしタリエールはことを口にするだけの力はなく、熱病にうたれたように、またがっくりとたおれた。心臓だけに血がたぎりたっていた。

医者たちはタリエールのねどこをかこんで、サタンを追いはらうお経を読みはじめた。しかし三日三晩たつても、かれはねむりからさめなかつた。

「よほどたちのわるい悪魔だ！」と、医者たちは診断した。「魂の中までくいこんだ」とみえる。これでは薬のほどこしやうがない。」

四日めにタリエールは意識をとりもどした。かれは神にいのつた。

「心の苦しみをのぞき、なやめるものにするにたれたまえ！ 病めるからだをなおし、かれにまた力をあたえたまえ！ 秘密があらわれたらたいへんですから、はやく王宮からひきさがるところができませんように！」

高官たちはかれの健康を見まもり、王妃みずからかれの食事をこしらえ、王さまはほかの仕事さしおいても、かれの見まいにかけつけた。こうして病気がかるくなると、タリエールはすぐ王さまに申し出た。

「もうすっかりよくなりました。また自由に川岸へ、野原へいってみたいとございます。」

かれは王さまにおくられて川岸へいき、そこから引返して、わがやしきへむかふた。王さまとは、

やしきの前で別れた。ひとりになると、また胸がきりきりと痛んだ。顔色はサフランよりもまだ黄色くなった。

とつぜん、門番の大声が聞え、王宮から使者がきたことを告げた。タリエールはどきつとした、
「こんなにはやくお呼び出しとは、なにごとだろう？」

「アスマートさまからの使いです。」と、使者はいつて、手紙をさし出した。

ふるえる手で封をきつて、急いで読みくたした。《王女さまがお呼びです。》というかんたんな文句であつた。かれはおどろいた。あんなまずいさわざをおこした自分が、愛のほのおに火をつけたなどとはとうてい信じられなかつた。だが、だまっていたら、そのふれいをおとがめになるだろうし、そうかといつておそばに飛んでいったら、どんなはずかしい思いをするかもしれない。かれは考えたすえ、からだがなおつたらうえで、お目にかかりたい、と、ていねいな返事を書いた。

日はすぎていつた。心のいたみはひどくなるばかりであつた。医者たちはかれをはなさなかつた。どんな薬もききめがなかつたけれど、それでも医者たちはこの苦しみをあたえた人がだれであるかをおしはかることはできなかつた。

パルサダン血を出す治療をするようにすすめた。タリエールはほんとの病気をかくすために、このすすめにしたがつた。ベッドに横になつて、両手をしばられているときに、またアスマートの手

紙がとどけられた。

——なんとせっかちな！ いったい私にどんなご用があるのだろうか？ 私には軍隊を指揮する責任がある。なおれば、その仕事にとりかからなければならぬ。万一、心の秘密があらわれたら、私はもうこの国で生きていることはできない、——そう考えながら、タリエールはまた返事を書いた。

へおそばにあること——これが私ののでみでありますから、ベッドからおきあがりしたい、参上いたします。おうたがいをお晴らしくください！

パルサダンからは、血を取ったかどうか、からだの調子はどうか、とたずねてきた。

へわるい血をとって、たいへんよくなりました。もうじきお目にかかれることを楽しみにしています。と、タリエールはこたえた。

かれは王宮で王さまや高官たちにむかえられた。回復祝いのたか狩りもよおされた。たかが放されてしゃこなどを追ひ、射手たちはときの声をあげて走りまわった。かれは馬にのることは許されたけれど、弓矢をとることは禁じられた。

そのあとが宴会となった。歌と音楽は夜があけるまで絶えまなくつづいた。パルサダンは貴重な宝石をみなに分けあたえた。召使いや獵犬にいたるまで、おくりものをいたただかないものはなかつ

た。

タリエールはやしきに帰ると、またお祝いの人々にとりまかれた。ここでも宴会がひらかれた。すると、門番がおおいそぎでかけつけて、かれの耳もとにささやいた。

「見知らぬ婦人が大臣にお目にかかりたいと門の前で待っております。お顔はヴェールにかくれてわかりませんが、その気品の高いこと……。」

「すぐお呼び申せ！ 居間で待っているから。」

あるじのあわてたようすを見てとつて、客たちはこしをあげて、いどまをつげようとした。

「どうぞ、そのまま。いますぐもどりますから！」と、タリエールは客たちにあやまつて、居間へはいった。ドアの前にはたくましい召使いが番をしていた。かれは氣をたしかにもとうとつとめたが、やはり足もとがふらふらした。

婦人が案内されてきた。

「お目にかかれて、こんなうれしいことはございません。」と、こしをかがめて婦人はいった。「このようなおこないは、お嬢さまのなさることではありません。」と、タリエールはいった。「すこしお考えになれば、人目につかないように、できるはずです。」

「心配で、いても立ってもいられないものですから！ どうしてもあなたとだけお会いすることが

できませんでしたので、運命がこうしてあたしをおつかわしになったのでございます。あるじのいつけによつて、おしてあがりましたことを、おとがめなさいませぬように……これがお手紙でございます。それはいつわりのないま心を申しあげてしよう。」

タリエールと王女ダレジヤン・ネスタン

「あたしの考へは、アスマートからお聞きになれば、おわかりになると思ひます。」と、ダレジヤン・ネスタンの手紙ははじまつていた。「あたしはあなたを愛し、またにくんでいます。愛し、また愛される人は、のぞみを失つたり、なみだを流したりするものではありません！ あたしを感心させるような、りつばなてがらをたてるほうが、どれほどましでしょう。いま、北中国の蒙古族、ハタイ人はわが国にみつぎものをしていながら、反逆をたくらんでいます。そのようなうらぎりが許されるでしょうか？ なにをかくしましょう——あなたの妻になる、ということはおあたしのかねてののぞみでした。厚いカーテンのかけからひそかにあなたを見て、あなたがなんのためにそんなに苦しんでおられるのかを知りました。ハタイの国をやぶつて、そのごうまんの鼻をへし折り、あたしのもとへ帰つていらつしゃい！ なみだは禁物です！ 長雨がつづくとはらの花びらは散りま

す。あたしは太陽となつて、あなたのやみを照らしてあげたいのです。》

《あなたにぶさわしいものとなる幸福を神がめぐんでくださいますように……それは半死半生の私にとつて、ゆめのような救いです。》と、タリエールは返事を書きだしたが、すぐ筆をすてて、アスマートにいった。

「とても自分の気持を書きあらわすことができない。ネスタンに伝えてください——あなたは、おことばどおりに、太陽のようにやみを追いはりました、と。死んだものに生命と希望と意識とをかえしてくれたのです。私は自分の生涯をかの女にささげます。そのほかにどんな栄華もいりません。」

「他人の目をおそれ、お会いになつても、けつしてそれをひとにもらさないように、とネスタンのご注意でした。」アスマートは声を低めていった。「そのかわり、あたしがおふたりのたてになります。いつでもあたしの名をご利用なさいませう。愛を秘密にしておくことは、心をいっそう強く結びつけることになれますから。」

タリエールはダレジャン・ネスタンのかしい忠告をふかく心にとめた。かれは、夜のやみに、いきなりま昼の太陽がさしこんだように、にわかに生き返つた。うれしさのあまり、アスマートにつばいっばいの宝石をお礼にさし出したが、かの女は、自分のいれものにはもうはいらないから、

といつてことわり、かわりにつまらないゆびわを一つだけ選んだ。

「宝石はもうたくさんですから、これを記念にください。」と、すこしどきまぎしながらいった。タリエールは見ちがえるようにおちついて、宴会の席にもどり、席をはずしていたわびをいって、客たちにおくりものを分けあたえた。うたげはいよいよ盛んになった。

その日のうちに、かれはハタイ王にあてた手紙を書いて、使者をおくり出した。

「インド王は強力です。かれに忠実なものは祝福されますが、うらぎりをたくらむものは罰せられるでしょう。善にたいして、悪でむくいるという法はありません。いそぎわがきみの前に出て、身の潔白を証明しなさい。さもないと、反乱した国はほろぼされ、あなたはご自分の血でうらぎりのつぐないをしなければなりません。」

タリエールの胸を焼いていた火は消えた。宴会の席に出ても、愉快にその気分ひたることのできるようになった。ただときどき、ふつとばかされたような気持が心をかすめた。大きなぞみがかつたことが、うそみたいに思われた。どこか遠くへ逃げていきたくなったり、この世をのろつたりした。

ある日、王宮からやしきへ帰ってきて、なやみをなおすようなアスマートからのたよりをいろいろ読みかえしていると、ふいに召使いにささやく門番の声が聞えた。

「アスマートさまからのおつかいです。」

タリエールは手紙を見た。王女がお会いする、との文句である。とび立つ思いでしたくをととのえ、おともはひとりにして、王宮へいそいだ。

アスマートが胸をどきどきさせて待っていた。

「いよいよあなたの胸から、ふかくつきささったやいばをぬいてあげることができましたよ。」
と、かの女はやさしくほおえんで、ささやいた。「おちついて、ばらの花をこらんさい。」

入口の重いガードテンをかかげて、タリエールは一步王女のへやへはいつた。パミール産のルビーをちりばめた玉座がまぶしく目を射た。ダレジャン・ネスタンがゆつたりとそこにすわっていた。王女の目は黒めのうの湖のふかさを思わせた。

タリエールは棒のように立っていた。王女もなんにもいわなかった。やがて王女はタリエールにやさしいまなざしをむけたまま、アスマートになにかささやいた。アスマートはタリエールの耳に口をよせて、

「帰りましょう、王女さまはご気分がわるいそうですから。」

タリエールはまっかになつた。アスマートとならんで退出しながら、考えた。

「天はなんという道を自分に歩かせるのか？ なんのために希望をあたえたり、またうばった

りするのか？ いったいどういう運命におとしいれようとするのか？

庭に出ると、アスマートはいった。

「なんにもご心配なさることはありませんよ。悲しみのまどをとぎし、よろこびのドアをあけなさい。ネスタンはただはずかしさに、ぼつと上気なさっただけですもの。」

「あなたは私の魂の医者です。どうかこれからもきれめなしにお手紙をください。」と、タリエールはこたえた。「どんなことでも、けつしてかくさないで。」

やしきに帰って、ベッドに横になっただけれど、ねむれなかった。夜のやみが好ましく、朝の光がうとましかった。

そのうち、ハタイの国へいった使者が、みじかい返事を持ってもどってきた。ごうまんぶれいな文句であつた。

「わが国はみかげ石のようにかたい。われわれはこしぬけ武士ではない。いかなるパルサダン王でも、われわれの主人となることはとうていできないだろう！ おまえは戦争でおどして、われわれをほろぼそうとする。ハタイの国を征服しようとする。それは無法の欲というものだ。もつとかしこくなくて、われわれに敬意を表するよう、心がけなさい！——ハタイ人の頭目、ラマズ。」

これは挑戦状であつた。タリエールはハタイ人と戦うことに心をきめた。かれは王宮につめて、

軍勢を呼び集めた。兵士たちは遠くから、近くから、わが家をあとにして、よろこび勇んでかけた。その数は星の数よりも多く、丘や谷間にあふれるばかりであった。いずれも、よろい、かぶどに身をかため駿馬をそろえ、ホラズム（二十一十三世紀ごろの中央アジアの大國）製のかがやく武器をおびていた。動作はすばやく、規律はきびしかった。

タリエールは陣營に高く黒と赤の旗をかかげ、夜明けを待つて出発するように命令した。そしていったんわがやしきにもどつたが、心はおもくとぎされていた。

——王女と別れのあいさつもしないで、どうして出陣することができよう。こんな氣持で、思うぞんぶん戦うことができるだろうか？

おりよく、そこへアスマートの使者があらわれて、手紙をわたした。

《王女さまがお待ちかねです。すぐおいでください。しかし、けつして泣いたり、うなつたりなさらないように！》

タリエールはまた王宮へかけつけ、庭園の方へまわつた。アスマートは塔の入口のいつもの場所
で待つていた。

「お月さまがライオンを照らそうと、しずかに待つておいでです。」と、かの女はほおえんでいった。タリエールは階段をのぼつて、広間
にみちびかれた。まつたく、広間
いっばいに月がかがやいて

いるようであった。エメラルドのようなみどりの服を着て、王女はカーテンの前にすわっていた。かれはおずおずとしゆうたんの上を進んでいった。王女は笑顔でかれをむかえた。まるで強い光線をうけたように、いままでのかれの心の中のものもやがいつべんに消しとんだ。王女はヴェールで顔をかくし、ざぶとんをすすめるように、アスマートに命じた。タリエールはその上にわくわくしなからすわった。

「はじめてお会いしたとき、あたしはなんにもお話しませんでしたね。」と、王女はいった。「あなたはひどくがっかりなさいましたが、じつはあたし、すっかりのほせていたものですから、それだまっていたのです。愛する人の前ではなにごともこらえて、ひかえめでなければなりません。心で泣いても、顔では笑って見せるのがさだめです。けれど、いつまでも気持ちをかくしておくことはできません。それで、アスマートを通して、あたしの心をあなたにうちあけることに決心したのです。もうふたりの間は離れられないものとなりました。道は一つです。あなたはあたしをご自分の妻と思ひ、あたしはあなたを自分の夫と思ひます。うらぎれば、地獄におちるでしょう。どうか心おきなく戦いに出て、ハタイ人をこらしめてください。りっぱに勝利をおさめ、英雄としてかいいんされることを信じます。そのうれしい再会の日まで、自分で自分をなくさめていたらいいのでしょう？ かたみとして心をあたしにあずけ、あなたはあたしの心を持つておいでなさい。これな

ら、おたがいにさびしい思いをすることはないでしょう。お墓がまつ黒な口をあけるまで、あたしはあなたのものですわ。」

「あなたにはずかしくない騎士として働くつもりです。」と、タリエールはこたえた。「もしうらぎるようなことがあれば、神は私を八つぎきにするでしょう。では、いつてまいります。ハタイ人の前に、私は勇敢なライオンとなってあらわれるでしょう。」

ちかいのことははとりかわされた。話はなかなかつきなかつたけれど、やがて別れのとときがきた。別れはつらかった。しかし、ネスタンの心であかるく照らされて、タリエールは岩のようにがんじょうな男になっていた。

ハタイ戦争のてんまつ

「らっぱを吹け！ 勇敢なものは名誉のほうびをたまわるぞ！」
タリエールは号令をかけた。見るまに無数の軍勢は整列した。

「進め。」

軍隊は街道をさけて間道にはいり、ハタイの国をさしてまっすぐに進んでいった。インドの国境

を越えて、荒野にさしかかったとき、ラマズの使者にいき会った。

「いいところで会った。」と、タリエールは使者にいった。「パルサダンのひつじがハダイのおおかみをくだいてくれる、とおまえの王さまに伝えろ。」

使者はラマズからのおくりものをさし出しながら、目を伏せていった。

「わが国はあやまちをしましたが、どうかひろい心でおゆるしくたさるようにな、とのラマズ王のことばです。私どもはいのちのせとぎわにきています。あなたがたがうらぎりを怒って、私どもの中の財産もおとりあげなさろう、というのはまことにごもつともです！ しかし私どもはインドにそむいたことを後悔しているのです。軍隊をつれないでしてくたさるなら、要塞や城のかぎをみんなおわたしいたします。」

タリエールは部将会議をひらいて、ハダイの使者の口上をうけるかどうかを相談した。

「あなたはまだ若い。」と、部将たちはいった。「敵はなかなかのくせもので、もう戦争のしたくはできているものと思わなければなりません。軍をすすめるにも、よほどの注意が必要です。ともかく、いちばん強い部隊をひきいていってごらんください。私たちは後についていますし、危険とみたらすぐかけつけます。もしハダイ人がほんとに後悔しているなら、その神にちかわせればよし、またうそをついたのなら、怒りをばくはつさせればいいでしょう。」

タリエールは会議の忠告にしたがって、ハタイの使者に返事をした。

「ラマズ王は信用できない人だが、せっかくの口上だから、軍隊は残しておいて、出かけよう。ただし護衛兵をすこしつれていく。よくおぼえておけ、いのちは死よりもありがたいものだぞ。いざとなつたら、要塞もおまえたちを助けはしないから。」

かれは護衛隊として三百人の勇士をえらび、残る本隊には連絡と救援のことをたのんでおいて、ハタイ王と会いに馬を進めた。

三日たった。またハタイの使者と出会った。使者は王さまからのおくりものだといって、絹の着物をタリエールにささげた。

「平和なやねの下で、お客さまを心からおむかえするつもりでおります。王のことはにいつわりはございません。まだまだたくさんのおくりものを用意してあります。」

「そのごしんせつはありがたい。」と、タリエールはこたえた。「私はむすこが父に会うような気持ちで、ラマズに会うことにしよう。」

つぎの夜、部隊は森のはずれにテントをはった。またハタイの使者が数頭の駿馬をおくりものとしてとどけてきた。

「王はたいそうよろこんで、自分からお出むがえにありがとうございました。あなたのけらいとして、軍隊を

したがえて、お城へおともすると申しております。」

タリエールはハタイの使者たちをテントにまねき、じゆうたんをしいて、婚禮のつきそい人のように、ていちようにもてなした。

ま夜なかごろ、王の軍隊をぬけ出してきたという、ひとりのハタイ人があらわれた。

「わが軍はひそかに合戦の準備をしています。あなたをうらぎることは私の良心がゆるしませんので、お知らせにまいりました。」と、かれはタリエールにいった。「私はあなたのお父うえに養われためです。そのご恩は忘れません。それで矢のように飛んできたのです。わるだくみはもうすっかり熟しています。だましうちのあみは張りめぐられました。主力として十万の兵隊が集結しています。あなたの部隊の二倍の伏兵が待ち伏せし、一発のろしを合図に、旋風のようにあなたにおそいかかろうとしています。どんなに強くても、ひとりで千人にあたることはできません。よくよくご注意なさいますように。」

「よく敵の計略を知らせてくれた。おかげで私たちは助かるかもしれない。」と、タリエールはハタイ人におれをいった。「だがおまえはすぐ自分の隊へもどらなければならぬ。うたがわれたらたいへんだからな。もし私のいのちがあつたら、あとでおまえには山ほどほうびをあげるよ。」

かれは伝令兵を呼び、
「とちゆうのどんな障害をものりこえて、
当先発隊へ急ぎ進いづくべし。」

という命令を本隊に伝えるようにつけた。

朝になると、かれはていねいにハタイの使者たちにいった。

「これから出発します。きょうはいよいよ王さまにお目にかかれるでしょう。よろしくお伝えください。」

半日ほどさきへ進んだ。運を天にまかせるかくごであった。見ると——はるかかなたに土けむりがあがっている。丘へのぼって、じつと目をこらした。

——ハタイ人め、わなをしかけてるとみえる。だがこちらにも一度ならず敵をやぶった剣もあれば、やりもある！

命令を聞きに、小隊長たちがやってきた。「諸君。」と、タリエールはいった。「ハタイ人どもは攻撃をくわだてている。われわれはこれをけちらし、かれらの罪を思い知らせやらなければならぬ。君主のためにたおれるものは、天国で魂の祝福をうけるであろう。われわれにはたのしい剣がある。なんでおくれをとることがあろう。」

《戦闘用意！》の号令がひびきわたると、兵隊はいっせいによろい、かぶとに身をかためた。騎馬隊は列をたてなおして、突撃のしせいをとった。これを見ると、ハタイの王はあわててまた使者をよこした。



「それではせっかくのおやくそくがだめになります。どうしてまた急に武器をおとりになったのでしょうか？ おだやかに話しあおうではございませんか。」

「おまえがたのわるだくみは、もうかくしきれないよ。」と、タリエールはこたえた。「インド勢を不意討ちしようとしても、その手にはのらぬ！ いっそ男らしく、堂々と勝負をけつしたらどうだ。」使者が引返すと、まもなく攻撃合図ののろしがあがって、王の軍隊は動きはじめた。両側から伏兵がおそいかかったけれど、すでにこれにそなえていたので、インド勢を撃破することはできなかった。タリエールはやりもちからやりをうけとり、かぶとのひさしをふかくおろして、猛然と合戦のただなかへ馬をのり入れた。敵はかれのやりに突きまкруられて、数知れずたおれた。しかし本陣はびくともせず、列もくずれなかった。

「あれは悪魔だぞ。」

ハタイ勢の中からそんなさけび声があがった。まったく、タリエールにぶつかったら、もうおしまいであった。生きるのぞみはなかった。かれは大将のひとりらしい男を馬からたたきおとしたが、とたんにやりが折れた。すぐ剣をぬいた……そのきれあじのみごとなこと！ わしにねらわれた小鳥のむれのように、敵の大將はちりちりになり、人馬のしかばねは山をきずいた。タリエールはひとりひとりをいもむしのようにきりきりまいさせながら、敵の前衛部隊を二つもうちやぶり、追い

散らした。だが敵はすぐまた集まって、陣容をたてなおした。目にあまる大軍であった。タリエールはその中へきりこんだ。敵は血のながれにおぼれた。まっ二つにきられて、ふりわけ荷物のように、馬のくからたれさがるのもあった。タリエールが進むところ、敵はあわてて道をあけるようになった。

やがて日もくれようとするころ、ハタイ勢の中から大きなさけび声があがった。

「しまった！ わが軍は天にさらわれたぞ！ 雲のように土けむりがあがったのは、インド勢がここへ押し寄せるのにちがいない。ひけ！ 退却だ！」

どらの音が、雷鳴のように、しだいに大きくなってひびいてきた。夜なかから、きょう一日じゅう、ひと休みもしないで、タリエールの部隊を助けにかけつけたインド軍の本隊であった。

タリエールは逃げる敵を追って、ついにラマズの本陣に追いついた。かれはラマズを馬からたつきおとし、ぬきあわせる剣を自分の剣ではねとばして、おさえつけた。ラマズはかれの捕虜になった。

かけつけた本隊は敵軍を追撃して、馬上の指揮官たちをよろしやなくきり伏せ、歩兵どもの逃げ道をたつた。こうして生きのこったハタイ勢はおおかた捕虜になった。捕虜はひとかたまりにして、番兵にまもらせ、インド勢は息を休めた。

おちつくくと、タリエールはにわかに手傷のいたみを感じた。部将たちは、かれのまわりにより集まって、おそれを知らない大将の武勇をほめた。ほめることが見つからなくなると、だいて、キスして、勝利を祝った。教師たちは教え子のたくさんな手傷にびっくりして、声をあげて泣いた。タリエールは部下の親兵を地方におくつて、みつぎものを集めさせた。こんどの反逆に加わったものは死刑にされた。多くの町はもう手むかいもしないで降伏した。

「みじめな出けらになつたじゃないか。」と、タリエールはラマズにいった。「もんくもいわずに、くさりにつながれている。こうなつたらもう要塞や城を私の部隊にひきわたすほかはあるまい。さもないと、わが王さまにいのちをいしてもおとりあげにはならないよ。」

「私の名譽はかげのようになすれてしまつた！」と、ラマズはこたえた。「私の部下の大将に命令を持たせて、町や要塞につかわそう。どこでも自由に占領しなさい。」

タリエールはラマズのけらいたちに自分の部隊をつけて、ハタイの国じゆうにおくり出した。地方の領主たちは服従をちかい、城と財宝をあげわたした。タリエールは新しい領地を見まわり、「きょうからは、私の命令がおまえたちの法律になる。私は太陽だ、が、おまえたちを焼き殺しはしないから、安心するがいい。」と、住民にいった。

占領した土地の富ははかり知れないものがあつた。あとからあとから貴重な品物がさし出され

た。その中から、タリエールはいままで見たこともないみごとなものなショールと服とを選びとつた。どこでこういう織物がつくられたのか——それはだれにもわからなかった。布地はどんすでもなし、じゅうたんでもなかったが、しかもどんな上等のよろいよりもめがつんでいた。人々はため息して、この品物に見とれた。

タリエールはふしぎな織物をダレジャン・ネスタンへのおみやげにすることにきめた。パルサダシ王には——かぞえきれないほどの戦利品！ 街道にはそれをほこぶ、らばとらくだのキャラバンがえんえんとつづいた。急使はタリエールの手紙を持って、王さまのもとへいそいだ。

《王さま、私はご命令をはたしました。ハタイ人は完全にやふれました。報告がおくれましたことを、おとがめなさらないでください。たくさんの戦利品をおとどけいたします。私たちをおびやかしていたハタイ王は捕虜になりました。》

勝利のうたげ

タリエールの軍隊は手むかうものをすべてうちやぶり、おびただしい戦利品を得た。らくだだけではとてもはこびきれないので、さらに牛のキャラバンを組んだ。そしてハタイの国じゅうをほこ

りやかに行進した。タリエールののぞみはかなくなった。

かれはインドに帰った。ハタイ王は一言もなく、おとなしいけらいのように、かれのあとにしたがつた。

インド王パルサダンのよろこびはたとえようもなかった。王さまはみずからタリエールの傷にほろたいを巻いた。市外の広場は旗さしもので飾られた、たくさんのテントでうずまつた。王さまはタリエールとならんですわって、かれの大きい名譽をたたえ、兵隊たちといっしょにさかずきをあげて、軍隊の勝利を祝った。祝宴は夜があけるまでつづいた。

朝、王さまのいいつけにしたがって、ハタイ王は王さまの前に呼びだされた。パルサダンはまだわが子をむかえるように、この二枚じたのラマズをむかえた。不信もうらぎりも、ここでは光栄であるかのように見えた。勇士の道とは、このようなものでもあろうか？ 王さまはラマズを自分のテーブルにまねき、はずかしめるようなことばや勝利をほこるようなことばを一つも口にしないで、うちとけて話した。やがて王さまはタリエールにいった。

「どうだろう、私たちにむかってふりあげた、うらぎりの剣をゆるしてやってはくれまいか？」

「神はどんな罪をおゆるしになります。」と、タリエールはうやうやしくこたえた。「あなたはこゝのずるいラマズの首から、もうなわをはずしておやりになりました。」

「おまえは自分の領地に帰るがいい。」と、バルサダンはハタイ王にいった。「ただし、こんどもしうらぎったら、天罰はおまえにくだるだろう。」

みつぎものとして、毎年、ドラカン（大金貨）一万、ハタウリ（中国貨幣）一万、絹一キヤラパンをおさめることを命じた。それから従者たちをつけて、自由にふるさとに帰ることをゆるした。ラマズ王はバルサダンの前に平伏した。

「おそれいました。うらぎりの罪はどうぞお忘れくださいますように。今後、そむくことがありません。八つぎきにされてもいいとけません。」

ラマズ王はその部下の軍勢にまもられて、帰り道へむかった。

あくる朝、タリエールのもとへ王さまの手紙がとどけられた。

《ハタイ戦争のおかげで、長いあいだおまえと別れていた。そのときからまだ一度も私は親兵をつけて狩りに出たことがない。英気をやしないと思うから、さつそく王宮まできてくれるように。》

ならされたひょうどもは王さまの足もとでじゃれつき、たかどもはとまり木の上ではりきって、銅の小鈴を鳴らしていた。狩猟のしたくはもうできていた。タリエールが着くと、王さまは目を細くしてかれのすがたを見あげ、見おろした。

「タリエールはさわがしい土地を平定して、がいせんしたのだよ。」と、王さまは、王妃をかえり見ていった。「おかげで身も心もはげばれた。そこでこのおりに、娘に王位をゆずる準備にとりかかろうと思う。タリエールはたのもしい勇士だから、一度娘に正式にひきあわせる必要がある。娘をおまえのもとまで呼んでおおき。あとで私もそこへいくから。」

一同は出発した。山のおふもとにひろびろとした谷がひらけていた。狐犬とたかどもが野の鳥を追ってとらえた。気持よくつかれて、長い行列をつくって帰ってきたが、王さまはまだ終ろうとせず、ポール競技の選手たちを呼び集めた。

広場から、やねから、通りから、群集がタリエールを見ようとひしめいた。金銀をちりばめたかれのいでたちから、ぴかぴかと後光がさすようであった。人々はかれをほめることばがたりないのにこまった。とりわけ、戦利品からつくられた美しいターバン（ずきんの一種）は人々の目をおどろかせた。

王さまは馬をおり、タリエールをつれて王宮へはいつていった。タリエールは広間へ一歩進むと同時に、立ちすくんだ。玉座には王女がすわっていた。あたりには家臣たちがぎっしりといながらいた。玉座から王妃がおりてきて、タリエールをむかえ、わが子のようにだいて、口にキスした。

「敵にはいつも二倍にして復讐するように。」と、王妃はいった。

やがて酒宴がひらかれた。王さまは王妃とならび、タリエールの前に王女がすわった。たがいに相手をちらちらとぬすみ見するだけで、口をきくことはできなかつた。飲みものも食べものもテーブルにあふれ、こんな豪華な宴会は今まで見たこともない、と人々はささやきあつた。エメラルドヤルビーをちりばめたさかずきが光つた。どんなに酔つても退席してはならぬ、といいわたされていた。タリエールは王女を前にして、うつとりと心なごむのをおぼえた。なんとこの世はすばらしいのだろう、と感じた。

音楽がやんだ。王さまは立つて、目をかがやかせながらいった。

「タリエールよ、おまえははげしい戦いを勝利でかぎり、私たちの名譽をあげた。わが国の人々が、おまえをほこりとし、おまえを愛しているのはもつともである。私はおまえにこの世でいちばん貴重な織物をおくらなければならぬのだが、おまえの服はもうそれだけで、くらべるものがないほど美しい。だからそのかわりに、宝物百点をあげよう。」

パルサダンは楽しく、幸福であつた。たえまない歌と、ハープやリラの音の下で、宴会は日がかたむくまでつづけられた。ついに王妃は王女をつれて席をしりぞいたので、これを機会に人々は散りはじめ、まもなく宴会は終つた。

タリエールもしたたかに酔つてやしきに帰つてきた。まるでたき火の中に身をなげたかのよう
に、からだじゅうがほてつていた。そこへふいに門番があらわれた。

「ヴェールで顔をかくした婦人が、お目にかかりたいと申しております。」

タリエールはよろこんでかの女をむかえた。アスマートはいつてくると、うやうやしくおじぎ
しようとした。タリエールはもどかしげにそれをとめて、こしかけにすわらせ、息をはずませて聞
いた。

「なんのお使いです。愛のおことばのほかは、聞く耳を持ちませんよ。」

「わかつてますわ。ですから、こうしてお手紙をおわたしするよう、あたしにお命じになったので
す。」

タリエールは王女ネスタンの手紙を読んだ。

「あなたは寶石のようにかがやいています。戦場からお帰りになつて、いつそう強く、いつそう美
しくなり、あたしをおどろかせました。きょうからはひとりぼっちも、なみだも、もうおそろしく
はないでしょう。あなたのためなら、死もいといません。あなたがこの世を去るならば、あたしも
いつしよにやみの中へまいます。ほこり高きライオンとは、あなたのことです。あたしのほおは
花咲く春の庭のように燃えています。あたしはあなたのもの——信じてください、この心はほかの

だれにもあたえません。いぜんのあなたの悲しみを考えると、まったくそみたいです。強い人はいたずらになみだなど流すものではありません。あなたは人々にうらやまれる勇士です。あたしをいつまでも幸福にしておくような、記念品をください！ ショールがのぞみです。このショールをあたしがかけたら、あなたにもきつとお氣にいます。そのおかえしに、あたしは自分の腕輪をさしあげます——今夜のことは永遠に忘れないでしよう！

手紙には、いままで王女の腕にはめられていた腕輪が添えられてあつた。タリエールはすぐそれを自分の腕にはめた。王女ののぞみのショールというのは、タリエールがいつも巻きずきんとしていたこいむらさき色の、ふうがわりのショールであつた。かれはこれを頭からはずして、アスマートにわたした。そして手紙の返事を書いた。

「お目にかかったとあなたに、はりつめていた氣力はくずれ、美しさに目がくらんで、またも氣がへんになりました。一人まえの騎士があなたのどれいになることを、おゆるしください！ しんせつにもてなしてくださつたあの宴会のいつときは、なかく私の心にきざみつけられているでしょう。おくりものの腕輪は、さつそく私の腕にはめられました。この胸のときめきをなんといいあらわしたらいいのでしょうか？ 私にはその才能がありません。おのぞみのショールをおとどけいたします。なおついでに、敵の土地で手に入れた衣装もおおくりします。どうぞ、この氣のくるつた男を

突きはなさないで、助けてください。あなたは私にとって、この世界に生きていくただ一つの道なのです！」

手紙とおくりものをアスマートにわたしてから、タリエールは横になって、目をとした。とろとろとしたかと思うと、すぐネスタンの夢を見た。おどろいて目がさめた。いのちが夜のやみよりもくらくなつたように思われた。だが美しいまぼろしはもう二度とあらわれなかつた。

意外なむこえらび

タリエールは王宮へ呼ばれた。かれはなにかいい話が待っているような気がして、いそいそと出かけた。王さまは王妃とおそろいでかれをむかえ、玉座の前にすわるようにすすめた。

「私も年をとつた。墓はますます近くなつた。いつおさらばするかもはかりがたい。」と、王さまはいつた。「知つてのとおり、私には男子がめぐまれなかつたので、インドの王冠をつぐのはネスタンのほかにはない。そこで王家のむこにふさわしい人物をさがさなければならぬが、この国をまかせるには、すべての点で私に似ていることが必要である。敵の剣におびやかされないように、政治にはかしく、戦いには強く、王国をまもつていける人物がのぞましい。」

「王子さまなしてこの世をあとになさることは、さぞお心のこりでごさいますしやう。」と、タリエールはこたえた。「しかし王女さまは光あまねき太陽のようなおかたです。おむこさまをむかえれば、天はこの家族を祝福するにちがひありません。私に相談なさるまでもなく、王さまご自身でおえらひなさいませう。」

王家のしんせきの人々の話し声を聞いているうちに、タリエールの首はしだいにさがってきた。顔がまっさおになった。

——だめだ、なんとというむごい運命のさばきなのか！

「では、ホラズム国の王子をのぞましいむこときめる。」と、パルサダンはいった。「まだほかに、かれにひけをとらないような候補者があるかね？」

この話はもうずっと前にきまっていたことだったのか、とはじめてタリエールはさとった。かれは絶望した。前途がまっくらになった。思いきって、自分のひそかなのぞみをうちあけようか、とさえ考え迷った。心は灰となつてくずれ、胸は冷えてかたまつた。

「ホラズム家の血筋は正しく、名誉も世界にきこえています。」と、王妃は念をおした。「しかもその王子は当家のむこととして、はずかしからぬりっぱな人がらなのですからね。」

じゃまする権利のないことが、タリエールにはからたを八つぎきにされるよりもつらかった。か

これは王妃のことばにただうなずきながら、自分をなげきの底に沈めた。

パルサダンはホラズムの首都に大使をおくつた。つぎのような手紙を持たせて、

「インドの土地は将来強いささえを必要としています。ところが当方には娘ひとりしかなく、これが後つぎの女王ときめられています。もしご子息をおゆずりくださるとしたら、これにまさるよろこびはありません！」

やがて大使は絹織物や色美しい衣装のおみやげを持って帰り、ホラズム王が承知したことをパルサダンにつたえ、手紙の返事をわたした。

「神は私の希望をおさつしなされたのです！ 花よめの美しさの前には、朝日もその光を失うでしよう！」

それからホラズムへはたびたび大使がおくられた。かれらははやくむことのをよこすようにとホラズム王にさいそくした。

タリエールは大きな不幸がいよいよ近づいてきたことを知った。ある日、市場からやしきへもどつて、ベッドに横になると、剣をぬいて、じつとやいばを見つめた。絶えまない苦しみで、つかれきっていたが、やいばのさえた光は、なにかおそろしい運命のかべにかれを追い立てるように思われた。ちょうどそのとき、召使いが手紙を持ってはいつてきた。

《ポプラのようにすらりとした人があなたを待っています。すぐおいでください！》

タリエールは急いだ。なみ木のあいだを通って塔の前へ出ると、目を泣きはらしたアスマートが待っていた。タリエールはすぐその涙のわけをさとった。いつものかわいらしいえくぼを見ることのできないのがつらかった。アスマートはものもいわないで、ただほおをぬらしていた。かれはどきとした。もしや、という疑いとおそれが心にわいた。だがまもなくアスマートは涙をおさめて、かれを奥に案内し、カーテンをあげた。

ダレジャン・ネスタンを見ると、タリエールは苦しき悲しみもわすれた。しかしいつものあたたかさは感じられなかった。かの女の顔からは月の光のようなつめたい光がさしていた。エメラルド色の服を着て長いすの上にすわり、肩からはショールが流れて、ほのおのようにゆれていた。やつとなみだをおさえていた目が、はげしくかれにそそがれていた。それは岩の上からじっと見おろすとのら目であった。タリエールはおそろしさに顔をそむけて、思わずすこし後ずさりした。ネスタンは身を起した。目がきらきらと光った。なじるようなことばが口をついて出た。

「あなたはちかいかいのことばを破るおつもりですか？　うらぎって、それをふみつけになさるおつもりですか？　それならば、あなたはきびしい天罰をうけなければなりません。」

「私になんの罪がありましたしょう？」おどろいてタリエールはいった。「武士の名譽にかけて申しま

す。運命うんめいにしいたげられていることが、なんであなたをはずかしめることになりましょう？」

「おだまり！ ひきょうもの！ そんないくじなしとは知らなかつた！ まるでばかみたいにあな
たにだまされていたかと思うと、あたしはくやしい。あなたはホラズムの王子おうじがあたしのむこにき
められたことをごぞんじです。ご自身ごじしん、その相談そうだんにあずかつたうえ、賛成さんせいしたのではありません
か。あなたはあたしたちのやくそく、あたしたちのかたいちかきをお忘れわすれになつた！ あたしはあ
なたをけつして許ゆるしません。いつぞやあなたがこのバルコニーで氣きを失なつてたおれ、医者いしやたちが
病氣びやうきの原因げんいんをあれこれと案あんじていたときのことを、おぼえていらつしやるでしょう？ あれもお芝しや
居いだつたんですね？ 愛あいを感じかんじたふりをなさつたんですね？ さあ、お逃にげなさい！ あたしだつ
て弱山よわやまはおことわりです。ついでにいっておきますが、あたしはどんな人ひとにも玉座たまざはゆずりませ
ん。外国人がいこくじんはどんな方法ほうほうをもつてもインド王おうになることはできないでしょう。そうでないと思おもい
なら、それはあなたが自分じぶんで自分じぶんをあざむいてよろこぶというもの、あなたみたいなひきょうな
たにふさわしいお考かえというものです！ いまあなたは不幸ふこうな運命うんめいにしいたげられている、とおつ
しゃいましたね？ ばかばかしい。それならさつさとどこへでもいっておしまになればいい。さ
もなければ、魂たましいと肉體にくたいとを別々べつべつにしておしまになればいい。たとえ地ちのはて、空そらのきわみをお
さがしなさろうとも、あたしのような女おんなを見つづけることはできないものを！

タリエールはなみだをおさえきれなかつたが、このときやつと王女のことばをさえぎつた。

「おしかりのことばから、また希望がよみがえり、愛するおかたのまなこから、また力がわいてきました。あなたと別れることになれば、私のまぶたはもう二度とひらかないでしょう！」

長いすのまくらべにコーラン（回教の聖典）があるのを見ると、タリエールはそれを手にとつて、神を、そしてネスタンを祝福した。

「あなたは太陽の熱で私を焼きました。だが神かけて、私は人をだますことのできない男です。私のことばに一片のうそだにあらば、私の上に、天もくずれおちよ！ 私は生涯にまだ悪事をしたお

ぼえは一つもないのです！」

王女はようやくなつとくしたらしく、タリエールにうなずいて見せた。

「なるほど、おまねきによつて、私はご相談の席につらなりました。」と、タリエールはつづけた。

「しかし、むこどのはホラズムの王子と、そうきまつていたのです。それに反対して、立ち去ることもできたでしょう。ただそうすると秘密がもれることになりますから、私は、同意のふうをよそおつたのです。私はひそかに考えました。—— へいつたい王さまはなにをかんちがいされているのだらう。わが国は強大で、堂々と名誉をたもつことができる。外国人にたよらなくても、この私ひとり王冠と領土をひきうけることができる。なんでホラズムの王子などをインドの玉座にすえて

「いいものか。」ホラズムの王子を許さないとすれば、あなたとの結婚をじゃましなければなりません。それにはおもいきった手段しかない。私は自分にいました——《考えを一つに集める！おまえははじめな気がいなくなってはいけない、不幸に負けてはいけない！どんなことになろうとも、ネスタンをホラズムの王子などの花よめにしてはならぬ！》

王女のほおにばら色がさし、微笑がのほった。

「どうしてあなたをうらざりものだなんていったんでしようね。」と、王女はいった。「あなたにはふた心もいつわりもないことが、よくわかりました。考えれば、勇気とひきょうとが結びつくわけはありませぬもの。その勇気でもって、あたしの手と王冠をパルサダンにもとめ、あたしたちふたりに国をおさめるから、と申し出なさい。」

王女ははじめて自分のとなりにすわることをタリエールにゆるし、これからなすべき仕事について注意をあたえた。

「ただあまりいいそいではいけません！ なりゆきをじつと見つめて、それに調子をあわせていくことです。いま結婚に反対すれば、王さまはおこってあなたをしりぞけるでしょう。おふたりの仲が悪くなれば、国は不幸におちります。そうかといって、おむこさまが着けば、あなたから引きさかれて、あたしたちはほろびなければなりません。外国人たちはよろこんで、この国をさんざんに

荒らしまわり、国民はひどい苦しみをうけます。いいえ、ぜったいにかれらをこの国の主人とすることはできません。そこがむずかしいところですよ。」

「ホラズムの連中が着くまで、待ったらどうでしょう？」と、タリエールはいった。「私はかれらのでたらめな性分を知っています。こちらの骨のあるところを、いやというほど思い知らせてやりましょう。私の道をじゃまするやつは、いのちがいらぬやつです。」

「女らしい考えかもしれませんけれど、大胆な人はむだな血を流さないもの、と承知しています。おむこさまには手をつけても、そのほかの従者たちを苦しめてはなりません。正義はかれ木にも花を咲かせます！ 軍勢の助けなしで、外国人を道からはらいのけなさい。ただし屠殺場の家畜のように、かれの護衛隊を殺してはいけません。それがすんだら、王さまに宣言しなさい——」
「外国人を私たちの上にいただくことはぜったいにできません！ たとえ一円のはした金でも、外国人にはやりません。私には王冠にたいする権利があります。もしお聞きいれなければ、私は王さまにそむいて、都を焼きすてます！」と。あたしの愛のことは、父に知らせはなりません。父がおれて、話がまとまれば、しぜんにあなたをおむこさまに、とたのんでくるでしょう。そうすればあたしたちは晴れてインドの玉座へのぼることができます。」

王女のかしい計略を聞いて、タリエールはふたたび力がもどつてきたように感じ、敵をしりぞ

ける劍を思つて、胸が高鳴った。いとまをつけると、ネスタンはなごりおしげに呼びとめた。かれは一步ふみ出した。だがかの女をたく勇氣はなかつた。

王女と別れ、アスマートとも別れて、帰つてくると、幸福を期待しているはずの心の中に、いゝようなない苦しみが重くのしかかっていることを感じた。タリエールはまるで断頭台に引かれる人のように、おぼつかなく足を運んだ。

ホラズム王子の死

まもなくホラズムの王子が到着する、という知らせがきた。むこにとっておそろしい危険なときが近づきつつあることを、知るや知らずや、王さまはたいそうよろこんで、にこやかにタリエールに話しかけた。

「これでやつと重荷がおりた気持だよ。どこに聞えてもはずかしくないりっぱな結婚式をあげよう。ほうほうに人を出して、金銀やすばらしいおくりものを集めさせている。けちけちしないで、おもいきって、はでにやろうじゃないか。」

むこどのは軍隊と従者をしたがえてやつてきた。パルサダンはおむかえの親兵隊をおくつた。ど

ごもかしこもきらびやかな兵隊でいっぱいになった。

「かねての手はずのとおり、広場にテントをはって、むこどのはじめ一同にゆつくり休息させるように。」と、王さまはタリエールにいった。

タリエールはむらさき色の網のテントをはるように命じた。かれの軍隊は列を正して、ホラズムの一行をむかえた。

とどこおりなく、バルサダンの命令をはたして、タリエールはいったんやしきにもどろうとした。なによりも、ひと休みすることが必要であった。ところが使者が後から声をかけて呼びとめ、アスマートの手紙をわたした。王女がすぐお会いしたい、という文面であった。

かけつけると、アスマードがうちしおれて待っていた。

「ずいぶん、おいさめしたのですけれど、お聞きいれがないのです。あたしの力がたりないばかりに、あなたをお助けできないで、申しわけありませんわ。」

中へはいった。王女はひたいにふかいしわをよせて、タリエールをにらみつけた。

「戦いを避けるおつもりですか？　こしがぬけて、ちかいをお忘れになったのですか？　おくびよう風に吹かれたのですか？」

はずかしめられて、タリエールはまっかになつた。

「どんな人でも、あなたと私のあいだのかきねになることはできません！ また決闘するために女のさけび声を必要とするほど、私はもうろくしてはおりません！」

タリエールはやしきにとつて返すと、武器を持って集まるようにけらいどもにいつけた。まもなく覆面した騎馬の一隊が風のように町を駆けぬけていった。

タリエールはホラズムの王子のテントへふみこんだ。王子は眠っていた。タリエールは剣をぬかないで、王子をたたき起した。はね起きて、王子はうってかかった。タリエールは王子の両足をつかんでふりまわし、柱に頭をぶちつけた。王子はその場で息絶えた。

番兵たちはびっくりして急を告げた。ホラズムの軍勢はいつせいに矢をつがえた。飛んでくる矢をよろいでふせぎながら、タリエールは陣地を突破した。あるじが殺されたことを知って、護衛隊が追ってきた。タリエールにせまったものは、かたっぱしからうちたおされた。

タリエールは父からゆずられた城にたてこもった。自分の部隊を集めて、城壁を岩よりもかたかくためた。そのうえ、四方に急使をおくって命令をつたえた。

《私に忠実なものは、すぐ城にかけつけるように！》

四方から、昼も夜も人々がやってきた。かれをにくんでいた敵たちは、おそれをなして逃げ散った。かれは城を出て、堂々と都へおし出そうとしたくをはじめたが、そのとき、三人の高官が王さ

まの使者としてあらわれた。かれらは王さまのおことばをつたえた。

「おまえをわが子のようにいつくしんでいたことは、おまえもよく知っているはずだ。王女を愛しているなら、なぜはやく、心をうちあけてはくれなかったのか？ 不正な殺人は私の胸に剣をさしたのとことならない。私のほこりも私のやかたも血でだけがされた。おまえは老いさき短い白髪の人、主人に毒を飲ませたのだ。」

「王さま！」と、タリエールは返事を書いた。「苦しみを通して、私は鉄のように身も心もきたえることができました。あなたの領土は広大です。しかし男の血すじはたえようとしています。王家の養子として、そのあとをつぐものは私のほかにはありません。インドは私のものとなるでしょう！ 私には王冠と王位をいただく権利があります。祖国の運命は私の肩にかかっています。なぜよそののにたより、ホラズムの王子ごときはこの国を渡そうとなされたのか、私には合点がまいません。この国は外国人に支配されてはならないのです！ 私が剣をさしているのはなんのためでしょう？ この国が侵略されるようなとき、この剣で敵を一步も踏みこませないためではありませんか！ 王女さまを花よめにのぞんでいる？ とんでもないことです！ どうぞご自由に、お気に入りの人をかの女にえらんであげてください！」

王女ネスタンがさらわれたてんまつ

タリエールは王女に密使をおくり、その返事をじりじりする思いで待っていた。不安と苦痛でも立ってもいられなかった。野原の丘にのぼっては、遠く王女のいる方をながめてばかりいた。ふと二つの人が目が目についた。とぼとぼと、つかれきったようすで歩いてくる。タリエールはなにかあやしいおそれを感じた。思わず丘をかけおりて、そちらへ走り寄った。アスマート！きょうだいのように思うアスマートではあったが、そのおもかげは見られなかった。顔はゆがみ、ほおにぼら色はなく、口に微笑はなかった。

「どうしたんです。」と、せきこんでタリエールは聞いた。「なにか、いちだいじでも？」

「神は天をわって、あたしたちの上のうちおとしたのです。」と、アスマートは、はく息もせつなげにこたえた。

このうえにもまたどんな不幸がおびやかしているのか、とタリエールは問いつめた。アスマートは悲しみとつかれにうちのめされて、それを口にするこゝろでもできなかつた。ひたいからも、ほおからも、血が胸の上にしたたりおちていた。

「はじめから順序をたててお話しします。」やつと氣をとりなおして、アスマートはいった。「それにしても、なんだってこんなひどいめにあうのでしよう。いつそ殺されたほうが、どんなに楽だかわからないのに……。」

「——」ホラズム王子が殺されたことを知ると、王さまははげしい怒りにもえあがり、すぐタリエールをひつとらえて、嚴罰に処せ、という命令を出した。だがタリエールは父の城に逃げた。軍部大臣が自分の城にたてこもったという知らせは、王さまを不安にした。王さまはタリエールに使者をおくった。その返事は王さまの氣にいらなかった。王さまはますますおこった。

「いや、タリエールはたしかにネスタンを愛しているのだ。しかも愛で目がくらんでるのだ。罪なき血を流したことは、私の一生のしみとなった！ これというのも、妹のダワトルが娘に悪魔の教育をほどこして、徳の道をふさいでしまったからなのだ。もうようしゃはならぬ！ ダワトルをひつとらえて、首をはねてやらなければ、神の前にも申しわけがたぬ。」

王さまは口さきだけでおどしたことは一度もなかった。いったん罰しようときめたことは、雷がおちるように、かならず実行した。ダワトルは、死んだ魔法使いの夫人で、やはり魔法がとくいであるといわれていた。悪魔の手さきが、かの女の身にふりかかる危険について、さっそく知らせてきた、——「たいへんです！ 王さまがあなたを首きり役人の手にわたすといっていますよ！」

「あたしになんの罪があるというんです。」と、ダワールはふんがいたした。「首をきるといふなら、きられましょう。そのかわり、もうあの気がい娘をただではおかないから。」

こうして新しい不幸がネスタンの身におそいかかった。かの女のへやに、いきなりダワールがふみこんだ。

「このいたずら女め！ はねつかえり娘め！ とんでもない畜生だ。」と、ダワールは聞くにたえない悪口をどなりちらした。「よくもあんな大胆不敵なことをたくらみおつたな！ 人殺しをお客のそこへさしむけたりして。おかげであたしに腹いせのおはちがまわってきた。あたしは、おまえのために首をきられるんだよ。ねんがらねんじゅうおまえを見張っていたわけでもないのにさ。そのお礼に、いまおまえをタリエールから引きはなしてやるんだ。」

王女をゆかにひきずりおろして、血にまみれるまでさんざんにうちすえた。ネスタンは息もたえだえになった。かすかにうなるばかりで、氣つけの酒も、かの女を元氣づける役にはたたなかつた。ダワールの命令によって、よそものの黒人がふたりはいってきかた。口々になにかわめきながら、なげきようしやもなく王女をかつぎあげて、おもてにおいたこしに、はこび入れた。王女はさらに小船に移された。そのときから、王女のゆくえはわからなくなつた。

ダワールは自分の運命を知つていた。

「このままですむわけはない。しかえしにひどいめにあうのを待つよりは、自分で自分のしまつをつけるほうがましだ！」

そう決心して、胸に小刀を突きたてた。

涙でとぎれとぎれになりながらも、アスマートはやつと話し終つた。

「そういうしないで、こうして生きてお目にかかれるのも、あたしにはふしぎなくらいです。いえ、あたしには死ぬ権利もないのかもしれないかもしれませんわ。」

「かわいそうに。」と、タリエールはさげんだ。「いまさら泣いてもしょうがない。元氣を出すがいよ。なに、私（わたし）がきつとさがし出してみせる。砂漠（さぼ）であれ、海（うみ）の荒波（あらかみ）であれ、高い山（たかいやま）であれ、私（わたし）におそろしいものはないのだから。」

かれは自分の心が火打ち石（ひうちいし）よりもかたくなっていることをたしかめて、すぐ王女（おうよ）救（すく）い出しのしたくにとりかかった。

忠実（ちゅうじつ）な部下（ぶか）百六十（ひゃくろくじゅう）人をひきいて、城（しろ）をあとに海岸（かいがん）へいそぎ、船（ふね）のりこんだ。船（ふね）はいっぱいに帆（ほ）をはって、見知らぬ国々（くにくに）をめぐっていった。会う人（ひと）ごとにたずねたけれど、なんにも聞き出すことはできなかつた。神（かみ）はタリエールにすくいの手（て）をさしのばさなかつた。いく月（つき）かすぎたが、まるでいく年も過ぎたように思（おも）われた。夢（ゆめ）にさえも愛（あい）する人（ひと）のおもかげを見ることはなかつた。そのあい



だに部下の人々は病氣にかかつて、ひとり死に、ふたりたおれて、ほとんど全滅した。これも天命だ、とタリエールは齒をくいしばってがまんした。

ついにある岸べにただよい着いた。生き残つてかれにしたがうものは、ふたりの部下とアスマートだけであつた。アスマートはどこまでもかれと運命をともしする決心をしていた。泣くまい、と思つても、つい涙が出た。いまは涙だけが、ただ一つのなくさめであつた。

フリドンの都

夜とおし海岸づたいに歩いていった。朝になつてみると、海岸にみどりの林があり、ぎざぎざの岩の丘のむこうに町があつた。町の人々はうさくさそうにタリエールたちをながめた。それが不愉快なので、かれらは林の中へはいつて、休み場をつくつた。百年の大木のかげで、みんないっしょに眠つた。

とつぜん、だれかのさけび声で目がさめた。見ると、この休み場のすぐ前を、見知らぬ人が馬にむちをくれて走ってくる。騎士の剣は折れて、赤く血にそまっていた。かれは波うちぎわをとばしながら、しきりにだれかに悪口をあびせていた。またがっているのは、ほれほれするくらいりっぱ

な黒馬であつた。(この黒馬があとでタリエールのものになる)タリエールは部下を出して聞かせた。

「勇士よ、なにをそんなにおこつて居るのですか？」

部下は返事をもらえないで、すぐすどもどつてきた。こんどはタリエールが自分からとび出して、
いって、騎士のいく手に立ちふさがつた。

「あなたのいかりが正しければ、友だちになりましょう。」

これを聞くと、騎士は馬の速力をゆるめ、親しげな調子でこたえた。

「旅のかたらしいが、見ればりっぱな人ながら、よろこんでお話しましょう。ねこのようであつた連中が、ライオンとなつて私におそいかかつたのです。よろいを着るひまも、たてを持ち出すひまもなく。」

「心臆する人は男でなく、ふりかかる剣をおそれる人は勇士ではありません。」

タリエールのことばは騎士の氣にいった。ふたりは兄弟のように腕を組んで、休み場へもどつた。部下は医者の心得があつたので、騎士の矢傷を水で洗つてあてした。

「して、敵はなにもののですか。」と、タリエールは聞いた。

「いや、私の運がわるかつたのです……。」と、騎士は話しはじめた。

——騎士はヌラジン・フリドンといつて、ここから見える土地の領主であつた。先祖から伝わる

土地で、広くはないが、たいがいたいがいの国には負けないくらい美しかった。その都はムリガザンザリと
いった。

フリドンの祖父はその土地を子どもたちのあいだに分けあたえた。フリドンの父はその土地のほ
かに、海にある一つの島をかれに残した。ところがおじがこの島にすわっていて、どうしてもあ
けわたさなかった。

フリドンはたか狩りを思いたって、小船を島にこぎよせた。護衛隊はこちらの岸に残して、帰りを
待っているように命じ、たか匠五名だけしかつれていかなかった。へしんせきの人々がいるとこ
ろに、なんて護衛隊が必要だろう？フリドンは獲物を追って、野原をかけていった。

ふいに島の守備兵たちがフリドンをとりかこんだ。いとこたちは大軍をひきいて、岸に残された
護衛隊にむかった。剣のひらめきを見ると、フリドンには勇氣と力がありあがつた。自分の部隊を
助けようと、かこみをやぶって小船にとびのった。敵は大波のようにかれにとびかかった。だが卑
劣なものどもに名譽のよろこびがあたえられるわけがない。敵はフリドンにけちらされた。すると
新手の援軍があとからあとからくり出されて、右から、左から、かれをおそった。フリドンはきり
まくった。こんどは背後から、別の援軍がかけつけた。フリドンの剣は折れ、矢筒はからになった。
フリドンは馬もろとも海へとびこんだ。敵はかれのけんまくにおじけづいて道をあけた。しかし

かれの部隊はほとんど全滅していた。こちらの岸へフリドンが近づくと、敵の大軍はあわてて船をこぎもどした。

「どうしても復讐します。」と、フリドンは話をむすんだ。「朝は悲しみ、夜は苦しみが二倍になるように。かれらの死体の上で、からすどもが大宴会をひらくように。」

タリエールはかれの復讐が正しいものであることを知った。

「どっちも敵は罰をうけなければなりません。だから、いそがないで、じつとようすを見さだめて、一挙にほうむってしましましょう！ さてこんどは私の番ですが、私の身のうえ話はあなたの気持を暗くするおそれがあります。いずれそのときがきたら、なんにもかくさずにすっかりうちあけますから。」

「ほんとにいい人に会ったものだ。」と、フリドンはいった。「私もあなたのためなら、いのちをおしみませんよ。」

フリドンを先頭にして、かれらは都にはいった。小さいけれど、りっぱな町であった。部隊が整列して出むかえた。兵隊たちはいずれも傷ついて、血だらけな顔をしていたが、領主の足もとにひざまずいて、その剣にキズした。タリエールは建物の美しさ、はくらの絹をまとった町の人々の美しさに、目をたのしませた。

そのうちフリドンの傷がなおって、戦いに出来るようになった。部隊が編成され、軍船が集められた。

敵の船が十そうあまり、かぶとをいただいた兵隊をのせてあらわれた。タリエールはまっさきに進んで、先頭の敵の船にこちらの船をぶつけた。敵兵はひめいをあげて海におちた。タリエールは二番めの船のへさきをつかんで、ひっくり返した。波にのまれた敵兵たちがうかんでくると、ようしやなくかたつぱしからきりすてた。あとの船はふるえあがって、力いっぱい島の方へこぎ逃げた。フリドンの船々から、いっせいに拍手かっさいがあがった。

島の岸では敵の騎馬隊が待っていた。いりみだれた白兵戦がはじまった。フリドンはおおぜいをあいてに戦うのがたくみで、しかも強かった。敵はみるみるくずれた。おじもそのむすこたちもむくいをうけた。フリドンはその怒りをおさえることができず、かれらの手首をちよんぎれと命じた。それからふたりずつにしてしぼり、たがいに大声あげて泣かせた。

逃げる敵を追って、その都へ攻め入った。捕虜たちは重い石でひぎをたちきられた。戦利品はちつとやそつとのキャラバンでは、はこびきれないくらいたくさんあった。

フリドンの都へがいせんすると、町中の人がこのらず出むかえた。曲芸師や奇術師がそのたくみな芸を見せたりして、まるでおまつりさわぎであった。口々にフリドンとタリエールをほめそやし

た。

「なんと強いかた。あなたの手からはまだ敵の血が流れてますよ。」

「王者の王とは、とのさまのことです！」

だがタリエールはいつしよによろこぶことができなかつた。かれの悲しい運命を知る人がひとりでもいるたろうか。

王女をたずねて十年

ある日タリエールはフリドンといつしよに狩りに出た。獲物を追つて高いがけの上のぼつたと
き、フリドンはふと思ひ出した。

「そうだ、いつぞやここへきたとき、じつにふしぎなものを見たことがあるんですよ。」

タリエールは気をひかれて、かれの話に耳をかたむけた。

「やはり狩りに出ました。馬はたかよりもはやく飛び、かもよりもたくみに水を泳いでいきます。空の高いところには一わのとびが舞っている。私は馬をとめて、なにげなく海面に目をやると、波まにちらちらと動くかげがあります。なにかがかもめのようにすばやく海をすべっていく。なんだ

ろう、と私は思わず手綱をにぎりしめた……。」

「してそれは、けものですか、鳥ですか？」と、タリエールはせきこんで聞いた。

「よく見ると、一そうの小船なんです。色さまさまざまな帆をあげ、その下に寶石のようにゆれ光るものがある。やぐらです。やぐらには目のさめるような姫君がいます。みるみる小船は岸へ着きました。タールみたいにまっ黒な水夫どもが、姫を船から岸への岩の上へうつしました。私は姫を見ると、思わずからだかふるえだした。雪に咲いたばらのように美しいのです。こんな美しい人がこの世にあるとも思われません。私はかの女をうばい取ろうと決心し、いっさんにとび出した。ご承知のとおり、**黒鳥**は鳥を追い越すほどはやい。それが全速力でかけたのですが、まにあわなかった。あつというまに姫をのせて、小船ははるか沖に遠ざかった。水夫たちは悪魔の手さきどもだったのですね。いくらくやしがつても、およばないわけでした。」

聞いているうちに、タリエールの顔色はしだいに青くなり、ついに地面に力なくくずおれて、なみだにむせんだ。

「王女をごらんになったとは、なんと運がよかったことでしょう。」

フリドンはびっくりして、しんばいそうにタリエールの上にかがみこんだ。

「すみません！ つまらないことをしゃべって、ご気分をそこねて……。」



「いや、あなたになんの罪つみがありません。」と、タリエールはさえぎった。「これにはふかいわけがあるのです。いまくわしくそれをお話お話ししましょう。」

タリエールは悲かなしい運命うんめいについてフリドンに物語ものがたった。

「そうとは知らずに、かるがるしくふるまい、面目めいめくもありません。」と、フリドンはいった。「あなたはさすらいびととしてここへきました。が、もともと王者おうぎのかんむりを天てんからさずけられた人ひとでした。それならば、天てんはあなたの傷きずあとを消けし、あなたをわざわいからまもるにちがありません。どんな運命うんめいも、賞しょうとしてあたえられたものと信しんじていいのです。」

ふたりはフリドンのやかたの前まえで馬うまをおりた。

「そういえばそうかも知れません。」と、タリエールはいった。「現げんにあなたのような、またとない友ともだちをさずかったのですからね。どうかいい知恵ちえとすばらしいことばで私わたしを助たすけてください。私わたしにも、とらわれの王女おうじよにも、幸福こうふくがもどってくるような。ただどうしても王女おうじよをとり返かえすことができなければ、私わたしには死しがあるばかりです。」

「この友情ゆうじちをおろそかにはできません。」と、フリドンはこたえた。「私はできるだけのことをするつもりです。ごらんささい、この町まちは入江いりえにのぞみ、入江いりえは帆ほでまっ白しろになっています。そこでは世界せかいの四方ほうのたよりを聞くことができず。きつとあなたの薬いすみを見みつけてあげられるでしょう。こ

ちらからも船を出して、姫君をさがさせます。氣を強くもつて、苦しみがよろこびにかわる日をお待ちなさる。」

フリドンの命令によつて、たくさんの船がしたてられた。

「見知らぬ海のはてばてまで航海して、波をくぐつても姫君をさがし出すように。どんな障害にもめげないで、私たちに吉報をもたらすように！」と、フリドンはいいつけた。

タリエールはもうじき王女にめぐりあえるような氣がした。悲しみはかげのようになつた。フリドンは、かれのためにあらためて玉座をもうけた。

「私はまったく氣がきかない人間でしたが、いっぺんで目があいたようです。世の中にだれがあなたを尊敬しないものがありますしやう。」

遠い外国の港々をのこらずまわつて、船はみんな期限までに帰つてきた。むだだった。ダレジャン・ネスタンのことを耳にしたものはひとりもいなかった。タリエールはがっかりして泣いた。

「いよいよ私の終りも近づきました。」と、かれはいった。「あなたと別れるのは、昼の光から夜のやみの中へ消えていくようなものです。でもこれからすぐにさらわれた王女をさがしに出なければなりません。どうか私をはなしてください。」

フリドンは別れを悲しんだ。兵隊たちも運命をのろいながら、タリエールの足もとにひれ伏し、

キスしたりだきついたりして、ひきとめた。

「どうぞおもいとまつてください。お墓までも忠実におともするつもりでいますのに！」

「私だって、よろこんで出発するのではありません。」と、タリエールはこたえた。「しかしどんなにたいせつにしていたとしても、私の胸は晴れないのです。さらわれた王女を忘れることはできません。ちかったことを思い出せば、なんとしても、ぐずぐずしてはられません！ 神の前にも申しひらきがたちません。」

フリドンもついにあきらめて、せんべつに《黒》をおくった。

「これにまさるおくりものはないと思います。体格といい、速力といい、こなすぐれた馬はまず世界にも類がないでしょう。」

フリドンはタリエールを見送った。兵隊たちはうなだれて立ちならんだ。ふたりは涙をながしながら、かたく口と口とをあわせた。親身の兄弟と別れるようにして、ふたりは別れた。

タリエールはフリドンの国をあとにして、よその国々をめぐり、また海をわたり、会う人ごとに王女のことをたずねたけれど、すべてはむだに終わった。まるでけもののように、なかば狂気のていで、あちらこちらをさまよった。

——ひろい野原をうろついて、いったいなんになるのだろう？——とタリエールは考えた。

うつりかわる生活をいまいましく思うだけで、なんにもなりはしないじゃないか。

かれは忠実な部下とアスマートにいった。

「おまえたちには苦勞ばかりかけて、ほんとにすまなかつた。私を残して、どうか自由にどこへでもいってもらいたい。私にはもうのぞみはない。どうせとまることもないこの涙、これも忘れてもらいたい。」

「二度とそのようなおことは聞かせないください。」と、けらいたちは天をおおいでいのつた。「ここでお別れして、いつまたお目にかかることができましょう。私たちにとっては、とのさまただおひとりだけがたよりなのですから！」

そのま心にうたれて、タリエールはまたかれらをともない、国から国へとめぐっていった。いき会う人もまれな土地を去り、しかやかもしかだけしか住まない荒野に夜をあかし、谷をわたり、岩山を越したことも数知れなかつた。

ついにある洞窟にまよいこんだ。これはデフという力の強い魔ものたちのすみ家であつた。たちまちもうれつな戦いがはじまつた。かれらはくさりかたびらをぼろ綱のようにちぎりとして、忠実なけらいふたりを殺した。タリエールはふかく悲しむと同時に、怒りが百倍した。やりをふるって突きまくつた。デフどものおそろしい悲鳴は天までとどき、岩々をゆり動かした。そのほこりで日

もくもり、木々はおびえて身をふるわした。百にあまるデフどもはいっせいにタリエールにおそいかかった。やりが折れると剣にかえ、かたっぱしからきつてすて、ついにかれはひとりもあまさをデフを退治した。

信義の別れ

「その洞窟というのが、つまりこのことなのさ。」と、タリエールはいった。「私たちはここに住みついた。そして私はいかかわらず山野を狂気のようにかけめぐっている。私にとつても、アスマートにとつても、死んだほうがどれだけ楽だかしれやしないんだがね。それからこの肩から胸にかけている金色の毛皮は、王女がめすところのかたちに見えるので、せめてこうしてしんでいるわけだ。アスマートが悲しげに目をふせて、縫ってくれたんだよ。まったく、つらい生活だ。だがもう私は剣を自分の上にはふりあげないよ！ そのかわり、王女をどこかにかくしているこの世界がにくい。私にとつてのかくれ家は、けものがひそむさびしい場所になった。そうしてもう十年がすぎた。ネスタンのゆくえはまだわからない。それでも私はどこまでもちかいをまもるつもりでいる。」



タリエールの長い物語はおわった。話のあいだに二度も三度も悲しみにうたれて氣を失いかけた。するとアスマートが水晶の水でかれのひたいを冷やした。語りつき、また語りついで、語りおわったとき、かれの顔は死人のようにあおざめていた。

アフタンジルはなみだをどめかねて、ただいたましげにタリエールを見まもるばかりであった。タリエールをなぐさめるものは、アスマートのいのりのほかにはなかった。

「これで話すことはすつかり話した。」と、タリエールはいった。「おまえも聞くことはすつかり聞いた。いつでも愛する人のところへ帰れるだろう。おまえもお別れた。」

「別れる前に、ただ一ついっておきたいことがある。」と、アフタンジルはいった。「こんな苦しみはなんにもならない、ということだ。いくら悲しんでも、それでおまえの愛する人が幸福になるわけではない。はやい話が、どんなに名医でも病氣になれば、ほかの医者呼んで脈をとらせ、薬を調合してもらい、熱の原因などを語らせなければならぬ。苦しいときには、他人の忠言が案外やくにたつものだ。経験をそれとなくもらす賢者のおしえにしたがい、いろんな人の話に耳をかたむける——これがかしいややかただ。おさきまっくらで、はやりたつては、けつして目的は達せられない。私も苦しい経験をなめつくしたが、おかげで自分の国へ帰ることができぬ。帰つたら、おまえの悲しみのことはよく話すつもりだ。騎士の誓約はゆめにも忘れぬ。天も証人になつてゐる。」

じつとがまんして、ここから動かないでいてくれ。かならずまたもどつてきて、またおまえと会い、おまえのためにできるだけのことはするから。ネスタンはきつと見つけれられる！ しんはいすることはないよ。」

「おまえの同情には感激のほかはない。」と、タリエールはこたえた。「おたがいのあいだからは、ばらにうぐいすのようなものだ。もう一度いっしょになって力をあわせたなら、どんなにか強いものになることだろう！ しかもたいに、もうここから野のはてへとび出してはいかないよ。もしおまえがもどつてこなかったら、運命は二倍もたえがたくなるが、おまえの顔を見たら、悲しみのかげも消えるだろう！」

友情によつてむすばれた兄弟のかたいちかいをさらにかためて、洞窟に夜をあかし、ともにあかつきの光をむかえた。

別れはつらかった。アフタンジルは顔をくもらせ、しおしおと馬をすすめた。とらの皮をまとつた騎士は、ほろほろと涙をこぼしながら、友のあとを見送つた。アスマートはひざまずき、すみれのようにうなだれて、友を忘れないようにいのつた。アフタンジルはふりむいて、力づけるようにいつた。

「私はどうしておまえたちを忘れることができようか？ かならずもどつてきて、タリエールに見

弟のあかしをたててみせるよ。もし八週間たつてもあらわれなかったら、私をどんなのろいにもかけるがいい。私にはおそろしい地獄があるばかりだ。」

三、アフタンジルの歌

アフタンジル、アラビアに帰る

アフタンジルは自分の領地に着いた。親兵たちはおどりがあって、かれをむかえた。急使がすぐシエルマジンのもとへとんだ。

《私たちをあとに残して、この世のよろこびを失ったそのおかたがお帰りになりました！》

シエルマジンはむかえに出て、かれにだきつき、うれしなみだを流しながらキスした。

「これは夢でしょうか、うつつでしょうか。ごぶじのお顔を見て、こんなうれしいことはございません。」

「神がおまもりなされたのだ。」と、近親の人々もけらいたちも口々にいって、アフタンジルを祝した。

アフタンジルはかれらとともに、飾りたてられたやかたへ近づいていった。城下の人々は総出でなつかしい主君の顔をあおいだ。その夜のさかんな祝宴のありさまは、とうていことばでいいあらわすことはできない。アフタンジルは涙でとぎれとぎれになりながらも、長いさすらいの旅のことで、不幸な運命におちた人と友情をむすんだしだいを一同に物語り、

「私はね、友がなければ宮殿もくさったパンのようなものだ、と思ふよ。」と話しておわつた。

シエルマジンのはるす中のできごとをくわしく報告した。アフタンジルはこの代官役がすべてうまくきりもりしていたことを知った。そのあと、ぐっすりと眠って力をつけ、つぎの朝早く馬にのつて王城さして出発した。かれはシエルマジンにさきのりを命じ、十日かかる道のりを、わずか三昼夜でとばした。

急使が王さまにかれの報告をもたらした。

《王さまのご威光によって、私は運命にうち勝つことができました。もしふしぎな騎士に会わなかったら、私は面目を失うところでしたが、さいわいに目的を達し、よろこび勇んでいま王宮へ急いでいます。》

つづいてシエルマジンが王さまの前へ出て、アフタンジルの到着を告げた。また王女にも、

「待ちに待ったお客さまが、たいせつなお役めをはたして、お帰りになりました。」とつたえた。

王女チナチンは、シエルマジンには数々のおくりものを、そのおともの人たちにはぬいとりのある服を一着ずつあたえた。

アラビア王ロステワンはけらいたちにとりまかれて、城門のところまでむかえに出た。王さまもうれしかったが、人民たちもそのうわさを伝え聞いて、騎士を見ようと八方から集まった。

馬からおりてアフタンジルは低くおじぎした。ロステワンはかれにキスし、みずからその手をとって、王宮の広間へ案内した。

祝宴は夜のふけるまで長びき、酒は川となつて流れた。王さまは総司令官の顔を、わが子の顔を見るように、うつとりとながめていた。お祝いの品々がみんなにおくられ、真珠の粒がまめのようにおしげもなくくばられた。

やがて宴会はおわり、一同は退出した。総司令官は王さまに人間ぎらいの勇士についての物語をはじめた。その人のあとをたずねてさまよい歩いた見知らぬ国々の風物が、目で見えるようにえがき出された。

「遠いタリエールのことを思うと、だれが泣かずにいられますよう。あのような不幸にあえば、どんななりつばな人間でも、色を失つたばらのようになります。ダイヤモンドもくもり、あしはいばらにかかります。」アフタンジルははるかな友をしのんで、ほおをなみだでぬらした。「タリエールは

強いデフどもを退治して、岩窟に住んでいます。いつわり多きこの世界を信ぜず、とらの皮をまとつて、絹の服にも、どんな富貴にも心を動かされません。かれには忠実な召使いの女がつかえています。この女にとつても王侯のめぐみはすこしもありがたくはないのです。」

やしきに帰ると、チナチンからの使者がかれを待っていた。アフタンジルはつばさを得たこちで王女のもとへとんでいった。王女はゆつたりと居間にすわっていた。髪は黒く、ほおは水晶のよう、口は赤く、ユーフラテスの川岸のしゅろの木のようにすんなりとしていた。アテネの雄弁家ででもなければ、かの女をたええることはできないであろう。

王女はアフタンジルによりそつた。さかづきのふちからあふれるばかりに、幸福はふたりをいっぱいにした。王女はうれしさに心もはずんで、よく飲み、よく食べた。やがて王女は聞いた。

「それで、長いあいだ、あなたがさがしていたその人は、いまだどこにいますの？」

アフタンジルはタリエールについて知つてゐるかぎりのことを、くわしく物語つた。

「迷つてゐる人の苦しみは、かるくしてあげなければなりません。」聞き終つて、チナチンはいった。その声は感動にふるえていた。「ですが、かれの傷、かれの苦しみをなおす薬が、この世の中にあるでしょうか？」

「ですから、私がかれと兄弟のちかいをたて、かならずまたもどつて、このいのちをもささげると、

とやくそくしてきたのです。友が友のために訓練をうけることをおそれてはなりません。心は心と呼びあつて、その愛情が道をきりひらきます。愛する人は、愛する人の気持がわかるでしょう。これは愛の苦しみをうけているのです。それがどんなにあまくても、友のない生活などはうれしくありません。」

「あなたは王さまのぞみをはたしてぶじにお帰りなさいました。愛情によつて、さまざまな悲しいできごとをたえしのび、いいお薬を得て、王さまの心をなおしてあげました。人間の運命はお天気のようであてにならないものです。いま日がかがやいてるかと思ふと、もうくもつてくる。朝のよるこびは、夕がたには悲しみに終る。そのように悲しみのあとにはまたよろこびもくるでしょう。兄弟にあたえたことばをゆるがせにしてはなりません。迷つてゐるその人のもとへ、お帰りになつて、愛する人への道をさがしてあげなさい。義務をはたして、かれに希望をもたせてあげなさい。ただ、あなたなきあとでは、あたしにまた暗い日々がくるでしょう。」

「七つの悲しみも八つめの悲しみにはおよばないといひます。」と、アフタンズルはいつた。「せつかくいっしょになつて、また別れる——つらさは百倍です。しかし私はいかなければなりません。ただ心に矢がささつたままでは、いこうにもいかれません。もう一度生きるのぞみもてるような、記念の品をください。あなたの決意によつて、私の道をあかるく照らしてください。」

チナチンはやさしい愛のことばで、アフタンジルをなくさめ、教師のように生きる道を説きふくめた。そして真珠の腕輪を記念にわたした。

アフタンジルはやしきに帰った。しかしやるせない気持をおししずめることはできなかった。太陽が雲にかくれると、地面はうすぐらくなる。愛するおまえがそばにいなければ、朝も夜にかわる。万一、二度と会うことがないとしたら、なにをのぞみに生きていかれよう！花園の花のように自分をやしない育てた人が、胸にやりを突きたてて、傷あとを残した。そのために自分は消えることなきほのおに焼きつくされようとしている。なんとという意味のない地上の生活か。長いあいだ待ちに待った再会のよろこびは、たちまち別離でかき消される。わかいのちをむりに墓場へ引きこむようなむごい運命！

それを思い、これを思つて、アフタンジルは砂漠の砂に横たわる気持でベッドにたおれた。夢にチナチンがあらわれた。ばら色のほおはあおざめ、なみだが霜のように凍りついている。早春のあした、このようにして花はかれる。

いとわしきは人の心である。それは生き血を吸う幽鬼に似ている。幸福をさがすことは、めくら人が夕焼けを見ることがと同じく、むだな努力である。どんなに足もとをはかつていっても、道はいっしか消えている。人の心にたいして、死も、強い王者も、なんの権威もありはしない！

なぐさめるすべもなく、苦しみをうらみのつぶやきにそいで、記念の真珠の腕輪をとり、胸に
だきしめて口づけした。血のなみだが赤い絹織物のように流れた。

夜明けに、王さまからお呼び出しの使者がやってきた。はね起きて王宮へ急ぐと、角ぶえの音も
高らかに、狩猟士たちがはりきってさんざめいていた。

王さまとつれだつて狩り場へいった。どらの音がひびき、空はたかのむれでくらくなり、猟犬の
ほえ声は野づらを圧した。獲物の血で草も赤く染まったほどの大猟であった。王さまも高官たちも
親兵たちも、みなまんぞくしてひきあげた。王宮の広間ではたてごとにあわせて、歌がはじまった。
アフタンジルは王さまが聞くままに、また旅の話をした。あたりの人々はタリエールのおそれを知
らない風格を口々にほめたたえた。

——その夜もアフタンジルはねむれなかつた。横になり、また起きあがり、またねてみたが、胸
のほのおは消えなかつた。

——たえしのべば、道も通ずるだろう、——ついにそう心をきめた。——悲しみになれないかぎ
り、どうして自らを助けることができよう。天の幸福を期待するいじようは不幸をもなめなければ
ならない。運命に追いつめられて、どんなに死にたくなつても、生命の名において生き、生きてい
る人々のために生命をささげなければならぬ。それならば、愛のほのおはだれの目からも深くか

くしておく必要がある。愛するものは心の秘密をみだりに口に出すべきではない！

大臣のとりなしの失敗

「神よ、私は心が、しずまらないのです。長くたえしのふ力をあたえてください！」

朝早く起きて、アフタンジルは神にいのり、それから馬にのって総理大臣ソグラートのもとへいった。

「よくいらした！ どうもあなたがお見えになるような気がしてましたよ。」と、大臣は総司令官をかんげいした。けらいたちは低くおじぎして、かれの前に厚いじゅうたんをしいた。

「ばらのおいがふいてくるぜ。」そんなことをささやきながら、けらいたちは入れかわりたちかわり、かれの顔を見たがって、あいさつにやってきた。大臣とふたりきりになってから、アフタンジルは悲痛ないのりをこめて話した。

「あなたは秘密のうちに、どんなことでもいちいち王さまに忠告をなさいます。どうか私のなやみを聞いてください！ 私はあの人間ぎらいの騎士とおなじ苦しみにとらえられているのです。会わずにいると、もう一刻一刻が息づまるばかりです。あなただって友のためにはいのちをおしまない

でしょう。そういう気持は尊敬されなければなりません。私はその騎士と兄弟になりました。ですから、つながる糸のように、心はその岩窟のたき火のそばに残っています。かれの召使いの女、それも姉か妹のような近しさです。いつまでも結ばれているよう、ちかいました。この友情にそむかないかぎり、一時もはやく助けにいかねければなりません。私がかれを見つけて、長いあいだの王さまのなやみをなおしてあげましたが、私の胸は晴れないのです。かれは私のもどるのを、じりじりして待っています。おくれたらいちぢです。狂気の人を救い出すことは神の意志でしょう。ちかいの前にしりごみするようなものには、勝利はめぐまれません。私の決意のほどを王さまに伝えてください。たとえおゆるしがなくても、それで引きさがることはできないのですから、ごきげんよく私をおくり出してくださるよう、おとりはからいねがいます。お礼はいくらでもいたしますから。」

アフタンジルはことばをきつて、ちよつと考えてから、すぐつづけた。

「王さまにはこのようにお話しくださいましたらいかがでしょうか？ ——アフタンジルは友情から身をひくことのできない人間です。友なしでは、どんなこの世の幸福も楽しくはないといっています。かれが友を助け出したら、王さまのおん名はますます高くあがるでしょう。そもそもかれをしかりつける理由があるでしょうか？ 罰するならば、天が嚴罰をくだします！ 万一、とちゅうでいの

ちをすて、かれが帰らないとしても、王さまには敵をうちしりぞけるじゆうぶんな力があります。ここはどうぞ、ひろいお心で、かれが王宮を去るのをゆるしくなさるよう、私からもおねがいたします。——— こういう調子で、ま心こめて王さまにうちあけてくださったら、よもやおわかりにならないことはありませんまい。」

「いかにもごもつともなおたのみですが。」と、大臣はこたえた。「あなたのご決心を聞いたなら、ロステワンはきつとお腹だちになるにちがいありません。この私まで、まきぞえくつて、とんでもないめにあわされます。王さまのそこへこの話でいくよりは、いつそあなたの剣でひとおもいにきられたほうがましなくらいです。《司令官も司令官だが、そのふといたくらみを私に伝えるなんて、ぶれいにもほどがある。このたわけものめが！》とおしかりになって、八つぎきにされないまでも、もつとひどいはずかしめをうけるかもしれませぬ。だいいち、考えてもごらんなさい。司令官がいなくなつて、軍隊はどうなります？ 敵どもはいつだつてすきをねらつてゐるんですよ。かれらから主君をまもるのがあなたの役め。すずめのむれは、けつしてわしにはなれませぬ。」

「しかし、友情は愛よりもつと清らかなものです。いったん兄弟のちかいをたてたからには、かれをくらやみから太陽の方へ引きもどすまでは、安心はありません。私にとってなにが苦しみか、なにがよろこびかは、私自身がいちばんよく知っています。なみだでもつた目をして、どうして

主君を助けることができましょう。まさか大臣のお心が石になつたわけでもありませんまい。いや、このようなねがいは、はがねのやいはをもやわらげるものです。よくわけを聞いたなら、王さまだつてあなたをはずかしめはしないでしよう。ぜひ王さまにたのんでください。こっそりここをたのくようならそつきに私をしないでください。」

「だまつていて悪いこともあれば、しゃべつてけがすることもあります。あなたの決意には負けました。あたつてくだけです。おたのみはひきうけました。」

大臣はロステワンの前へ出た。王さまはりつばな服を着て、まぶしいばかりに見えた。大臣は氣おくれがして、アフタンジルにたのまれたことはが出ず、ただ口をもぐもぐするばかりであつた。

「なにをためらっている。かくさずにいうがいい。」と、王さまはさいそくした。

「それが、その、まことに申しあげにくいこと。」と、大臣はへどもどした。「じつは、アフタンジルにたのまれまして、そのおねがいにあがりました。つまりかれはこの不信の世の中にあいそがつきたから、ちかつた友のところへ帰らせてくれ、といつていますので……。」大臣はここで勇氣をふるいおこして、いいたした。「いや、どうもうまくお話できませんが、アフタンジルの悲しみはたいへんなもので、なみだが川となつて流れています。いや、とんでもないことをおつたえして、おそれいます。」

王さまの顔はみるみるけわしくなり、目はあやしく光ってきた。

「おまえは正気でそんなことをいいにきたのか？ それで大臣がつとまると思うのか？ 悪魔だつてアフタンジルみたいなひどいことはいわないぞ！ よくその舌がのどにひからびつかかなかつたものだ。まるでものを知らなればかものことばではないか。そんなことを聞くくらいなら、私はつんぽになつたほうがいい。おまえは司令官の使者になつた罪をあがなわなければならぬ。それでもこの私の敵ではないといえるか？ ふとどきものめ！」

王さまはおろおろする大臣にこしかけを投げつけ、

「アフタンジルがたち去ることはけつしてゆるさないぞ——たれがりつばな男にそだてたと思つてるんだ！」ときげびながら、大臣の頭をかべにごつごつたたきつけた。

大臣はほうほうのていで逃げた。

——しまった！ なんだつてあんな使いをひきうけたんだらうな？ まずいことをいっちまつて、あれじゃ王さまがおこるのもむりはないよ。

「だから、いわないことじゃない。さんざんなめにあいました。まるで悪い夢でも見たような気持ちです。」と、大臣はアフタンジルに報告した。なきけないと同時に、おかしかった。大臣は泣き笑いしながらむすんだ。「わいろをとれば地獄ゆきだといいますが、私は口やくそくだけであなたに

「サービースして、一生漕なならないほどのいたでをうけましたよ。」

「不幸の友を助けないのははじです。」と、アフタンジルはこたえた。「ばらがしほめば、うぐいすは死を待つばかりです。だからかれはいのちの露をもとめて飛び去ります。うるおいがなければ生きてはいかれないのですからね。私はわが家をして、野獣の住む森へ去ります。敵とはかりにかげられて、はずかしい生活をつづけるより、そのほうがどれだけましでしょう。なやみとはなにか、不幸とはなにか、私は王さまにそれを書いて出します。どんなにお怒りになってもかまわない。おとりあげにならないければ、のぞむところではないけれど、ひそかにたち去るよりほかはありません。」

大臣はけらいたちを呼んでお客をもてなした。けらいたちはよろこんだ。大臣はまだ相当のおくりものをさし出した。食事がすむと、やがてお客は去った。もう日が暮れていた。

アフタンジルはやしきにもどって、大臣へお礼の手紙を書いた。

「あなたのお心づくしにはまったく感激いたしました。とうていそれにおむくいすることはできません。せめてこのいのちをさしあげるばかりですが、それでもなお私はあなたの債務者です！」

かれはしゆすの反物三百本と色さまざま美しい宝石六十個をえらび、これを手紙につけて、大臣のもとへとどけさせた。

アフタンジルの脱走

アフタンジルはシエルマジンにうちあけた。

「いろいろやってはみたが、のぞみはない。また不幸がおちてきたのだよ。王さまは私が出ていくのをゆるるしにならない。さりとて、タリエールなしでは私は生きていけない。第一、不信なおこないを神がだまってみのがすはずはない！ 別れてきた人のことを思えば、こうしているまもなみだはあふれ、底なしに胸は痛む。およそ友の心に友情の火が消えないようにするには、三つの道がある。まず——かれといっしょにあつて、いつもそのめんどろをみることに。つぎは——財産をおし、まずに、おくりものでかれをよろこばせること。第三は——不幸におびやかされたとき、かれのささえとなること。タリエールは旅のとちゆうで私を助けた。こんどは私の番である。もう話したり、ねがったりするときは過ぎた。いまはただ脱走あるばかり。あとはおまえが私のように勇敢にまっすぐに、私の城と領地をまもり、軍隊の指揮官となつて、国のかためにつくしてくれるように。いままで忠節であつたように、これからはさらにその二倍も忠節であるように！ 敵をてひどくたたきのめせば、おまえの威勢に敵はふるえあがるだろう。不忠なものは嚴罰に処し、忠義なも

のには財産を分けあたえるように。さいわいに生きて帰れば、私の債務は百倍となってもどされるだろう。真理にかえるものは、けつして神に見はなされることはないのだ！」

「おつしやるまでもなく、私はどんな運命にもさからってまいります。」と、シエルマジンはなみだをながしていった。「しかし、あなたおひとりでまた知らぬ国々へ旅だちなさってははいけません。ぜひ私をおともさせてください。あなたのゆくえがわからないとあつては、私としてだれに申しひらきがたちましよう。」

「おまえをつれていくことはできないのだ。考えてもごらん。おまえのほかにも、やしきや財産をまかせられる人物がどこにいるか？ それにこれは私が当然、にならうべき不幸の重荷ではないか。愛に忠実である人は、追放もしのばなければならぬし、さびしい放浪者として涙をながすこともたえなければならぬ。それが運命のおきてなのだ。ただすなおにしたがうよりほかはない！ この試練にたえる力のないものこそ、あわれまれていい。私をそんな弱い人間と思わないでくれ！ この世の中は、くさったきゆうりほどのねうちもありはしない。太陽の意志をなしとげようとするかには、なんのためらいもなく、国もすてよう、やしきもすてよう、なにかもふりすてるのだ！ もし私が帰ってこなかったら、どうか泣いてとむらってくれ。ただけつしてあとを追って死んではならない。」

アブタンジルはロステワン王にあてた長い手紙を書いた。手紙というよりも、遺書といったほうがいいかもしれない。

《法をおかして、私はひそかに脱走いたします。もし友と会わなかったら、遠い他国から、二度ともどつてはまいります。王さまのご威光によつて旅のしゅびをおまもりくださいますよう、おねがいいたします。》

「友のために自分をささげるといふ私の決心は、あなたにもよくわかつていただけると思っています。」「偽善者あるいはうそつきは肉体のあとから魂がくさる。」と、プラトンはいいました。うそは、それが心にやどつたがさいご、あらゆる不幸のもととなります。どうしてあのままよえる友を忘れることができましようか？ 私にとつてかれはたいせつな兄弟です。天のおきてをさとるために私たちには知悪とものを見る力があたらえています。聖書は愛についておしえています。「愛は天までとどく。」——これが王さまにおわかりにならないとしたら、なんで一般無学のものにわかりましようか？

「私はどんな敵にも負けない強い力をあたえられました。これをあたえたのはだれでしょう？ 神の同意がなければ、なにごともおこなわれません。太陽がなければ、すみれは色あせ、ばらはかれます。あらゆる美しいものは人間を力づけるためにあります。友がなければ私にとつて生活はな

いのです。私はひとりぼっちでぼろびるばかりです。

——王さまのお心にそむいたことを、とがめないでください！

友情のきずなはきろうとして

きれません。たとえどんなところにいようと、かれの愛する人をさがすことに安心を見いだして、私の気持はすこしもゆらぐことはないでしょう。

——勇士にとってのおきては、不幸に屈しないということです。

どんな人でも運命をさけて通りぬけることはできません。天が定めたことならば、私は苦しみをうけるかくごです。それは私にとつて名誉いじょうに高いものです。私が正しくないとお考えでしたら、私を罰してください。しかし友の信頼をうらぎり、また自分をもうらぎることが、はたして正しいことでしょうか？ 私

はうらぎりとうそで固めた人間をいやします。

——かたがたふるえて出征におくれるものは戦士とはいえませんが。たとえ戦場には出て、合戦の前に逃げるか、合戦さいちゆうにおそろしさに立ちすくむばかりです。ひきょうものは、いつもつむぎ車の前にすわっているおばあさんにもおよびません。それでも死は一つです。どんなかわしいがけの道も死をひきとめることはできません。弱いものも強いものも目をつぶるときはいっしょです。はずかしい日々を生きるよりは死んだほうがいい。しかし名誉ある死でなければなりません。

——うちあけて申しあげますならば、毎日、毎時、死は私をおびやかしております。運命がすこ

しても狂えは、私はただのさすらいびととして、世界のかたすみで果てるでしょう。それをあわれむ人もなく、しんるいも家の子たちも告別することさえできないでしょう。ただあなたに私のおこないをゆるしていただければ、それで私は安心して目をつぶります！

——私の財産はともかぞえることができませぬ。私の後生のために、それを家なき人に分けあたえ、それでどれいたちを解放し、みなし子たちをいつくしみ、貧しい人たちをうるおしてやってください。それでもまだあまつたら、新しい橋をかけ、多くの人々に家を建ててやってください。私のがままをゆるして供養をしてくださるのは、王さまの任かにはないのですから！

——これいじょうくどくどと申しあげて、おやすみのじゃまをしてはいけません。私の胸の中はもうよくおわかりくださったこととぞんじます。この世になきものとおぼしめして、どうかお怒りをしずめてください！

——私のあとはいっさいシエルマジンにまかせてあります。かれはよく私のかわりをつとめると思います。この忠実なけらいに、あつき信任をたまわるようおねがいたします。

——この悲しい手紙は私みずからしたためたものであります。やしない育ててくださいました恩人から、私は遠く去っていきます。王さま！私を忘れてください。あなたは強大です。近づく敵が、あなたのおそろしさを知ることはいのりです。》

アフタンジルはこの手紙をシエルマジンにわたした。

「いいおりを見はからって、王さまにさしあげてくれ。いまはおまえだけがたよりなのだから。」
そういつてかれは血のなみだをながしながら、シエルマジンの手をとった。

アフタンジルは旅だちのしたくをととのえて、お寺にいった。アラビアの夜はふけて、まっ黒なとばりがおりにていた。かれは神殿にぬかずいて、いのった。

「神よ、あなたは心に愛の火をつけられた。しかも私を悲しい別離の運命の手におわたしなされた。たねをふみにじるように、愛をもほろぼすおつもりでしょうか？ あなたは大地のささえてす！ 敵の剣をほらい、海のあらしをしずめ、夜の悪魔をしりぞけて、なおこの身に害がないように、私をおまもりください。」

門の前でかれはしばしシエルマジンと別れをおしみ、それから、運命のようにためらうことなく、いっさんに馬をとばしてかけ去った。

ロステワンはきげんが悪かった。いつものように広間に出て客たちと会うことも、とりやめになった。廷臣たちは王さまの顔色をうかがって、おろおろするばかりであった。王さまは自分の居間にソグラートを呼びつけた。大臣はおっかなびっくりして、ただむやみに頭をさげた。

「きのうはしつれない話を聞いて、かっ腹がたち、おまえをひどいめにあわせたが、考えてみれ

ば、おまえだけが悪いわけでもない。」と、王さまはいった。「怒りは不幸の根である、と聖者はおしえておられる。なにごとでもそれをきめるには、まずよく考える必要がある。もう一度くわしくアフタンジルのねがいについて話してみる。もうおこらないから、えんりよせずに申せ！」

だが大臣がすっかり話しおわらないうちに、王さまは、「もういい——。」と、かれの口をとめた。「やはり私がゆるさなかつたのは正しい！ どうだ、おまえは私が坊さまよりもきびしいと思うか？ もうこのことについてはなんにもいうにおよばないぞ！」

大臣はやしきに帰つた。まもなくけらいたちがあわててかけつけて、アフタンジルが、どこかへいってしまったことを告げた。大臣はあおくなつた。

「いよいよたいへんだ。王さまに報告しなければならぬが、私にはとうていできない。だれかきもつ玉のふといのがいてくれ！」

強そうなけらいを四、五人使いに出した。ところがみんなおじげづいて、使いの役めをはたしたのか、はたさなかつたのか、ひとりも帰つてこなかつた。

ロステワンは不幸なできごとをうらす感づいた。かれはおそばの人々にいった。

「たいへんだ！ どんな戦争にも負けたことのない勇士が、私たちを見すてたらしい！」

王さまはうなだれてため息したが、やがてけらいのひとりを呼んで、



「すぐ大臣を呼んでこい。」といらつめた。「いったい大臣はなにをぐずぐずしてるんだ？ はやく事件を報告すべきじゃないか。カメレオンみたいなくじなしめが！」

大臣はいっそうびくびくして王さまの前に出た。

「太陽が雲にかくれたというが、ほんとか？」と、王さまは聞いた。

アフタンジルの脱出がはつきりすると、王さまは白髪をかきむしって、人前もかまわず泣きだした。

「せっかくの教え子がなんだって私をおき去りにしたのか？ きょうからはこの王宮も、もう悲しみの家だ。おまえが帰るまでは、私にはよろこびはない。おまえといっしょに森のけものをおどろかせたり、競技でおまえのわざのたくみに感心したりすることは、もうできないのか？ おまえの美しい声はもう二度とひびかないのか？ いまさらこの財産がなんになり、この王権がなんになる？ もちろん、どんな長いさすらいにも、おまえはうえるような男ではない。野にも森にも獲物はある。いつかは私の苦しみをやわらげもしてくれるだろう。だがそれまでに私が墓にはいったなら、だれがこの土くれに泣いてくれるか？」

いちだいを聞いて、廷臣たちや軍人たちもいっばい大広間につめかけた。それぞれ王さまになぐさめのことばをのべたけれど、王さまは頭をかべにうちつけて、なげき悲しむばかりであった。

「もう日は照らぬ！ 私たちの劍の力も敵どもにおそろしくなくなるだろう。ただかれのぶじをいのるよりほかはない。それにしても、かれはたったひとり出ていったのだろうか？」

それにこたえるように、シエルマジンが長い書きおきの巻きものを持ってあらわれた。

「私はこの羊皮紙の書きものを主人の寝室で見つけました。いまごろアプタンジルは従者なしで、ただひとり遠い旅にあるでしょう。おそばにありながら、ゆきとどかず、まことに申しわけもございません。」

手紙を読みおわると、王さまはいった。

「軍隊は喪に服すること。また寡婦とみなし子を集めて、さすらいびとに平和とめぐみがくたるよう、天にいのりをあげさせること！」

二騎士の再会

日の光がなければ、ばらはしほみ、花の色を失う。愛する人と別れた心も、ちようどそのように傷つきいたむ。

——わが道を照らしておくれ、チナチンよ。こんなにも、やみがふかいものを！

アフタンジルはそういりながら、旅をつづけていった。雨をくいしばってはみたが、なみだはチグリスの川波のように、あとからあとからおしよせた。たくさんの国々を過ぎた。星は金の砂をまいたように空に光っていた。その一つ一つにかれは愛する人のおもかげを見て、それと語りあつた。

「おまえは人間の苦しみや心配をとりのけてくれるという。はやくおまえのように美しい人とあわせておくれ！」

昼間の暑さにすっかりつかれて、冷たい川の岸に休むと、流れる水はその人のささやきのように胸をゆすつた。東が白むと、また馬のくらにまたがって、けわしい道にふみ出した。

遠くに高い山脈が見えた。走ってくるかもしかを矢で射とめた。これで元気がついた。

「野のすみれにも会わなかった。運はよくないけれど、なんとしてもたえしのぼなければならぬ。」

ときに迷い、ときにけがをし、ずいぶん遠い道ではあつたけれど、アフタンジルはついに見おぼえある洞窟に着いた。

アスマートがかけ出してむかえた。あまりのうれしさに、なみだがかさきにたち、口をきくことができなかつた。アフタンジルは妹のようにかの女をだいて、キスした。

「ときに私の兄弟はどこにいるのかね？」

やがてアフタンジルは、そう聞いた。アスマートはまたなみだにくれた。

「あなたがおたちになつてから、あの人はまたこの山を出ていったのです。それきりで、まだなんのたよりもありません。」

アフタンジルは胸にするどいやりをつきさされたように身ぶるひした。

「なんだつて？ やくそくをわすれたのかね？ それともあのちかいはうそだったのかね？ かれに会わないとしたら、私の生涯はどうなるんだ？ 私をわすれ、私たちの友情をふみにじつて、どこかへいっちまった！ なるほど、運が悪いと思つたのは、これであたりまえだ。」

「おなげきはごもつともですけれど、これにはわけもございます。」と、アスマートはいった。「ちかいかもやくそくも血がかよつてゐる心の中なら生きてもいましょう。あの人の心は石なのです。死ぬことしか考へていないのです。心と魂と知恵——それは一つにつながれた輪です。その心が死んだなら、魂も知恵もいっしょにほろびます。タリエールの心がなやみで焼きつくされ、血がこおりついている、ということはあるあなたもお忘れではありません。かれの苦しみをうまくことばでいいあらわすことはあたしにはできません。じつはそれがあたしにのみこめたのは、つい近年のことですもの。あの苦しみを知れば、岩もゆらぐでしょう。戦いをわきからながめれば、だれしも自

分を戦術家のように考へるものです。あの人が出ていこうとしたとき、あたしは、
《もしアフタンジルがもどつてきたら、なんといいいます？》
と聞きました。するとかれはこんなふうにとたえました。

《なに、遠くにいきはしないよ。心はこの場所にしっかりとつながれているのだから。けつして友情をうらぎるようなことはしない。たとえ悲しみでこの目が泣きつづれるまでも、かならずかれを待ちおわせるよ。》

そのまま、お帰りにならないのです。こうしてあたしはまたひとり残り残されました。ひとから聞いたことですが、中国のどこかに、

——身近に友情を見つけない人は、自分から敵をもとめているようなものだ。

という文句をきぎんだ石があるそうです。どうかあの人を見すてないで、助けてあげてください

5.1

「なるほど、騎士に弱気は禁物でした。」と、アフタンジルはいった。「のどがかわけば、しかは日かげと水をさがします。こうなれば、なにがなんでも、友をさがし出さなければなりません。私は愛で心と心をむすばないで、国を出てきました。なさけぶかいロステワン王のいいつけにそむき、ひどくおこらせ、自分の役めをすてて、ひとりゆくえも知れぬ旅をさまよう——これでは天のめぐ

みを期待するわけにはいかない。どんな罰もかくこのうえです。ただ私にはちかいをまもり、兄弟を助ける義務がある。ねむりも休息もとらないで、かれのもとへ急ぎましよう！ またもさまよい出なければならぬというのも、やはり私にくださった罰にちがいない。なに、いのちのあるかぎり、やりとげてみせますよ。」

騎士は川をわたり、けわしい岩山をふみ越えて、はて知らぬ野原へと馬を走らせていった。かるやかな風がほてった顔をひやして吹きすぎた。

——それにしても、どうして自分はこんなに神にきらわれたものかな。——とアフタンジルは考えた。——なぜ、すべての人から引きはなして、こんなさいなんばかり自分におしつけるのだろう。こちらは友に忠実であったのに、友はうらぎって、消えうせた。このまま会えずにしまったら、もう生涯自分にはよろこびがない。いや、なげいてもはじまらない。なんとかかれのあとをかぎつけて、まっすぐそこへつき進むのがいちばんだ。野原の道はどこまでいつてもつきなかつた。アフタンジルは夜も寝ないで友の名を呼びたてた。三日三晩、すげのやぶの中を通りぬけていった。すべてはむだに終った。ひとつ子ひとり、会わなかつた。

それからまた困難な道がつづいた。ある日、山のふもとにさしかかつた。すると、光とかけがまじりあつたところに、ふと手綱をひきずっている《黒》のすがたが見えた。

「タリエールを見つけたぞ！」

思わずおどりがあって、アフタンジルはさげんだ。うれしさに胸がはずんだ。長いあいだの悲しみはいっぺんにふつとび、ぼらはまたぼらに、水晶はまた水晶になった。はるかに友をながめて、かれはつむじ風のようにかけた。

タリエールはたけ高いあしの草原にぼうぜんとつつ立っていた。えりもそれでもぼろぼろにちぎれ、顔はまつさおで、しかも血まみれになっていた。まるで地の底から出てきたゆうれいのように見えた。その足もとには、ライオンの死体、血ぬられた剣がすてられ、わきにはあおむけになったとらの死体がころがっていた。

「タリエール！」と、アフタンジルはさげんだ。

しかしこたえはなかった。タリエールの胸の火は消えて、心はこおりついていた。生か死か、それもわからず、もう光も見えなかった。かれは正気を失っていた。

アフタンジルはあわてて馬からとびおり、かれをかたくだきしめた。

「おい、私はやつとおまえのどこへもどってきたんだぞ！」と、なみだをはいはらい、さげんだ。あわれな騎士はうつろな目をなげたまま、なんにもこたえなかった。アフタンジルはくちびるをかみしめてあいてをゆさぶった。なみだがタリエールのほおにおちた。このとき、タリエールは

ふっとわれにかえった。そしてはげしくアフタンジルにだきついた。

「ちかいは破らなかつたぞー」と、タリエールはいった。「ほら、こうして、どうにか生きて、おまえのくるまで待つていたんだから。これで私の役めはすんだ。もう泣いたり、わめいたりするにはおよばない！ はやく私をほうむってくれ。せめてけものに食い荒らされないよう、墓にだけは入れてくれ。」

「私たちは一体となつて、どこまでも目的に進まなければならぬのだ。」と、アフタンジルはいった。「まづ黒な運命の前に屈したなら、悪魔に手をあげるようなものじゃないか！ 知恵を呼びおこせ！ 男は勇敢であれ、なみだすくなく、仕事を多く、と聖者のおしえにもある。悲しみや不幸にうち勝つには強くなければならぬ。無分別が自分の運命をだいなしにするというのはよくあることだ。砂漠に水をさがす人はしばしばだまされる。だからしっかりと知恵が必要なのだ、と聖者はおしえている。世の中をにくんで、どこに光の泉を見つけることができるか？ 傷のない人なんだからほうたいする必要があるのか？ 人を愛さなかつた人はいないだろう。その愛で悲しみや絶望を経験しなかつた人はいないだろう。それが世の中なんだ。くよくよしたつてはじまらない。あるとき、ばらにこら聞いたという話がある――。

「おまえはルビーのように美しい。それなのに、なんだつてくきにとげがあるのかね？」

へにがいものをなめたら、あまさがよくわかるでしょう。』と、ばらはこたえた。へものねうちとはそういうものですよ。もし娘さんがだれのいうことでも、はいはいと聞いていたら、その娘さんにはなんの魅力もなくなるでしょう。』

花のいのちのみじかいばらでさえ、そう考えている。苦しみやほねおりのよろこびなんでものがこの世にあるだろうか！ 悪と善とはどこへいっても、まるで道づれのようにくっついてい。世界のつれなさをむやみにのろってはいけない。いつでもそこにはなにかしらの意味がある。さあ、私といっしょに出かけよう！ おまえの考えは感情のあみにからまって、意識の光を消している。気がむかなくても、とにかく動き出さなければならぬのだ。やけな気持ちのどれいになっはならぬ。これは私の心からの忠告なんだぞ！」

「せっかくの忠告だが、私にはもうそれにしがらみがない。」と、タリエールはこたえた。「知恵とはなんだろう。気が狂ったものは、もはや光を待つてはいない。この世で別れた人とは、あの世で会うよりほかはない。私をよるこぼせてくれるつもりなら、兄弟よ、私の墓にひとにぎりの土くれを投げてくれ！ おまえにだけはほんとのことをいう。私はいま死の戸口に立っているのだ。死人はだれにも用がない。たとえまだ息があるとしても、どうかそっとしておいてくれ。」

「この世をすてれば、目的が近づくとでも思ってるのか？」と、アフタンジルはねばり強くしかり

つけた。

「自分が自分の敵になるなんて、はずかしいことではないか！ 心をとりなおせ！」

いくらいつて聞かせても、タリエールの心は動かなかつた。

「そうか、それではもう私はなにもいうまい。」と、アフタンジルはいった。「それほど死にたいのなら、死ぬがよからう……さいごにただ一つだけのみがある。私は王さまにさからつて、アラビアをあとに遠い旅に出た。これでおまえに死なれたら、いつたいたれが生きがいをあたえてくれるだろう？ きょうからはよくよしなくてもすむように、私の心をひらいてくれ。野原をいっしょにかけていくことだ。そうすれば悲しみも苦しみもふつとぶにちがいない。そのあとで、私と別れようと、死のうと、かつてにするがいい。」

馬で野がけすれば、友の気も晴れるにちがいない——そう考えて、アフタンジルはもうほかのこととは口に出さず、じつとあいての目をのぞいて、それだけを説きすすめた。

「馬をひいてきてくれ。」ついにタリエールはおれて出た。

アフタンジルはすぐ馬をつれてきて、タリエールをくらに助けのせた。ふたりははて知らぬ草原をとばしていった。タリエールはしだいに元気をとりもどし、ほおにも赤みがさしてきた。

思いつめたいやな考えが友から吹きはらわれたようすを見て、アフタンジルはすこしずつ知恵の

ことばで友の無分別をたしなめていった。いい薬が熱病をなおすように、それは友の心をはつきりさせた。タリエールはかれのいうことを耳にとめるようになった。

「どんなに深くかくしている秘密も友にかくしてはならない。おまえの手くびにはまっている輪——それをおまえはたいせつに思うのかどうかね？」

「ただそのために生きるよろこびもあれば、死ぬ苦しみもあるのだ。」と、友はこたえた。「王女のことを思えば、世界の富も——水も地も木もなんになろう。」

「そういうだろうと思っていたよ！」と、アフタンジルはいった。「それがおまえの本音なら、私もほんとのことをいう。おまえはアスマートのことを忘れているじゃないか。おまえのおこないはりっぱなうらぎりだ。なるほどその手くびの輪は美しい。目を楽しませる。だがおまえはそれにふさわしくない。アスマートはまるで兄弟のように、いく年おまえと苦労をともにしているかね？」

そのまえだって、自分のこともかえりみず、手紙の使いをしたりして、おまえにも王女にもまったく忠実につかえた。その王女のお気にいりをおまえは忘れている！ 善にむくいるに悪をもつてするの、おだやかではあるまい。」

「そういわれると一言もない。おまえは私の急所をついたよ。」と、タリエールはこたえた。「気が狂っていたが、いまはすこしおちついた。いのちがあったら、これからは兄弟のように、やさしく

「私はまた友のためにはのちをささげる。地獄の前にだつて立ちどまらない。しつかりしてくれ！ 知恵を働かさなければ、かしいおしえもなんにもならない。やたらに力をおとして、自分で自分を殺すほどばかげたことはない。どんないい運がめぐってくるかもしれないじゃないか。」

「教師はばかな生徒をきらうものさ。しかし私が苦しんでいるような苦しみをかろくしてくれる教師がどこにいます？ おまえは私と同じような愛の受難者だが、それでも私のいうことには耳をふさいでいる！ ……」

タリエールはまた首をたれて、もの思いに沈んだ。

アフタンジルはかれの考えがもとにもどることをおそれた。ふと、かれの足もとにたおれていたライオンとらのことが頭にうかんだ。アフタンジルは話をそれに移した。

「あしの草原でおまえを見つけたとき、猛獣どもがそばにいたが、どうしてあんなところにライオンとらとがいつしよにいたんだろう。」

「それが私にもおかしいんだよ。」と、タリエールはこたえ、「くわしいいきさつはこうだ。」と話しはじめた。

アフタンジルの帰りを待って、じつと洞窟の中でしんぼうしていたが、とうとうがまんできなく

なり、馬うまにのつて草原くさげんの方ほうへおりていった。

くらしい密林みつりんをすぎ、高地こうちに出た。するといきなり一匹ひとひきのめすのとらがあらわれ、そのあとをライオンが追おってきた。タリエールははじめ愛する人ひとにでも出会であったようなふしぎな気持きもちになつて、このけものどもから目をそらすことができなかつた。見ていると、とらはライオンの方ほうへからだをすりつけて、なれなれしくさむわむわしている。ものめずらしさに、タリエールは身動みどうきもせず、立ちつくした。

そのうち、二ひきのけものは歯はをむき出して、ふいにつかみあいをはじめた。とらはとびのいた。ライオンがひととびにせまつた。またからだをすりつけて、たわむれ、またとびのいてはげしいけんかをはじめた。たがいに前足まえあしでぶちあう、——あそびなのか、戦たたかいなのか、すこしもわからない。

やがてとらはものやわらかな身みのこなしで、するりとくぐりぬけた。ライオンはあとからとびかかって、あいてを力ちからまかせに地面じめんにたたきつけた。これを見ると、タリエールはかつとなつた。

「力ちからづくで弱よわいあいてにけがさせるなんて、男おとこらしいしわざではないぞ。」

かれはライオンにその声こゑをかけて、剣けんをひきぬいた。このときにはもう正気しょうきを失うっていたらしい。タリエールとライオンとのかくとうがはじまつた。タリエールの力ちからがまさっていた。かれの剣けん

はけもの頭をまっ二つにきりわった。ライオンはその場で死んだ。

剣をなげすてて、タリエールは金色のとらの方へ走りより、愛する人にするように、だいてキスしようとした。とらは前足のつめを立てて、かれにつかみかかった。おどろいてタリエールはあいてをつきとばした。だがとらはそんなことでは逃げようとせず、怒りくるってかぶりついてきた。タリエールのからだはつめで傷だらけになった。かれはついにとらをつかまえ、ひとふりふって、投げつけた。とらはずもう動かなかった……。

「そのとき私は、ふっとさいごに会った日の愛する人とのいさかいのことを思い出してね。悲しさに胸がつぶれるばかりだったよ。この世の生活が、私にとってどんなにつらいか、これでもわかるだろう。なにもかも、けものまでが私を苦しめる。世の中をすてたくなるのはあたりまえじゃないか。」

タリエールはそういって話をむすび、またなみだにくれた。

「なに、そうすてたものでもないよ。」と、アフタンジルはなぐさめた。「その人に会うのも、そう遠いことではあるまい。愛しあう人々には不幸はつきいもので、のがれるわけにはいかないが、いのちのながさを底の底までなめつくせば、きつとみつが出てくる。ふかいがけの上に人をおどらせて、死をかくしている——それが愛というものだよ。」

十一年めの旅たち

アスマートは山の下に二騎士のすがたを見て、いそいそとかけむかえた。うれしなみだが雨のよ
うに岩をぬらした。ふたりは兄弟のようにアスマートとキスをかわした。

「神よ、あたしのいのりをうけてください。」と、かの女は天をあおいでいった。「あなたはのぞみ
を失って泣いている人を死からまもってくださいました。」

アスマートは洞窟の中へもどり、残り火をかきたて、とらの皮を敷きのべて、つかれたふたりを
まねいた。それからけもの肉をさしたくしを火の上でゆっくりまわしはじめた。パンもないこん
なまずしい食事を、だれが思いうかべることができらるう。

「とにかく、食べようじゃないか。」

タリエールはなさけないような目をごちそうにむけた。ほんのすこし肉をきって、のみこむのが
やつとであった。

道にかなったいい話ならば、だれでも耳をかたむける。世の中の重荷もわすれて、一語も聞きも
らすまいとするだろう。燃えかすの煙となつて、長いあいだの悲しみがとけていくものならば、こ

の不幸な物語にもくつろぎがあたえられるはずである。

ライオンよりも強いふたりの主人公は洞窟の中で夜をあかした。朝になって、タリエールはいつた。

「おたがいにとりかわした信義のちかよりも、もつととうとものがあるか。大理石のようにかたい兄弟愛よりも、もつととうとものがあるか？ おまえの心づくしには神もほうびをたまるだろう。しかしおまえはあまりにもきびしすぎる。私は地獄の火に焼かれているようだ！ おまえは運命の意志にしたがって、さらにそれをたきつける。どうかこのまま、おまえを愛する人が待っているおまえの国へ帰ってくれ。私を助けることは神だつてできないのだから。耳があるなら、聞いてくれ——私はひとりで苦しみたいのだから。道にかなったことをしろ、というなら、私はどうにそれをした。だがいまはそれもできない。気がい——それが私の運命なのだ。」

「どうして私がきびしすぎるのだろう？」と、アフタンジルはいった。「考えてもごらん。心のいたでをなおす薬が神の手にもないとしたら、いったいだれのいいつつけにしたがえばいいの？ おまえからよろこびをうばったもの、おまえをこんな遠い土地へ追いやったもの、そのうちの意志に屈してはならないはずだ。愛が不幸とせなかわせであることを知って、その不幸に負けないのが男ではないか。私はおまえと会うために、チナチンに別れをつげたと、

「友のなやみをなやむのです。」と、はつきりいった。するとチナチンは、

「男は男らしく、しっかりお働きなさいますように。」とこたえた。

私はかの女の同意をえて国を出た。もしここでおまえを見すてたなら、私はひきょうものといわれなければならぬ。私の忠告を聞いて、力をふるいおこしてくれ。もちろん、たくさんのことはのぞまない。あと一年だけががんばってくれ。そのあいだにとらわれの王女のゆくえはきつとつきとめてみせる。もしそれに成功しないで、一年の月日が過ぎたならば、私はもうあかるい天をあおがないだろう。死んだ友のために、こんどはおまえに泣いてもらう番だ。」

「おまえのいうことはわかる。だがおまえにはまだ私がわからない。」と、タリエールはいった。「いま私にとっては、家も外もおなじこと、そして家に残ることは、そのまま地獄へおちるといふことだ。おまえのぞみを命令として聞こう！ もう一度いつてくれ。」

「道はつらいだろうが、それではおまえと手分けして、さがしていくことにしよう。」相談がすんで、友情のちかいをくりかえした。野原へ出て、ねらいたしかな弓矢で獲物を集めた。洞窟へもどった。さしせまった別れのことを思うと、またもなみだはあとからあとからあふれ出た。

心と別れた心は一度ならずおそれにおののく。心の友との別れは人をいたく傷つける。それがわ

からなければ、別れのときがどんなにづらいかはわからないだろう。

東の空に赤みさすころ、馬にまたがった。二騎士とアスマートのながすなみだは草のしとねをしとどにぬらした。

「これからまた知らぬ他国でずいぶん苦労されることでしょう！」と、アスマートはふたりを見送っていた。「道中ごぶじをいのです。あたしにもまだまだ悲しい日がつづきます。あたしには力がありません！　こんなづらいことがあるでしょうか？」

運命をなげきながら、二騎士は洞窟をあとにした。見知らぬ道をとおって、海岸に出ると、そこでひと休みした。別れを前にして話はつきなかつた。ふとアタンジルは思い出した。

「そうだ、おまえに黒馬をくれた友のことをどうしていままで忘れていたんだらう？　そのフリドンのところへいけば、なにか王女の消息がわかるかもしれないぜ。私はまずそこへいくことにしよう。」

そういわれてタリエールも思い出した。かれはフリドンの国について知っていることをくわしくアタンジルに話した。

「海岸づたいに東へ東へと進めばいい。フリドンに会ったら、兄弟が兄弟のことを話すように、私のことを話してくれ。」

狐にいつて、山のがけの上でかもしかを射とめた。たき火をして肉をあぶつたが、なかなかのどを通らなかつた。ふたりはめぐまれることすくない世の中をのろいながら、みどりの木の下に横になつた。

別れのとぎがきた！霧のあかつきがおとずれた。かたくだきあつた胸と胸——それは鋼鉄がとけあわされたもののように見えた。こうしてふたりは別れた。タリエールは西へ、アフダンジルは東へむかつた。二騎士の呼びあう声はいつまでも、ふかいすげのやぶの中にひびいていた。

フリドンの友情

太陽よ、強きうちにも強きものよ！

おまえは不幸なものを王冠で飾る、

私に愛する人をかえしておくれ、

きらめく光で夜をもやしておくれ！

土星よ、災厄の星よ！

おまえは悲しみの重荷をつける、
私の心を喪服でつつみ、

原始のやみにつきおとすがいい！

木星よ、真理をまもるものよ！

おまえはかたくなの心をさばく、

地獄の力に負けないで、

幸福の道をひらいておくれ！

火星よ、死のやりをつきさすものよ！

おまえはあかい血をながす、

私の重いくるしみを、

愛する人に話しておくれ！

金星よ、なやみの星よ！

ルビーをちりばめた真珠のように、

おまえのほおえみは美しい、

ただいたずらに迷わさないで、おくれ！

水星よ、信念をまもるものよ！

ここにインクが、なみだの池がある、

ここにペンが、しなうからだがある、

私のなやみを書いておくれ！

月よ、心やさしきものよ！

おまえは太陽に結ばれて、

あかるくもなり、くらくもなる、

似ている私をなくさめておくれ！

みちみちアフタジルは歌っていった。それはうぐいすの歌のようにあまくはなく、ふくろうの

なき声こゑのようにひびいた。悲かなしみにみちた歌うたにひかれて、けものどもはすみ家いへからはい出し、海岸かいぎも岩いわも水みづから頭あたまをもたげて、耳みみをすました。聞くものすべてなみだをながし、アフタンジルの通とほつたあとと露つゆがおりたようにしめつた。

ひと月つき、ふた月つき、海岸かいぎの道みちはつづいた。三月みつぎめになって、波なみと戦たたかっているいくつかの船ふねが見えたので、アフタンジルはそれに声こゑをかけた。

「あなたがたはこの国くにの人ひとですか？ この国くにはなんというのですか？ この国くにの王おうさまはどなたですか？」

「あなたは樂園らくえんにきたんですよ。」と、かれらはこたえた。「あなたは歌うたい手てたちにかんげいされるでしょう。ここはトルコの国くにぞかい、これからフリドンの領地りやうぢになります。フリドンさまは馬うまのりの名人めいじん、どんな合戦かっせんに出でても負まけたことはなく、これほど勇敢ゆうかんな王おうさまは見みたことも聞きいたこともありませぬ。私わたしたちもみんな幸福こうふくにくらしています。」

「まったくいいとこであなたがたに会あつたものです。」と、アフタンジルはいった。「その王おうさまに早くお目めにかかりたいが、都みやこまでの道みちのりはまだだいぶありますか？ また道みちのようすはどんなですか？」

船ふねのりたちはゆつくりとこぎながらこたえた。

「この道をまっすぐにいけば、ムリガザンザリという都へ着きます。そこに王さまがいます。馬の足でしたら、十日ほどの道のりで、べつにわるいところはありません。」

お札をのべて船のりたちと別れ、アフタンジルは道をいそいだ。いき会う人々はみんなこしをかがめておじぎした。かぶりものをとって、しげしげとかれの顔を見あげるものもいた。からだはしゆるの木、腕はがねのような、りっぱな騎士のすがたに、これはただものでないと感じたからであつたらう。離れるのがいやさに道づれとなつて、道案内をつとめる人々もあつた。

ムリガザンザリに近づいた。見ると、馬上の人々がかけまわり、まきあがるほこりは空をくらくしている。狩りの角ぶえの音は野づらっぱいにひびきわたり、かまで草をかるように、矢は獲物をかり取っている。アフタンジルは狩獵士のうちのひとりをつかまえて、

「ここで狩りをしているのは、どなたのごけらい衆ですか？」と聞いた。

「ムリガザンザリのご領主が狩りのお楽しみで、射手たちを草原へおつかわしなされたのです。」

アフタンジルは長いあいだのつかれを忘れた。腕がむずむずしてきた。あいさつする適當なことが見つからないので、無言のまま、人がおおぜい集まっている丘をめがけて馬をとばした。人々はその身のこなしのたくみに見とれて、思わず道をあげた。

空の高いところに一わのわしが舞っていた。アフタンジルは弓をひきしぼって、それにねらいを

つけた。つるが鳴った。すると石のかたまりのように、わしは地面におちてきた。かけよって、つばさをきりとり、くらにむすんで、また馬をとばした。

丘の上にはフリドンのテントがはられていた。戦士四十名が列をただして三方からテントをかこんで立っていた。アブタンジルは狩獵士たちに見まもられながら、丘へ近づいた。

フリドンは狩りが急に終りになったので、まゆをひそめた。

「いいつけにそむいたものはどんな罰をくうか、忘れたのか？」と、かれはどなった。「なぜ中途で狩りをやめて、引返してきたのか？」

フリドンは前へ進み出た。だが遠くアブタンジルのすがたを見ると、いまのこことを忘れて、ふしぎそうに首をかしげた。アブタンジルはけらいにいった。

「どうか王さまにおつたえください——ある外国の旅人が、ぜひ王さまにお目にかかりたい、とねがっていることを。それから、かれはタリエールの兄弟で、そのタリエールのたよりも持つてきた、と申しあげてください。」

けらいは大急ぎで丘をかけのぼり、王さまにそのとおりつたえた。

「なに、タリエールの兄弟だよ？」

フリドンはおどりがるばかりによるこんだ。にわか胸が高鳴って、それをしずめることがで

きなかつた。ほおをばら色にそめながら、かれはお客をむかえに丘をかけくだった。

フリドンは目の前に美しい騎士を見て、まばたきもせず、立ちつくした。

「これは太陽のまぶしい光でもあろうか？　どんなことばでもほめたたえることはできまい！」
と、かれはさげんだ。

ふたりは同胞のようにだきあい、長年の親友のようにキスしあつた。戦士たちは感動してこれにながめた。フリドンのような王さまはこの世にまたとあるまい、と信じていたのに、アフタンジルはもつとりっぱであつた。空にかがやく星も、太陽がのぼれば、その光を失う。ちょうどそんな感じがした。

馬にまたがって、フリドンの王宮へ帰っていった。だから狩りはしぜんにそれで終りになつた。人々はこのお客に目見はり、どうしてこんな奇蹟を神はつくりだすことができたのか、とうわさしあつた。

「私がなにもので、どうして、タリエールと兄弟のやくそくをむすんだか、どこからきて、どこへいくつもりか、いっさいお話をたしまししょう……。」

そうまえおきして、アフタンジルはフリドンにいままでのことをくわしく物語つた。

アラビアの生まれで、父は軍部大臣、ロステワン王のけらいであるが、この王の手もとで訓育さ

れて人となり、総司令官の職にある。国のまもりはかたく、敵には雷のようにおそれられていること。ある日狩りに出て、森のはずれで泣いている見知らぬ騎士を見つけたが、かれは王さまのまねきに應ぜず、はてはむちをふるってけらいたちをたくさん殺傷したこと。王さまはこれを悪魔のしわざと考え、それ以来、すっかりふさいでしまったこと。自分は愛する王女から相談をうけ、ふしぎな騎士をさがしに出て、三年の後、はからずもかれにいためつけられたトルコ系のハタイ人に会い、やっとかれのゆくえをつきとめたこと。

……かれは怪物デフを退治して、その洞窟に住み、いつわり多き世をのろい、人をのろい、さらわれた王女をしたって、ほとんど気ちがい同様になつてゐること。アスマートという王女の召使いの女が、忠実にかれにつかえてゐること。かれはこの洞窟にもめつたに帰らず、人の同情をはねつけ、けものように人をきらつて、はてからはてへと、フリドンからもらつた馬をのりまわしてゐること。こうしてもう十年もたつたこと。

……かれの話聞き、かれと兄弟のちかいをたてたいじよう、かれの悲しみを自分も悲しみ、海をたずね、陸をまわつて、かれのために薬をさがし出そうと決心したこと。いったんアラビアに帰り、王さまを安心させて、また出なおそうとしたところ、お許しがないので、なみだながらにひそかにふるさとをぬけ出したこと。ふたたびタリエールと会い、こんど王女を見つけることができな



かつたら、二度と太陽をあおがない、というかくごで旅立ちしたこと。

「友情のちかいは永遠にあなたをむすびつけている、と考えましたね。それでおたずねしたわけです。」と、アフタンジルは長い物語を終った。

泣き声をおさえることができなかった。フリドンの胸は、アフタンジルの胸とおなじようにいたんだ。七年前にタリエールと別れたときのことが思い出され、いまさらのようにたのみにならない世の中がにくらしくなった。

「タリエールよ、おまえは私をさげすんでいるのだろうが、それでも私はもう一度、おまえに会いたくてたまらないのだ！」と、フリドンはいった。「おまえと別れていて、地上の光榮がなんになろう！ おまえに私が必要でないというなら、私の生涯はやみだ。私の毎日はいかにとぎさるる。」

フリドンは身もだえしてかきくどいた。

やがてかれらば都に着いた。王宮のながめは目を樂しませ、多くの役所の建物は遠くからも堂々として見えた。王宮の前には正装した召使いたちがならんで、南の国の珍客をていちょうにむかえた。

アフタンジルはフリドンとならんで席についた。テーブルにはこの國の名門百名がいながれた。

真珠、ルビー、水晶、その他色美しい寶石が、にじのようにあかるくかがやいていた。酒やシャーベットが、山のようなごちそうがはこばれた。アフタンジルを身内の人のようにもてなした。さかづきは茶わんにかわり、茶わんはさかづきにかわった。お客のほおはばら色にそまって、まわりの人々をうっとりさせた。酒宴は夜があけるまでつづいた。

アフタンジルは浴室に案内された。高価な絹の服と目をおどろかすような帯とがかれを待っていた。

心からのもてなしをうけて、かれはいく日かこの国に足をとめた。荒野に出てフリドンとともに狩りをもよおした。どんな弓の名手もかれにはかなわなかった。飛んでいる鳥を射おとし、走っているけものを射とめた。

ある日、かれはフリドンにいった。

「おまえと別れ、こんないい国を出ていくのは、ほんとにつらい。だがいつまでもここでぐずぐずしていることはできない。まだ道は遠く、どんな危険があるかもしれない。おくれては身の破滅になる。さっそく出発したいが、おまえがネスタン姫を見たという、その海岸まで私を見送ってくれないか？」

「私もおまえを放したくないけれど、なやみがやりとなつて、おまえの胸をさしつらぬくのであれ

ば、むりに引きとめはしない。」と、フリドンはこたえた。「ただ、ぜひおともをつれていってほしい。そのほかにはばと馬、また武器をつけてあげる。それだけおまえが楽になるし、それがあればとちゅうであぶないことがおこつてもきりぬけられるだろうから。」

フリドンは気のきいた召使ひ四人をえらんでアフタンジルの従者とし、よろい、かぶと、たてをそろえ、旅費として金貨六十箱、みごとなくらをおいた乗馬一頭をおくつた。夜當に必要なものはいっさいらばにつんだ。

一行は、はじめてフリドンがネスタンを見た、あの波があわだつてゐる海岸へとむかつた。フリドンはとらわれの王女のことを思い出して、またなみだにむせんた。

「色のまつ黒な船のりたちが、ここへ王女をつれてきたんだよ。くすんだ服につつまれていたが、それでも王女の顔はまぶしいほど美しかった。私は力づくでもかの女をうばい取ろうと決心した。ところがあやしい船はかの女をのせて、まるで鳥みたいに逃げてしまったんだ。」

ふたりはちかひによつて結ばれた兄弟のように、だきあつて別れをおしんだ。やがてアフタンジルのすがたは、見送りの人々をふりかえりふりかえり、遠ざかつていった。

四、格蘭シヤロの花

キヤラバンと海賊

アフタンジルは四人の從者をつれて、海沿いの国々をめぐっていった。夜もろくにねないで、友のための薬をさがした。のぞみがないのがっかりして、泣きあかしたことも、一度や二度ではなかつた。世の中のものがないにもかかわらずみたいにねうちのないものに思われた。そんなときには、チナチンとの再会のよろこびを空想して、わずかに自分をなぐさめた。

いき会う人々にとらわれの王女のことをたずねたずねて、いつしか百日あまりが過ぎた。ある日、丘の上に出た。見おろすと、海岸近くに、荷物をつけたらくだのむれ、商人たちが右往左往して、なにやら心配そうにざわめいている。アフタンジルは丘をおりて、かれらに近づき、ていねいにあいさつして、

「なにがおこったんです？」と聞いた。

りっぱな男があらわれて、まず胸に、つぎに口に、それから巻きずきんに手をやった。これがあ
いさつのしるしであった。

「お見うけすれば、いかにも強そうなおかた。これこそ私どもがのぞんでいた人かもしれません。
聞いてくださるのでしたら、いくらでもお話いたします。」

「どこからきて、どこへ船を出すつもりですか？」

「私どもはバグダードの商人で、私はキャラバンの隊長ウサムと申します。」と、その男は話しは
じめた。「マホメットのおしえをまもって、私どもは一滴のお酒も飲みません。ただねうちの
品物をおろして歩いて、商売にはげんでいます。ところで、さきほど私どもはこの海岸で息もたえ
だえになって、うちあげられている旅人を見つけたのです。手あてをして、やっと正気づかせてか
ら、

「旅の人とみえるが、なんでこんな災難におあいなきれたのかな？」と聞きますと、こうこたえま
した――。

「どうして私だけ生き残ったのか、ふぎしでありませんよ！ はじめはエジプトを出て、さびしい
道をとおり、それからたくさんの荷物を船につみ移して、海路を進みました。するといきなり海賊

船に見つかり、あつというまもなく、そのへさきで私どもの船の横腹を突きやぶられたのです。のつていた人はぜんぶおぼれました。……どうして私がここまでただよつてきたのか、さらにおぼえはありません！」

この話を聞いて、私どもはこまりました。ここから船出すれば、海賊にやられる。いつまでも待つていれば、商売にならない。あとへ引返せば、まる損となり、破産するかもしれない——それでいま、みんなおおさわぎしていたところなのです。

「それはお気のどくに！」と、アフタンジルはいつて、ちよつと考えてからいたした。「おさしつかえなければ、私がいっしょにのりこんであげましょう。そうすれば、だれにも指一本さわらせやしませんよ！ 私の剣はなまくらではない。あなたがたをりっぱにまもつてみせます。」

ウサムをはじめ、商人たちはおどりがつてよろこんだ。

「やはり思つたとおり、この人は救いの神さまだつた！ さあ、海賊ども、出るなら出てみる！ こつちには守り本尊がついてるんだぞ！」

かれらは帆をあげて、グランシヤロ国めざして船出した。順風をうけて、船足ははやかつた。

ふとアフタンジルは、うすれゆく霧をすかして、一その船が近づいてくるのを目にした。マス
トの旗を長々と風にふきなびかせ、へさきをこちらの船の横腹にむけている。鉄のすきのようにす

るどくとがらせた衝角が見えた。

「戦闘用意！」

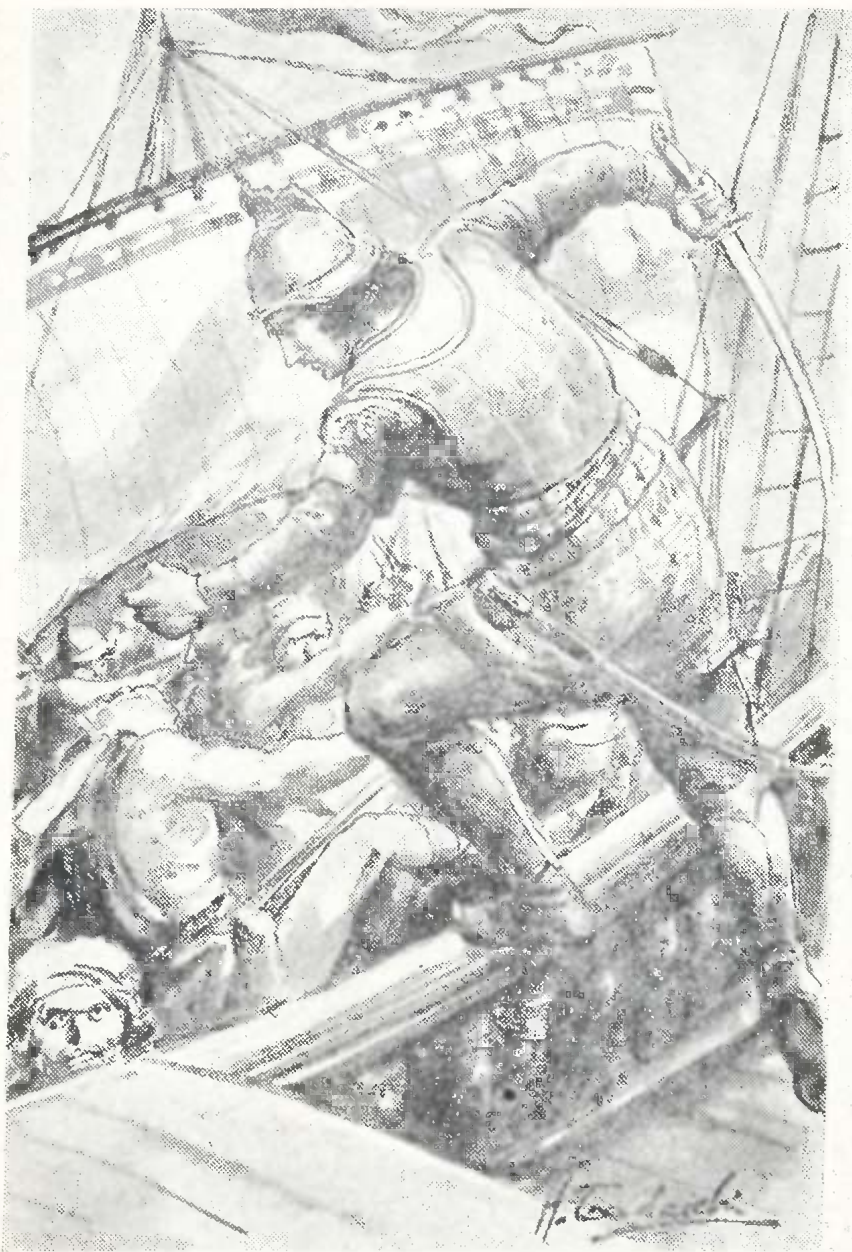
海賊どもの号令の聲が聞え、つづいてらっぱの音が鳴りわたった。

商人たちはちぢみあがつてうろたえ、むちゆうになつて天にいのりをあげだした。

「さわぐんじゃない。安心して私にまかせておきなさい！」と、アフタンジルはしずかにさどした。「私だつてやつらを退治するか、自分がほろびるか、どっちか一つじゃないか！ 運がよければ、百人の敵もおそろしくはない。運が悪ければ——なにをしたつてむだになる。兄弟をも、友だちをも、またけんごな要塞をも、救うことはできない。わかつたかね？ わかつたら、たつたひとりぼっちになつても、なお気を強くもつことだ！ しかし、あなたがたは商人で、戦いにはなれない。こわいのもつともだから、矢にあたらないよう、船底にかくれていなさい。敵はぜんぶ私がひきうける。私の手には、ライオンの力がある！ 海賊の船をようしやなく血で洗つてやるから！」

とらのすばやさでアフタンジルはよろい、かぶとに身をかため、剣をぬきはなつて、鋼鉄の指でにぎりしめた。力と決意にみちみちていた。成功をかたく信じて、反撃の用意をととのえた。

海賊どもはときの声をあげておどしながら、まっしぐらに近づいてきて、その衝角でいつきに商



人の船を突きやぶろうとした。それよりはやく、アフタンジルはライオンのようにおどりあがって、剣をふりおろした。衝角はもろくもたちきられた。

海賊どもはおどろいて、たちまち逃げごしになった。船のむきをかえて、陸の方へ走り出した。アフタンジルは追いついて、海賊船にとび移った。かれの腕は敵にたちなおるすきをあたえず、かたっぱしから罰をくだした。海賊どもはますますあわてて、ものにおどろいた家畜のむれのようにうき足たつた。マストにたたきつけられるものもあれば、海にたたきこまれるものもあつた。死体のかけにかくれているものども、助けを天にいのっているものどもも、引きずり出されて、いたいにあつた。アフタンジルは海賊どもに致命的な打撃をあたえた。

「おゆるしください！ 私どもはあなたさまを愛します！」

生き残つた海賊どもは涙をながしておがんだ。ひれふすがたを見ると、アフタンジルはもう罰する気持がなくなつた。いまさら、「愛します。」とはみよらないぐさに聞えるけれど、むかしの人はうまいことをいった——愛のみなもとは恐怖である、と。

人間よ、成功に酔つてはいけない！ 戦いに勝つたといつて、いばつてはいけない！ 天が助けなければ、どんな勇氣も役にはたさない。千年のまつの大木でさえ、ちっほけな火の粉から燃えてほろびるではないか。天がのぞみさえすれば、ほそいあしだつて、剣のようなはたらきをする。

アフタンジルはぎつしりつまっている海賊船の船倉をひらき、荷物をみんなはこび出すように命じた。商人たちはよろこんだ。いままで不景気な顔をしていたウサムは、急におせじたらたら、騎士をほめあげた。だが、よほどの学者でなければ、戦士をたたえる資格はない。どんな歌い手でも、かれの勇敢なてがらを歌いあげることとはできないだろう。だから、助けられた連中には、こんなおごなりのほめことはしか口に出なかつた。

「えらいだんなさま！ 太陽の光の矢がまたかがやいて、やみを追いはらつたのです！」
まるで召使いのように、足に、手に、肩に、髪にキスした。そのありさまを見たら、賢者でも気がおかしくなるだろう。

「英雄の手が私たちを滅亡からすくってくださつたのだ！」

そんな声がやたらにひびいていた。

「神は私たちの運命と仕事を天の力にまかせたのです。あからさまのものもあるし、ふかい意味を秘密にかくしたのもある。神からは善の光も出れば、悪のやみも出る、とはこのことをいつたのでしょう。」と、アフタンジルはいった。「あなたがたをまもつたのは、この天の力にすぎません。いくらほめられても、私はみじめな肉体でしかない。だが、とにかくやくそくをはたして、敵をかたづけました。おかげでこの宝船は、まるで天のさずかりもののように、私の手にはいつたわけ

す！」

海賊船からの荷物のつみかえは夕がたまでかかった。とても数えることができないほどのおびただしい戦利品であった。すっかりはこび出したあとで、海賊船に火を放った。

ウサムは仲間の考えをアフタンジルにつたえた。

「あなたは私どもを死から助けてくださいました。ですから、この船の荷物は当然あなたのものです。いいえ、ごえんりよにはおよびません！ ただ、そのおころざしがあるなら、そのうちのいくぶんでも私どもに分けてくださいれば、私どもはまんぞくでございます。」

「そんなに私に感謝する必要はありません。」と、アフタンジルはこたえた。「私はつまり人間です。あなたがたをまもつたのは私ではなくて、神なのです。それに私は財宝などすこしも欲しくはない！ 馬が一頭あればたくさんです。金持になりたければ、わが家にいても、いくらでも金持になれるでしょう。この短い人生に、富がなんになりますか？ しかも、ほんの道づれとして、もうじきあなたがたとも別れて、生きるか死ぬかのむずかしい仕事に進まなければならぬのですから。気にいったら、いくらでもすきに戦利品をおとりなさい。そのかわり、一つおねがいがあります。これはあなたがたを信じていうことです。ぜったいに他人にもらしてはいけません。いいですね？ 私をキャラバンに入れてください。そして私が戦士であることをないしよにして、

かりに私を隊長のように見せかけ、人が聞いたら、

「はい、これは隊長の荷物です」と返事していただきたい。私は商人の身なりに着かえて、市場へ出かけます。くれぐれも秘密をまもることを忘れないように！」

「あなたはいのちの恩人です！」すっかりうれしくなった商人たちは口をそろえていった。「おたのみの件はよくわかりました。かならずおいいつけのとおりにいたします。私どもはあなたのどれいです。そのほかなんなりとお命じくください！」

順風を帆にうけて、船はのぞみの港をさしてしずかに進んでいった。

ファチマのもてなし

船は港にはいった。それはみどりにつつまれた美しい都であった。どの庭園も花でいろどられ、あまいにおいが人を酔わせるようにただよっていた。

船着場につくと、アフタンジルは大商人のすがたとなつてあらわれ、お金をばらまいた。荷あげの人々はお金の音を聞いてわつと集まり、この外国人の商人のご用をうけたまわろうと首をのばした。

このさわぎにひとりの庭師がふりかえった。かれは商人のようすがりっぱなのに見えはり、もつとよく見ようと、庭から船着場へかけつけた。

アフタンジルは聞いた。

「あなたがたはどういう人ですか？ どういう種族ですか？ だれがこの国をおさめているのですか？ この国ではなにがとうとばれていますか？ 品物はたくさんありますか？ どういう品物が買えますか？ そういうことをくわしく知りたいのです。」

庭師が進み出て、こたえた。

「ただいま申しあげますから、お知りになりたいことは、この話からおくみとりください。ここは沿海国プリモーリエという大国で、一年かかっても通りぬけることはできないでしょう。首都はグランシヤロ、古くからある美しい都です。どこをまわる船でも、この港に立ちよらないことはありません。王さまは力と富とで有名なスルハフ・メリクというかたです。

——この土地へきたら、たいていの老人は若返ります。ごちそうはいうにおよばず、どこでも思いのままに愉快にすごせるのですからね。庭園には、ばらをはじめとして、一年じゅう花のたえたことがあります。友にはよろこばれ、敵にはそねまれるという国です。商人はなかなかずるいやりかたを発明しました。どこの国とも売ったり買ったりの仲介で、損もするけれど、もうけも大

きい。一文なしが一週間で金持になることもありす。貧乏人は市場の品物を一年ばらいで手に入れることができます。

——私はこのいちばんの大商人のやしきで庭師として働いています。うちにはむかしから佐わのおもしろいしきたりがありましてね。旅人がやってくるとうちのあるじがまず第一にその貴重品を見ます。外国の商人たちは、まだ商談をはじめないうちに、かならずあるおくりものをします。それからあるじは宝石や、ビロードや、絹を買います。そのあとでないと市場へ荷物を出すことができないのです。あなたのようなはじめでのおかたは、まずホテルにおいでになる、するとホテルからうちの客間に案内されるという順序です。どこのホテルにもそういう命令が出ているのです。

——あいにくたたいまは旅行中で、あるじはるすです。ここにいたら、たいせつなお客さまとして、ずいぶんあなたをかんげいしたことでしよう。しかしおくさまのファチマがいます。おくさまも、だんなのウセインとおなじように、お客さまをそんけいするかたです。お近づきになったら、きつと身内の人のようにおもてなしするにちがいありません。もしそのおつもりなら、さつそくおともをしたてておむかいにあげります。」

「ありがとう！ すぐにもおやしきへうかがいしましょう！」と、アフタンジルはこたえた。

庭師は汗をふき、ファチマのところへとび帰り、かの女をよろこばせた。

「いいおしらせを持ってきました。まるで太陽のようにまぶしいばかりの美しい人が着いたので、どこか遠い国の商人で、キャラバンの隊長です。じゅすの上着に、むらさきの巻きずきんをしていましたね。私に品物のことや国の習慣のことを聞きますので、くわしくお話しました。」

女あるじは船へむかえのものをちをおくった。うわさは八方へひろがった。市民たちは店も役所もほうりだして、広場へ集まった。かれらはこんなに美しい人をまだ見たことがなかった。ねたましい気持で見おくった。容はウセインのやしきへ着いた。

ファチマはアフタンジルを門口にむかえた。容を見たたん、かの女は急にのぼせたような気分になり、胸がどきどき鳴った。たがいにあいさつをかわして、すずしい庭にはいった。女あるじはばらのようなほおをそめ、とろりとした微笑をかくすことができなかつた。そんなに若くはなかつたけれど、まだ胸もまるく、顔もまるく、ぶどう酒のように水々しいからだには、耳輪、首かざり、腕かざりが無数にかがやいていた。

アフタンジルはかの女におくりものをわたした。そのおくりものがまたやしきの人々をおどろかせた。かの女のさしずで宴会がひらかれた。たくさんのお客が集まって、飲んだり食べたりした。宴会がすむと、アフタンジルはいとまをつけて船へ帰った。

あくる朝、かれは商売の話をする商人として、ふたたびファチマのもとをおとすれた。値段のお

りあいがついた貴重品や織物をかの女に売り、

「ありがとうございます。おかげでいいもうけをさせていただきました。」と、おせじをいった。船にもどると、商人たちに行った。

「さあ、こんどはあなたがたがいくらでも商売しなさい。ただし、私の秘密はぜったいにもらしてはいけませんよ！」

アフタンジルはどこまでも商人のいで、たびたびファチマをたずね、ファチマもまたかれのところへきて、空に星が光りだすころまで話しこんだ。いろいろな話が、あとからあとからとつきなかつた。ファチマはそれが心から楽しかつた。

やしきに帰つてねると、アフタンジルのゆめを見た。

——あたし、いつたいどうしたんだろう？ ——と自分ながらふしぎだつた。なみだが雨のように降つた。——この気持をうちあげようかしら？ ——でもおこられたら、もうそれきり会えなくなる！ かくしていたら？ 胸がはりさけそう、とてもがまんできない。そう、いっそ手紙に書こう！ ほかにもう、しようがない。傷を見せなければ、お医者さまでも薬のつけようがないのだから。

ファチマは手紙を書いた。

「あなたは花の中でお生まれになったかたです。あたしは自分かどうしてこのような気持になつた

のか、自分でもわからないのです。あなたのやさしい光に照らされていないと、いまもしぼんでいきそうです。夜の星々でさえあなたには心をひかれるでしょう。神はこれを知って、あわれんでくださるにちがいません。あなたもきつとあわれんでくださるでしょう。さもないと、あたしは気がいになるばかりです。この手紙にご返事があるまでは、あたしの魂の呼び声におこたえがあるまでは、黒雲に光をのぞむように、のぞみをすてないでいます。生きるか、死ぬか？ 一刻もはやくおしえてください！

アフタンジルはファチマの手紙を兄弟のたよりのようにしづかに読んだ。そして考えた。

——なるほど、これはすこし気が狂っているようだ。まさかファチマが自分をアラビアの女王と同列に考えているわけでもあるまいが、ずいぶんむてっぽうなことをたくらんだものだ。ばかばかしい！

いったんはおこって、手紙をすてたものの、しばらくたって、また考えなおした。

——ここは外国だ。だれが私を援助してくれるだろう？ かどわかされた姫君のゆくえをたずねるためには、どんなことでもしなければならぬ。いやも、おうも、いつてはいられない！ 見たところ、ファチマはこの国にきた人、通っていく人を、みんな自分にひきつけ、気にいった旅人には、どんなサービスをもおしまないらしい。だからことによると、姫君のことも知ってるかもしれない。

ない。これは私にとつていちばんたいせつな点だ。だいたい女というものは、ちよつとした気まぐれでだれかがすきになると、すぐむちゆうになつて、どんな秘密でもうちあけてしまうものだ。よし、たしかな見当をつけるために、その気まぐれにこたえてやろう。おたがいにゆるしあわなければ、なにこともできやしない。あるものは冷えてしまふし、のぞみのものは見つからない！ どうせ世の中なんて、うす暗いかげにくるまれた夕がたみたいに、たよりないものだ。ひしゃくからは、その中にあるものしか流れ出はしない！

アフタンジルは返事を書いた。

「あなたは私のさきを越しました。じつは私もほのおにつつまれていたのです！ すこしでも会わずにいてつらいのはおなじことです。心と心が一つ調子でひびきあつたら、どんなにか楽しいことでしょう！」

この返事はファチマをとてもよろこばせた。かの女はまた手紙を書いた。

「あたしはやつと生きかえりました。はやくお目にかかりたく、日が暮れしだい、すぐおいでください！」

入江やしきの殺人

アフタンジルは女あるじのやしきへむかった。すると、かの女の召使いが息せききつてかけてきて、呼びとめた。

「ファチマのおねがいで、お目にかかる時間をすこしのばしていただきたい、とのことです！」
アフタンジルはおこつて、しかりつけた。

「なにをばかなこというか！」

そのまま足をはこんで、もうようすがわかっているやしきの中を、さつさとファチマのへやへすすんだ。へやの中はうす暗かった。女あるじはあおい顔色をして、おどおどした目でアフタンジルをむかえたが、かれにすぐ帰つてくれ、とはどうしてもいい出しかねた。

アフタンジルはまだ口をきかないうちにファチマをだいた。このとき、いきなりドアがあいて、いまを盛りの若い男がはいってきた。すぐそれにつづいて強そうなひとりの従者があらわれた。若い男は岩につきあたたつたように、客の前でたじたとしぎつた。ファチマは男を見て、ふるえあがった。

「見つけたぞ！ いまなにをしていたんだ？」と、男は低い声でどなった。「このいたずら女め！ たんと楽しむがいい。そのかわり、夜があけたら、うんと後悔しなければならぬぞ！ けがらわしい！ はじ知らず！ あしたはおまえの不貞が百倍になっておまえにむくわれるだろう。おれはおまえの子どもたちをおまえにかみつかせてやるんだ。ざまあみろ！」

怒りにひげをかきむしりながら、若い男は消えた。フアチマはほおをつめでひつかき、気が狂ったように身もだえして、泣きさげんだ。

「みんなは石であたしを打つでしょう！ だんなも子どもたちもあたしをかわいそうとは思わないでしょう！ やしきも財産もあたしにはもう灰とおなじです。あたしは地獄の責苦にあたいする女です。あたしのおかげでだんなの名は永遠にけがされたのです！」

アフタンジルはこのさわぎにあつげにとられた。

「なんだってそんなに泣きわめくのです？ はずかしめられたからですか？ なぜあの男があんなにおどしたんです？ それともあなたにそれだけのわけがあるのですか？ いったいどうしてかれがいきなりこの家にふみこんできたのか、泣かないで、話してごらんさい。」

「もうおしまいだわ！ そのわけは、とてもお話できません。またお話してもおわかりにはなりません！ このはずかしいおこないで、あたしは自分の子どもたちをほろぼしました。またあなた

の愛は、するどい剣のように、あたしの心をさしつらぬきました。いくら神のお慈悲をねがっても、もうおそい！ 自分の血を飲んだものには、お医者も助ける力はない！ ふとしたことで、あなたに愛を感じたのがいけなかつたのです。あしたになれば、あたしの名譽をはずかした男と対決しなければなりません。おねがいです。あたしと子どもたちを救ってください。あの乱暴者をかたづけてください。そのあとなら、どうしてこんなにとりみだしたのか、そのわけを聞いてもいただけるでしょう。でなければ、すぐに荷物をまとめて、このグランシャロをひきあげ、海路をお帰りにください。このままでは、あなたにもたいへんごめいわくかけることになります。なによりもあの悪者が、うちのだんなとあたしの子どもたちにはじをかかせることを思うと、ほんとにぞつとしますわ！」

アフタンジルはフアチマがかわいそうになつた。目を光らせて立ちあがり、手ごろの棒をつかんだ。

「そんなに悪いやつなら、おのぞみどおり、罰してやりましょう。ご安心なさい。生かしてはおかないから！ すぐ召使いを呼んで、用心してやつの家まで私を案内するよう、いいつけてください。なに、私ひとりでじゆうぶんです。たぶん、今夜じゆうにかたをつけます。それまで、さわがないで、しずかに待っていてください。」

「復讐がらまきいったら、あたしはふたたび自由に息をつくことができず。ただ一つ、あたしの指輪がかれの手にあるのが心配です。どうかそれもとりかえしてきてください！」

この家の召使ひひとりをつれて、アフタンジルはそとへ出た。町はあらかたねしずまっていた。通りぬけて、入江の方にむかうと、海ぎわにエメラルド色の美しいやしが見えた。テラスの上にはテラスをかさね、設計でも装飾でも、おどろくほどこつたものであった。アフタンジルは召使ひにあいずして、へいのかげに身をひそめた。

「どなたにご用があるのですか？」と、召使ひはささやいた。「あるじでしたら、ほら、あすこにらんかんが黒くつき出てるでしょう。あすこにねてるか、ひまをもてあましてるか、どっちかですよ。」

門のわきには門番がふたり、いねむりしていた。アフタンジルは音をたてずにしのびより、いっぺんにふたりの首をつかんで、目よりも高くさしあげると、ふたりの頭と頭をかちあわせた。頭はたちまち粉になった。

ドアをあけて、家の中にはいり、見当をつけていたへやへ急いだ。かえり血をあびたので、気が荒くなり、力がもろあがつていた。乱暴者はベッドにねていた。アフタンジルはかれをたたきおとすと同時に、床になげつけ、剣をぬいて胸をつきさした。友のためには太陽のようであつたが、戦

いにはとらのように荒々しかった。フアチマの指輪がはまつている指をきりおとすと、つめたい死体をテラスから海へほうり投げた。こんな不名誉ななきがらの上に墓をきずくのはもったいないと思つた。

夜のとばりのしずけさの中で復讐はおこなわれた。ばらは死のとげを犠牲者につきさした。アフタンジルはぶれいな若者のかたをつけて、すぐそのやしきを去つた。足はかるく地面をふんでいった。フアチマのへやにもどると、かれはいつた。

「あの無礼者は私の手で罰をうけました。私を案内した召使いは、神かけて他言はしないことをちかいました。これがあなたの指輪です。さてこんどはあなたから、あの無礼者がなんでそんなに危険だったのか、そのわけをはじめからくわしく聞く順番になりました。」

フアチマはかれのひぎをだいて、しずかにこたえた。

「あの人のいのちをたちきつてくださつたおかげで、あたしは苦しみからのがれることができました。あたしばかりか、だんなも子どもたちも、きょうから生まれかわつたようになるのです。復讐の名で、今夜かれの血が流された！ もうお礼のことはもごぎいませぬ。ではこれから、くわしくいっさいのお話をいたします。どうか同情をもつて聞いてください……。」

ネスタンが商人の妻に救われたてんまつ

この国には、つぎのような習慣がある——新しい年がはじまるその日には、だれも旅だちしない、商人も取引をしない。人々はおめかしをして、新しい服を着る。主人はめいめいのやかたにけらいたちを招待する。商人はお年玉を持って、じかに王さまのお城へあがる。すると王さまは商人のよろこびそうな品物でお返しをする。十日のあいだ、ハーブの音はなりやまず、うれしそうな底ぬけさわぎがつづく。競技場ではボール遊びや競馬がもよおされる。

グランシャロの大商人ウセインは商人たちの頭目として王さまのもとへあがり、その妻ファチマは商人のおかみさんたちを集めて後宮へあがる。これは長年まもられてきたウセイン夫妻の義務である。ファチマにひきいられた女たちは、金持のおかみさんも、びんぼう人のおかみさんも、それぞれに応じたお年玉を王妃にさしあげ、後宮でおまつりのような一日を楽しくおくつて家に帰る。さて、ある年の元日のこと、ファチマは首都の商人のおかみさんたちをぜんぶ集めて王妃のもとへお祝いにあがった。ごちそうもようやく終つて、楽しい一日も暮れようとするころ、一同は王妃にいとまをつけ、ふたたびファチマの前に集まつた。

フアチマは名のある商人のおかみさんたちをまねいて、海岸の庭園におりていった。そこには樂士や歌い手がおおぜい待つていて、たくみな歌と演奏で客たちをうっとりさせた。フアチマは衣裳をかえたり、髪のかたちをかえたりして、はしゃいだ。木々のあいだでは、あちこちにかつてなおしゃべりがはずんでいたが、遠くは空と水とが紺青の色にとけあつて、ひっそりとしずまっていた。すずしい、さわやかなゆうべであつた。

ところがどうしたわけか、フアチマはにわか気分がわるくなつた。口をきくのもおつくうで、むつとりしてしまつたので、仲間はそつとかの女から離れていった。気がついてみると、庭にはかの女ひとりしか残つていなかった。なんだかみょうにうら悲しかった。

見るともなしに、海の遠くをながめているうちに、結ばれていた心がほどけて、しだいに気分がなおつてきた。するとこのとき、紺青のひろがりの中に、なにか一点のひらめくものが目にうつつた。見わけることはできなかった——鳥か、それとも海のけものか？

だがそれはすさまじいはやさでみるみる近づいてきた。フアチマは一そうの小船が岸に着いたのを見た。船人たちの顔は炭のようで、からだは夜のやみよりもなお黒かつた。かれらの中に捕虜の娘のすがたがくつきりとうかびあがつた。あまりの美しさに、フアチマはその顔から目をはなすことができなかった。やがて庭のかけになつてゐる陸地に、船人がふたりあがつて、人がいないこと

をたしかめるかのように、きよろきよろ見まわした。しんとした岸べには、かれらをおどろかさずよ
うなもの、なんにもなかった。ファチマは息をこらして、じつとようすをうかがった。

黒人たちはかごをすばやく岸に移した。かごから娘がおりてきた。その瞬間、金色の光で岩が照
らし出されたように思われた。ふつくらしたほおは燃えるようにかがやいていた。みどりの服を着
て、すらりと立つたすがたといい、ま眉をあざむくばかりの顔だちといい、この世にこれにまさる
美しい人を見つけることができるだろうか？

ファチマはものかげに召使いを四人呼びよせた。

「あの美しい人は、おそらく、インドからきたのにちがいない。」と、ファチマはいった。「おまえ
たちは黒人たちのそばへそつとしのびよつて、娘のことを聞きただし、ぜひとも買い取るように話
をつけておいで。お金はいくら高くてもかまわない。山ほど金貨をつんだつて、とてもあの娘のね
うちにはおよばないのだからね！ もしどうしても売らないといつたら、力づくでもうばつてお
いで。娘の顔をしげしげと見ないことには、あたしの虫はおさまらないよ！」

召使いたちはひそかに岸べにおりていき、捕虜の娘を売つてくれるようにたのんだ。しかし黒人
たちは、頭からこの話をうけつけなかった。もたもたするばかりで、とうてい話はまとまらないと
みてとつたので、ファチマはかんしゃくをおこしてさげんだ。

「殺しておしまい！」

召使^{めいし}たちは命令^{めいれい}をはたした。首^{くび}のない死体^{したん}はぜんぶ海^{うみ}へ投げこまれた。捕虜^{ほりよ}の娘^{むすめ}はファチマの前^{まへ}につれ出^だされた。ファチマはうっとり見^みとれた。どんなすぐれた画家^がだつて、この娘^{むすめ}の顔^{かほ}やすがたをさながらに描^かく筆^びをもたないだろう！ この娘^{むすめ}のためなら、自分^{じぶん}のいのちをささげてもおしくはない、とまで感動^{かんどう}した。

わが娘^{むすめ}のようにやさしくいたわつて、ファチマはかの女^{むすめ}を自分^{じぶん}のやさきの寢室^{しんしつ}に案内^{あんない}した。人目^{ひとめ}につかないように、との心^{こころ}くばりからであつた。ファチマは聞^きいた。

「あなたはどなた？　どこの国^{くに}のおじょうさん？　やんごとなきおかたのように見^みうけられますが、どうして、こんなめにおあいなされたのでしょうか？」

だがかの女^{むすめ}はなみだでほおをぬらすばかりで、かたく秘密^{ひみつ}をまもり、なんにもこたえなかつた。ファチマはいくぶんでもその悲^{かな}しみをやわらげてあげようとほねおつた。そのかいはなかつたけれど、かの女^{むすめ}は運命^{うんめい}をなげいてはいなかつた。ただ泣^なくばかりであつた。ファチマはかの女^{むすめ}がかわいそうで、胸^{むね}がいたみ、夜^よもろくにねむれなかつた。

それでも、ある日^ひ、かの女^{むすめ}はいつた。

「ごしんせつなおばさま！　あたしの不幸^{ふこう}の物語^{ものがたり}は、うそつきの作者^{さくしや}でも考^かえ出^だせないほど、きび

しいものですわ！ 天はあたしを見知らぬ土地をさまようように運命づけたのです。そのいきさつをお知りになったら、あなたもきつと神にもんくをつけたくおなりでしょう。」

そういわれてみると、なおいつそうそのいきさつを知らないではすまされない気持になつた。ファチマはいいおりをみて、秘密のヴェールを引きのけてみようと決心した。

娘を人の目からかくすためには、ずいぶん心をくだいた。まどには厚いカーテンをおろした。それでもまちがいがあつてはいけないので、ごく忠実なアラビア人のボーイをひとりつけた。こうしてときどき見まっているうちに、ファチマはますます娘にひきつけられ、いまではもうかの女がいないと自分の生活がまるぎりつまらないもののように思われてきた。

「お顔色のわるいこと、そしてそのなみだ——どうしたわけなのでしょうね？」

どうせ答はないと知りながらも、そう聞かずにはいられなかつた。娘の衣裳がまたファチマをおどろかせていた。めずらしいものは、いくらでも見なれていたはずなのに、このようなふしぎな織物はまったくなぞであつた。絹よりもかるく、しかも鋼鉄の板よりもじょうぶであつた。

ファチマは娘をずつと離れた一室にかくして、だんなにもないしよにしていた。だんながおしゃべりたということを知つていたからであつた。うっかり王さまにでもしゃべられたら、このうえまたどんなさいなんがふりかかるかもしれなかつた。

——あの娘の不幸のわけを知って、助けてやれるものなら、なんとでもして助けてやりたい——とファチマは考えた。——それにしても、うちのだんなにたよらないで、だれにたよることができよう？　しかたがない、ともかくだんなにうちあけて、助けるでだてを見つけることにしよう。けつして人には話さないというちかいをたてさせればいい。あの人だつて、地獄で苦しむのがいやなら、ちかいを破りはしないだろうから。

そこである日、なにげなく、だんなにいった。

「ちよつとお話があるんですけどね。ただ首にかけて秘密をまもることをちかつてくださらないと、申しあげられせんわ。」

「ちかいを破れば地獄におちるさ！」と、ウセインはこたえた。「ちかいます——悪魔にも、子どもにも、老人にも、兄弟にも、敵にも、けつして秘密はもらしません——」

ファチマはだんなに知っていることをのこらず話し、

「ではその娘をあなたに見せてあげます。」と、道をひらいた。

ひと目見て、ウセインは電気にうたれたようにふるえあがった。こんな美しい人を夢にも見たことはなかった。まぶしくて、思わず目をふせた。

「これは奇蹟だ！　どこの国のお姫さまだろうか？　もしほんとうに人間の娘だとしたら、私はこの

場で死んだっていいよ！」

「ほんとうに人間の娘かどうか、もしそうだとしたら、なんでそんなに悲しんでいるのか、なぜちっともうちとけないで、なんにもあたしたちに話さないのか、それを聞いてみようじゃありませんか？」

ふたりはひそひそ相談した。ファチマはだんながかたくちかったことに安心して、娘にむかっていった。

「あなたはどうしてそんなにあたしたちをやきもきさせるのでしょうか？ なおすお薬があることをごぞんじなら、うちあけてくださってもいいと思わね。ごらんさい、ルビーのようなほおが、サフランのようにだんだん黄ばんでいくではありませんか。」

娘はだまってファチマをにらんだ。やさしくちびるのはらの中で、へびのようにちらりと白い歯がのぞいた。胸の上にたれさがった黒髪のかげが、日の光をさえぎるりゆうのように、ほおをかげさせた。なんでそんなにふきげんになったのか、ファチマがわけもわからずおどおどしているうちに、めすのとのらのように怒りにきらきらしていた目から、にわかになまたなみだがあふれおちた。「あちらへいってください、おねがいです。」と、しずかに娘はいった。

ウセインもファチマもいっしょになつて泣いた。もうかぎねて聞きただすことはできなかつた。

娘をなくさめ、サービスにつとめたけれど、かの女はごちそうのさらには目もくれず、くだものに手もふれなかつた。

「あの人をいらいらさせることはもうやめたほうがいいよ！」自分たちのへやへもどつてから、ウセインはいつた。「どうもあれは人間の子ではないね。だつて、別れたあと、しきりに胸がいたむじゃないか。天があの人のかわりに子どもたちをめしあげるといつても、もんくはいえないよ。な気がするよ！」

まったく、かの女のそばにいれば楽しいのに、そばを離れるとも悲しくなつた。商談などでつかれたあとは、すぐかの女のへやをおとずれた。まるでわなにかかつたように、ふたりはこの素性の知れない娘にむちゆうになつた。

ウセインのうらぎりとネスタンの逃走

夜は日にかわり、日は夜に移りながら、時はながれていつた。

ある日、だんはないつた。

「おくりものをさしあげなければならぬので、ちょっと王さまのところへいつてくるよ。」

「さぞおよろこびなさるでしょうね。」と、ファチマはこたえ、だんなを手つだつて、いれものに真珠や宝石をいっぱいつめた。「でも気をつけなければいけませんよ。なぞの奇蹟のことを、ひと口でももらしたら、たいへんですからね。」

「だいじょうぶだ。この首をきられたつてしゃべりなどするもんか！」

ウセインはしたくをととのえて王宮へあがった。王さまはかれを親友のようにむかえ、みごとなおくりものをうけとつて、自分のとなりへまねいた。ウセインは王さまといっしょにさかずきをほした。するとまた新しい酒がめがテーブルにはこぼれた。ウセインはいい気持によつてきた。舌がむずむずしてきた。ちかいを忘れ、メツカとコーランの神聖をわすれた。そこへまた王さまがかれをうちようてんにするようなことばをはいた。

「おまえのおくりものはまったくすばらしい。いくら見てもあきないよ。いったいこんな大きい真珠やルビーをどこで手に入れたのかね？ 私にはどうしてこれに相当するお礼はできないよ！」

「王さま！ あなたは黄金の光で地上のものすべてをやしなつておられます。」と、ウセインは調子にのつてしゃべりだした。「私の財産もあなたのおかげです。私が生まれたことだつて、やはり王さまのおめぐみによるところ、このご恩をなんでおかえしできるでしょうか？ 宝石などはどこにもありません。ただ王さまでなければお持ちになれないような、とうといおくりものがあつたら、どん



なにしあわせかされません。じつはてまえにそういうおくりものの心あたりがごぎいます。ひと目ごらんになれば、美しい天上の花よめにびっくりなされて、それこそてまえに感謝されるにちがひございません。」

このふしぎな話に王さまは胸をときめかせて、すぐその花よめをつれてくるようにといいつけた。侍従長がやりもち五十人をつれて、ウセインのやしきへむかった。

「ただちに美しい娘をうけとり、保護するため王宮へつれきたるべし！」

この命令書を見て、ファチマはきもをつぶした。

「なんですか、この娘というのは？ なにかのおまぢがいではありませんか？」

「いや、おまえのところにいる地上の太陽のような人のことだ！」

王さまの復讐は神の怒りよりもおそろしかった。ファチマはこしをぬかした。はうようにして娘のもとにかけつけ、涙をぼろぼろこぼしながら、ささやいた。

「おじょうさま、もう運命もこれまでです。神はあたしにおめぐみをたまわらず、またむごいめにあわせようとしています。ただいま兵隊どもがきて、あなたを王宮につれていく、と申ししています。」

「不幸にはもう数知れず会つてますわ！」と、娘はこたえた。「神はどこにでもさいなんをふりま

いているのです。これにぶつかったがさいご、もうめつたに幸福にはお目にかかれませんか。あたしにはかくごができています。どんないたでも、あたしをおどろかすことはできないでしょう！」

危険な瞬間に力がみなぎるめすのとのらのように、娘は立ちあがった。知らぬ国々をひきまわされてつかはれてた、とらわれ人とも見えず、頭を高くあげ、ヴェールで顔をつつんだ。

ファチマは地下の宝庫へおりて、真珠や宝石をたくさん持つてきた。それを娘の帯の中へぬいこみながら、聞えるか聞えないかの声でささやいた。

「なにかの場合にお役にたつでしょう！」

それからやりをかまえたいかめしい兵隊たちに娘をひきわたした。

往來にほこりをあげて、やじうまたちが走りまわった。かれらはふしぎな天女を見ようとしてひしめいた。警官もこの群集をせいりすることができなかった。

娘の到着をつげるドラの音で、王さまはむかえに出た。

「おっ！」とさげんだまま、王さまは目がくらんで、しばらく立ちすくんでいた。「いままで見てきたものは、すべてなんとくだらないものだったろう！でも、これは夢じゃないかしら？この人のためなら、なにかもふりすてて、地のはてまでもかけていくだろう！」

王さまは娘をわがへやへみちびいて、となりにすわらせ、

「おまえはだれだい？ 山の娘かね、谷の娘かね？」と、いろいろ問いただした。

しかしなぞのような悲しみの色をたたえた顔はつめたく沈んで、口は眞珠のかがやきをかたくとぎしたままであつた。娘はどんな人に会つても心を動かされなかつた——尊敬などはかの女には用がなかつた！ 過ぎ去つた遠いむかしのことが思い出されるばかりであつた。

王さまはひそかに考へた。

——どうしても秘密をさぐり出さなければならぬが、それには二つのかぎがあるようだ。見たところ、愛する人と別れ別れになつて、なお愛し、そして苦しんでゐるらしい。そのために悲しい目をして、口をとぎしてゐるのではないか？ でなければ、世の常の娘とちがつて、生活の楽しみを知らず、またおそれということも知らないのさう。不幸と幸福とは入れかわるものだ、といつても、それはでたらめなおとぎ話としか思われない。つまり、はとみために、ぜんぜん自分たちの知らない世界に住んでゐるのではないか？ ともかく、いま戦争にいつてゐるわが子が帰つてくるのを待とう。それまでこの王宮でたいせにもてなしておこう。わが子と夫婦になれば、いまわからないことも、わかってくるにちがいない。

王子は勇敢な騎士として名を知られてゐた。軍隊の指揮官としてもりつぱな才能をあらわし、敵におそれられてゐた。いまも遠い戦場であつて、いく年も長びいた戦争のしまつをつけようとして

る。王さまはこの王子の花よめに、とらわれの娘を選んだ。

娘のために宝石まばゆい衣裳がしたてられた。娘のあたまに、光りがやくかんむりがのせられた。水晶がばらのように赤くきらめいた。この娘にこのかぎり——星をちりばめた空もその光を失うであらう！ かの女を保護するために、おとなしいけらい九人がつけられた。

王さまはいつものように、宴会をひらいた。ウセインにはめずらしいおくりもののお礼に数々の宝物をたまわった。客たちのテーブルにはドラやらっぱの音がにぎやかに鳴りひびいた。客たちはみなよっぱらって、なかなか帰っていかなかった。

とらわれの娘は、つまりダレジャン・ネスタンは、ひとりわがへやでわが身の不幸を案じていた。

——あたしはどれいよりもまだふしあわせだわ！ いったい、だれと結婚させようとするのだらう？ ここはどこだろう？ どうしたらいいのたろう？ なにを決心しなければならぬのだらう？ でもあたしは苦しみにたえてみせるわ！ どんな人だつてあたしをつかまえることはできない。迷つて、わが身に手をあげるものはみじめじゃないの？ 人間は重い試験のときこそ、知恵にたよるもんだわ！

かの女は番人たちにいった。

「わるいたくらみが成功するわけはありません！ あなたがたの王さまが、どんなにあたしを結婚

させたがつても、その前にあたしは死んでしまいます。これはあたしのかたい決心です。あんなにらっぱを鳴らしたり、さわいだりして、それがなんになるでしょう？ 権力や玉座がなんでしょう？

う？ あたしの道は別です。たとえ王子さまがどんなにりっぱなかたであつても、あたしにとつては敵とかわりません。王さまの命令がなんでしょう？ あたしの心配は別のところにあります。あたしはこんな王宮でくらすことはできないのです。いまにもこの短剣で胸をさせば、あたしはもう永遠に安らかになれるでしょう。そのかわり、あなたがたは王さまの怒りにふれて、首きり役人の手にわたされます。そのくらいなら、この帯にしまつてあるあたしの宝物をおとりになつたほうが、どんなにいいかれないじゃありませんか。あたしが逃げるのを助けてくださるか、それとも首をきられるか、おきめになつてください！」

ネスタンは番人たちに真珠と寶石を手わたした。

「さあ、逃げ道をおしえてください。あたしが自由になつたら、あなたがたはきつと神に祝福されますよ！」

高価な寶石は番人たちの知恵をくもらせた。欲に目がくらんで、おそろしい罰のことをわすれ、さつそく逃走の相談にとりかかった。黄金は、見た目にはきれいだけれど、人によるこびをあたえない。それはなみだには無関心で、死ぬほど欲で苦しめる。しかも増えても減つても心配で、魂

にふかくくい入って、天国への道をとぎす！

番人たちはかの女に忠実をちかい、そのうちのひとり服をぬいでわたした。ネスダンはいままで服をぬいで、それに着かえ、宴会の広間の前をこっそり通りぬけて、門へむかった。こうしてかの女は大蛇の口をのがれた。番人たちもかの女につづいて王宮から逃げ去った。

あわただしくドアをたたく音に、ファチマは目をさました。

「ファチマ！」

声をこらしてそう呼ぶ声が聞えた。

ファチマは娘を強くだきしめた。だが娘は危険をおそれて、この古いなじみのやしきの中へははいらなかった。

「いただいた寶石のおかげで助かりました。」と、娘はいった。「あなたのごしんせつは生涯わすれません。でもここにいてはきけんです。すぐ追っ手がきて、あたしを王さまのとこへつれもどすでしょう。どうか馬を一頭あたしにおめぐみください。」

ファチマはうまやから馬をひき出して、娘を助けのせた。娘は感謝のなみだをうかべて、馬にひとむちあてた。そのあとを見送って、ファチマは泣いた。せつかくいたねをまいておきながら、收穫をかりとることはできなかった！

まもなく、狩りでもはじまったかのようなさわがしいもの音が聞えてきた。兵隊たちは都の出入口をげんじゆうにかため、一部はウセインのやしきへおし入った。

「この家で逃げた娘が見つかったら、王さまにあたしの首をさしあげますよ！」と、ファチマは兵隊たちに行った。

かれらはすっかり家さがししたあげく、から手でひきあげていった。その日から、王さまはむらさき色の喪服を着て、ふさぎこんでしまった。太陽が雲にかくれれば、光を染しむことはできなくなる。

その日から、ファチマはウセインの顔を見るのもいやになった。そのうらぎりをゆるせない気がした。そこへつけこんだのが、王宮の宴会係の役人である。かれはファチマのごきげんとりに、しばしかの女をおとずれた。かの女もわるい気持でなくかれをむかえた。ファチマがおろかなやぎだとすれば、これはずるいおすのやぎであった。男にとって、はずべきものがひきようなら、女にとって、はずべきものはむら気である。ファチマはつい口をすべらせて、逃げた娘に馬をやって助けたしだいをこの男にもらした。こうしてかの女はたいへんな秘密をかれの手ににぎられた。

アフタンジルがこの都にきた時分には、その宴会係の役人は旅に出ていた。ところがついきのうのこと、アフタンジルがファチマの手紙を見て、そのやしきをおとずれるというその日、ふいに役

人は旅から帰つてきた。それを知ると、かの女はあわてて、

「お目にかかる時間をすこしのばしていただきたい。」と、アフタンジルにたのんだ。

アフタンジルはかまわず、ファチマのへやへすすんだ。とたんに、役人があらわれて、すぐおどした。かよいい女性をはずかしめ、おどしたひきよるなふるまいが、ついに自分を滅ぼすことになつたのである……。

……ファチマはここまで物語つてきて、ふかいため息をついた。

「あの男が生きていたら、娘の一件をのこらず、ばらしたにちがいありません。そうすれば王さまはかんかんにおこつて、もちろんこのやしきをとりにわすばかりか、あたしを死刑にし、また子どもたちをも生かしてはおかなかつたでしょう。あぶない毒蛇からのがれたのはまったくあなたのおかげです。あたしの不幸は終つたのです！」

「そういえば、どこかで読んだおぼえがありますよ—— 親しい人が敵になつたら、ほんとの敵よりもつと危険だ。』ってね。」と、アフタンジルはこたえた。「分別のある人はやたらに秘密などしゃべらないものですが、ともかくあの乱暴者のことは、もうなんにも心配はありません。海の底でねむってますからね……ところで、その娘はそれからどうなつたのでしょうか？ なにかお聞きになつたことはありませんか？」

「それがやはりたいへんなたよりでしてね。」と、またファチマは話しはじめた。

摩天城のとりこ

ウセインはちかいをやぶつた罪人であり、不信心なうらぎりものである——そう考えると、ファチマはかれのそばにいるのがけがらわしいように感じられ、ウセインもかの女がなんとなくけむつたくて、よりつかないようになった。やしきにいても、ファチマはすこしも楽しくなかった。昼は消え去つた娘のことを思い、夜はかの女をゆめに見た。

ある日の暮れがた、さびしさにたえかねてかの女はやしきを出た。宿場のやどやに立ちよつて、いく人くる人の話でも聞いていたら、すこしは気ほらしになるかもしれない。

するとひとりの旅人が、つづいて三人づれが、やどやの土間にはいつてきた。はじめの男は低い身分のけらいらしく、あらいあさの服を着ていた。四人はかたすみの台の前にこしをおろし、てんでに古ぼけた包みをひらいて、べんとうをたべはじめた。食べる口もいそがしかつたが、しゃべる口もそれに負けなかった。

「ここにとまりあわせたというのものなにかの縁さ。」と、はじめの男がいった。「旅は道づれといっ

てね、おたがいになじみになつたが、あしたのことはわからない。だからここでおれたちがなにも
のなのか、どこからきたのか、ぜひとも知つておく必要がある！ めいめいがそれぞれ自分のこと
を話してみようじゃないか。」

ファチマはかれらの話を興がって聞いていた。いちばんおしまいが、はじめの男の話を順番で
あつた。

「おまえさんたちの話は、だいたいいきまりきつたようなものだが、そこへいくと、おれの話はまず
大つぶの真珠だね。ただで聞かせてはおしいくらいのもんだ。」

そうまあおきして、かれがしゃべりだした話は、しだいにファチマの注意をひいていった。

——かれはカジエツチ城の王さまのけらいでもあり、兵隊でもあつた。王さまは長いこと、わず
らつていたあげく、ついにこの世を去り、あとにふたりの男の子をのこした。おぼがこの子たちの
養育にあつた。城の全権は女王ズラルズフトの手に移つた。女王にはおそろしいものがなかつ
た。戦えばかならず敵をやぶり、まもつては部将たちが鉄壁のようにそなえをかためていた。ふた
りの兄弟——ローサンとローリはいつしかりっぱな若者に成長していた。

外国にいる女王の姉が死んだ、という知らせがきた。高官たちは集まつて相談した。

「どういふふうに、この悲しい知らせを女王さまに伝えたものだらうな？」

千人部隊の総大将ロシヤークはいった。

「私にはめそめそ泣いているひまはありません。そのひまには、街道に出て、幸福をさがしたほうがましです。神が私たちを助けて、どっさり獲物をさずけてくださったら、それをおみやげとして、この私が女王さまのところへおくやみにまいります。いかがですか、みなさんッ」

かれは強い兵隊百人をよりぬいて、街道に待ちぶせした。そして夜になると、通る人々をおそい、キャラバンを略奪した。キャラバンの護衛隊などは、かれに手も足も出なかつた。

ある夜、一隊はもの音に聞き耳たてながら、草原を進んでいった。すると、ふいに、はるかかなたに、なにか光るものが見えた。

「おやつ！ 太陽が地面におちたんじゃないのか？」

一時はそう考えたが、まさか！ では月か、空あかりか？ そのどちらでもないらしい。いろんな意見が出て、けつきよくなんにも見当がつかないまま、おそろおそろ、あたりのやみを照らしている、その光の方へ近づいていった。一隊は用心ぶかく、ふしぎな光を遠巻きにとりまいた。このとき、おもいもかけず、なにものかの大きな声がひびいた。

「おまえたちはなにものですか？ なんのために武器を持ってかけていくんです？ 私は沿海国の王さまの使者として、カジエツチ城へむかうものです。」

一隊は遠巻きの輪をだんだんにちぢめていった。光のもと馬にのっているひとりの人物であることがわかった。その顔からまぶしい光がさして、野づらをあかあかと照らしていた。目も怒りにもえて、しかるように一隊をいらんでいた。兵隊たちは足がすくみ、息がつまった。

だがさすがにロシヤークは大将だけのねうちがあつた。馬上の人が若い女性であることを見てとつた。それに、王さまの使者だというのに、ひとりも従者がついていないのはおかしいとらんだ。かれは兵隊たちに逃げ道をふさがせておいて、娘をつかまえた。

「おまえはどこの国の生まれだね？」

「どこへいくつもりなんだい？」

兵隊たちは口々に聞いたが、娘はなみだをながすばかりで、なんにもこたえなかつた。

「なにか深いわけがあるのだろう。」と、ロシヤークはいつた。「いくら聞いたつて、こんなところで秘密をあかすはずもあるまい。ともかく女王さまにおまかせしよう。こんな世にもめずらしい宝物がさずかつたというのも、女王さまがえらいおかただからだ。きつとおよろこびになつて、たんまりごぼろびをたまわるだろう。この獲物をわれわれがかくしてみろ。それこそ、どんなおとがめをうけるかもしれないからな。」

大将の命令にそむくことはできない。一隊は娘をたいせつにいたわりながら、道を引返してカ

ジエツチ城へまつすぐにもどつた……。

「そのとちゆうで、おれは大将に休暇をねがい出たのさ。」と、旅の男は話をむすんだ。「ちよつとおもわくがあつたのでね。この沿海国のグランシャロをのぞいて、品物をかき集め、それから大急ぎで大将に追いつくつもりなんだよ。」

旅の男の話は聞き手をうならせた。ファチマもひそかによるこんだ。娘に会えるのぞみが見えてきたように思つた。一文なしのびんぼう人が金貨をひろつたような気持であつた。ファチマはその旅の男を呼んで、ふしぎな娘を見たいを、もつとくわしく話すようにたのんだ。男はその話をくりかえした。ファチマはいままでのうら悲しい気分がとけ散つていくことを感じた。

ファチマの召使いの中に、忍術のうまい黒人がふたりいた。かれらはまつ昼間でもぞうさなく自分のすがたを消すことができた。ファチマはふたりを呼んで、

「とらわれの娘のところへしのでいき、そのようすをさぐつておいで！」といいつけた。

三日待つた。四日めに帰つてきて、くわしく報告した。その話によると――、

ふしぎな娘は遠くからでも太陽のようにかがやいて見える。女王ズラルズフトはかの女を王子の花よめにするにきめた。ただよその国々へ戦争に出ていく前なので、

「娘はローサンの妻ときまつたけれど、式をあげるひまはありません。帰つてから、ゆつくりやり

ましよう。」と、いいのこして、忠実なけらいを番人につけたまま、山発してしまった。

こんどの戦争の相手はかなり遠くにある強い国で、長い年月がかかるらしく、女王は魔法の名人たちをみんなつれていった。そのるすは武装した軍隊がまもっている。

カジェツチ城というのは、カッジ人の都のことで、岩のかたまりのような要塞である。矢もとどかない高さに、歯形のかべがとり巻いていて、その中にがんじょうな城が立ち、岩をくりぬいて四方に地下道が通じている。娘はこの城の塔の中にとらわれている。城の外側には戦いに経駈ある一万の軍隊が配置され、城壁の三つの門はそれぞれ三千人の部隊でかためられている。

「……ほんとに、なんというむごい運命なんでしょうね！」と、ここまで話してきて、フアチマはまたふかいたため息をついた。

空飛ぶ使者

アフタンジルはフアチマの物語をいりくんだ気持で聞いた。悲しいというか、うれしいというか、その色をおもてにはあらわさなかつたけれど、それでも思わず、

「ふしぎな話を聞いて、私にのぞみが帰ってきたようです！」とさげばずにはいられなかつた。

「あなたはまれにみるしんせつな人です。きつといいむくいがあるでしょう。ところで、そのカッジ人のことですがね。なにやらないそうおもしろい話のようですから、くわしくおしえてくれませんか？　いったいかれらは人間なのか、魔物なのか、どっちなんです？　魔物だとすると、なぜ人間の顔かたちをしてるんです？　そんなところにとらわれている娘の苦しみはどんなでしょう！　魔物にまたどうして人間の娘が必要なんでしょう？」

「そんなにおい顔なさらなくてもいいんですよ！」と、ファチマはいった。「カッジは人間なので。ただかれらの岩のとりでがだれにも破られないので、そこにカッジの力のもとがあり、とかれないなぞがあるのです。魔法をつかう、ということは有名です。うわさによると、いくら戦つてもカッジには勝てないで、みな殺しになるのがおちだそうです。つまり、人の目を見えなくしたり、海にあらしをおこしたりする力があり、相手の船は沈没しても、自分たちはへいきで波をのりこえていくし、ときにはまた海をほしあげることでもでき、また昼間をやみにすることも、夜をあかるい光で照らすこともできるといわれています。この魔法をつかうという点が人間とちがっているところで、あとはふつうの人間のからだがあるだけです。」

「おもしろいお話のおかげで、心の重荷がとれた気持です。神は不幸にかわって、いよいよこんどはよろこびをさずけてくださるのかもしれない！」

そういつてアフタンジルは天に感謝のいのりをささげた。

長い物語のあいだにいつしか夜はあけていた。かれは水浴してきようと思つた。ファチマはあかるいぬいとりのある上着や香油やターバンをさし出した。

「どうぞ、これでさっぱりしていらつしやい！」

水浴しながら、アフタンジルは考えた。

——もういいだろう、自分の正体をあらわしても！

いままで着ていた商人の服をぬぎすて、武装した騎士のすがたになつて、ファチマのへやへもどつた。顔つきからすがたまで、まるで別の人のようにかわつていた。

「まあ、なんてりつぱな騎士におなりでしょう。これではますますあなたがすきになるわ！」と、ファチマはうつとりと見とれた。

この騎士がじつさいはなにものなのか、ファチマにはまだわからなかつた。アフタンジルは笑いをこらえるのに、ほねがおれた。食事をともにしてから、いとまを告げた。

いくらか酒を飲んで、かれはぐつすりねむつた。夕がた、ベッドから起きあがると、「すぐこちらへおいでください。」と、ファチマのもとへ使を出した。

ファチマはとんできた。アフタンジルは女客を自分のそばのじゆうたんの長いすにまねいて、

「まあもっておことわりしておきますが、私の話はもしかすると毒蛇がかんだように、毒になるかもしれません。」と話しました。「あなたには、まだ私の胸のいたでについてお話しませんでした。」

あなたに心をひかれたようにいったのは、じつはほんとはななかつたのです。商人でキャラバンの隊長といつわって、自分がエジプトの軍部大臣と呼ばれ、強大な軍隊の総司令官として、ロステワシンの王のささえとなつてゐることを、かくしてゐたのです。私には宝庫がひらかれてゐます。私の財産はかぞえつくされません。あらためておねがひします。ファチマさま、南の国からきた旅人を助けてください！ 私にはふかく愛する人がいるのですが、ただ友だちの不幸をすくいたいためにばかりに、国をすて、愛する人をあとにして、さすらいの旅に出たのです。たずねる人は、あなたがお話になつた、そのかがやく顔の持ち主にちがいありません。かの女のために、重い苦しみを負つてゐるのはインドの騎士で、やりにつきさされたライオンのように、力なく首をたれてゐるのです。」

肩にとらの皮をまといつてゐる親友のことを、アファンジルはくわしく物語つた。

「あなたは、あなたがまだ知らないその人についていい薬をあたえ、同時にとらわれの娘にもよろこびをあたえることができるたいせつな人です。あなたのお力がなければ、かの女を幽閉からすくい出すことはできません。運命の手できりさかれたふたりが会えることになつたら、人々はどんなに私た

ちに感謝することでしょう。とりあえず、忍術の名人をカジエツチ城につかわして、タリエールのことをすっかり王女に知らせてやってください。ネスタンが返事をくれれば、その中から、カジエールの弱みをさぐり出して、一気にそのやみの王国をつく手段を考えることもできると思っています。」

「あなたの強いご決心には、ほとほと感じいました。あたしもできるだけのことはいたしましたしよろう。」

そういつてフアチマはすぐ色の黒い忍術使いを呼んだ。

「いま手紙を書くからね。それをカジエツチにとどけておくれ。ずいぶんほねもおれると思うが、おまえは忍術の名人、きつとうまくやりとげるだろう。長いあいだ待っていた救いの手がきたことを、よくあのかたに申しあげるんだよ。」

「あすじゆうにはご返事をいただいてまいります。」と、忍術使いはたのもしげにこたえた。

フアチマは書いた――。

「あなたはいままでの不幸についてお話をなさいませんでした。ところがあたしはぐうぜんに、あなたの道がどんなにつらいものであるかを知ったのです。またあなたにもおとらず、どんなにタリエールが苦しんでいるかをも知ったのです。すぐタリエールになぐさめの手紙を書き、なにかおくりものをあげてください。さもないとあのかたのばらの花はしぼんでしまいます！」

あなたをとらわれからすくい出すために、アフタンジルという勇士がお見えになりました。エジプトのロステワン王の総司令官で、いままで戦いにやぶれたことを知らないという人です。なにごともうちあけて、この人にご相談なさい。きつとお力になれると思います。

あたしたちはいろいろのことを知らなければなりません。外国へ戦争にいったカッジたちはいづごろ帰ってくるのか？ 城壁のそとにいる部隊の数はどのくらいか？ 守備ぶりは？ 部隊の隊長たちはだれだれか？ そのほかカジエツチ城についてごぞんじのことを、くわしく、すぐお知らせください。

不幸はもうおわすれになって、勝利が近いことをお信じなさいますように。あなたが愛するかたとごいっしょになる日が一日も早くくるよう、おたがいに全力をつくしましょう。色いろの黒い忍術使にんじゆつかいいは女おんなあるじから手紙てがみをうけとつた。

「じかにあのかたに手わたしするんですよ！」と、かの女は念をおした。

使者はみどりのマントをひろげたかと思つと、まるで鳥のようにまいあがり、高いやねを越して、矢のように飛んでいった。あつというまに、もうそのすがたは空のどこかに見えなくなつた。使者は道をいそいで、まだ夜のやみがたちこめているうちにカジエツチ城に着き、目に見えないかげとなつて、番兵たちがまもっている城門をくぐりぬけた。塔までにはまだいくつものがんじよう



なドアがあつたが、使者が近づくと、ひとりでにかんぬきがはずれた。

とらわれの王女は使者を見て、身ぶるいした。ごんどはどんな不幸がくるのか、と心をひきしめた。すみれは青くなり、ばらはサフランのようになった。

「長いあいだのごしんぼうはむだにはなりませんでした！」と、使者はいった。「私はファチマの召使いで、そのことづてを持ってあがつたのです。私のいうことは、この手紙が保証するでしょう。」

王女は使者のことばをじつと聞きおわり、それから手紙をひろげた。読んでいくうちに、水晶となつてなみだがあふれてきた。

「でもあたしがこの城にとじこめられて苦しんでいることを、だれがその勇士に話したんでしょうね？」と、ネスタンは聞いた。

「私はくわしいことはぞんじませんが、知っているかぎりのことは申しあげます。」と、使者はこたえた。「あなたが立ち去つたあと、私たちのところは火が消えたようになり、ファチマは毎日泣きくらしてました。そのうちあなたがカジエツチ城にいることを耳にし、私もがよろすをさぐつてあるじにお知らせしたのです。あるじはますますなげいておりましたが、そこへ楽園のポブラのようにすらしとした外国の旅人があらわれ、この人にファチマはあなたの悲しい運命のことを

うちあげました。この人はあなたをたずねて、もう長いあいだ世界じゅうをめぐりめぐつてきたのだそうです。おふたりのおいしいついで、私は矢のようにここへ飛んできたしだいです。」

「よくわかりました。」と、ネスタンはいった。「ただファチマがだれからあたしがここにいたことを聞いたのか、そこがまだはつきりしません。でもあなたのおことは信じていいと思います。すぐ返事を書きます。たりないところは、あなたからもよく話してあげてください。」

三つの手紙

ネスタンはファチマに書いた――。

あなたにはあたしにとって母親よりもなおありがたいかたです。もうごぞんじのとおり、あたしは悪魔のわなにおちて苦しんでいます。あなたのお手紙は自由へののぞみをあたえ、あたしの悲しみをやわらげてくださいました。

この城はけわしい岩山の上に立っています。門にも通路にもいく千という守備兵がかたまっています。要塞のげんじゅうなことは、とうていおつたえすることはできません。女王ズラルズフトはカッジどもをしたがえて、遠い国へいっています。もうずいぶん長くなりますが、いつ帰るかはわか

りません。しかし塔も城壁も数知れない兵隊でまもられていますから、どんな勇士でもここからあ
たしをつれ出すことはできないでしょう。アフタンジルというかたは友情のちかいをまもるばかり
に、お苦しみになっているのだと思います。おひとりでは、とうてい、あたしのもとまで近よれな
いでしよう。どうしてもタリエールとご相談なさる必要があります。あたしも愛する人がいなか
れば、よろこびはありません。

いままであたしはあなたになに一つ申しあげませんでした。苦しみにうちひしがれて、自分の悲
運をかこっていたばかりでした。いまはじめて、真剣におねがいます。あたしの愛する人がい
ちをぎせいにしないよう、ぜひ書きおక్కてください。ふいの死によつてあたしのいたでをさら
うずかせないよう、よくいい聞かせてください。あの人に万一のことがあつたら、あたしはどうな
るでしょう？ もうこれいじょうたえる力はないのです！

タリエールになにかおくれ、とあなたはお書きになりました。ごしんせつをうれしく思います。
あたしがいつも愛用しているヴェールの一片をおとどけます。あたしにとつても、かれのおくり
ものがただ一つのなぐさめでした。それはあたしの運命のように、いまは色あせてしまいました
が、それでもは身はなさずたいせつにしておりませう。

ネスタンはタリエールに書いた――。

《この手紙をごらんになれば、いままでのことがよくおわかりになるとぞんじます。あたしにとつてはからだだがペン、生活がインク、心が紙でした。この心はあなたの心と永遠のくさりによって結びつけられているのです！

いったいなにごとがおこったのでしうか？ やりきれない世の中！ 日は照つてもあたしにはあたりません。あなたのお顔を見なくなつてから、どれほどの年月が流れたことか！ いまこそ、だれの前にもかくしていた秘密をあかすときがきたようです。

あたしはあなたがもはやこの世にいないのではないかと考へて、心をとめていました。そのためぐつたりと戦う力を失つていたのですが、いま、運命のはかりの上で、悲しみはもう重たくはなくなりました。あなたの愛によつてあたしは生きていきます。ほかになんのぞみもありません。不自由なとらわれの中で、あなたただひとりがあたしのよるこびであり、愛は心の中でくちない花のように花をつけています。

長い年月の不辛について、どうあなたにお話したものでしうか？ だれだつてこの物語を信じることはできませんわ。あたしははじめてフエチマのやしきで、やすらかなかくれ家を見いだしました——神がかの女におめぐみをあたえますように。ところが世の中はまたいつもの悪事をはたらいたのです。まもなくあたしはカッジ人のとりこにされました。かれらの力には敵するものがありました

せん。運命はあたしたちに致命的な打撃をくだしたのです。

あたしは城の中にいます。城の高さはどのくらいか、とてもそこまでは目がとどきません。出入口は地下にあつて、昼も夜も数知れない兵隊たちがげんじゅうに見はつています。近よる敵は火に焼かれて全滅します。カッジたちの魔法の力は底知れないくらいです。かれらを攻めふせることはおもいもありません。あなただつて、まきのように火に焼かれて、たちまちその場で死んでしまふでしょう。

どうかあたしをおわすれになつて、心を岩のようにじょうぶにおもちください。あたしはよその庭ではけつして花を咲かせません。あなたなしでは生きてかきなき生涯ですから、この高い塔から身を投げるなり、剣でさすなりいたします。もし天に三つの光があつていいものなら、あたしはあなたの月になりましょう。もし空気や火や土や水とのつながりからのがれて、つばさがあたえられるものなら、あたしは昼も夜もかがやくお顔を見るために飛んでいきましよう。あたしはどこまでもちかいを忘れません。あたしのためにゆるしを神にいのつてください。

あなたの心を信ずるからには、死の苦しみもおそろしくはありません。お墓にはいつてからも、魂の火は消えないでしょう。ただこうしてお別れしてゐるあいだの傷のいたみにはたえられませぬ。かさねておねがいいいたします。あたしのことでおなげきにならず、あたしをお忘れになります

ように！

さしあたり、インド平野へいそぎお帰りください。あたしたちと別れてから、父はすっかり氣をおとし、敵のかかどにふみつけれられているそうです。敵軍をうちやぶって、父に王冠をとり返してやってください。

あたしはもうこれいじょうあなたにおなげきをかけたくありません。心は運命に屈服しない心に通ずる道を見つけています。死の床にあつて、からすのなき声を聞くだけのあたしを、そのままにしておいてください。生きていれば、それだけあなたを苦しめるばかりなのですから。

あなたはあたしにショールをおくりものにくださいました。知らぬ国々にいても、たいせつにつかっていたこの織物を、いまひもとしてお返しいたします。あたしたちの過ぎし楽しい日の思い出として、お納めください！

愛する人への手紙は書きおわつた。ショールのひもで手紙の巻きものをていねいにしばつた。ネスタンはこれを色の黒い使者にわたした。

使者はカッジに負けない速さで空を飛んだ。ほどなくこの手紙はファチマにとどけられた。アフタンジルは手をあげて、神に感謝した。

「これが奇蹟でなくてなんだろう！」と、かれはファチマにいった。「運命はたしかにいい方へま

わったのです。これもみんなあなたのおかげ、なんでお礼れいしたのでしよう！ いよいよそのときがきました！ さつそく友ともだちを呼よんで、カジエツチ城じやうをたたきやぶります！」

「それでは、これでお別わかれですね？ どうしましょう。あたしはかれ木きみたいになつちまいますわ。」と、女おんなあるじはいった。「でも、あたしのためにおくれてはなりません。はやく王女おうじよをたすけてあげてください。カッジどもが帰かえってきたら、もう敵てきの要塞ようざいはおちませんからね。」

アフタンジルはフリドンからつけられた従者じゆうしやたちをそばへ呼よんで、いった。

「私わたしたちは、まるで元氣げんきがなかつたが、たずねる人ひとの消息しよそくがわかつたので、これでいっぺんに生き返かえつたよ。もうじき敵てきに大おほきい傷口きずぐちをあけてやるのだ！ フリドンと会あつて、よくうちあわせしたいのだが、私わたしは別にいくところがあつて、そちらにはまわれない。おまえたちから、これから大戦たいせん争そうにかかるといふことをよく王おうさまにつたえてくれ。おまえたちは私わたしに忠実ちゆうじつにつかえてくれた。それだけでもじゆうぶんほうびをあげるねうちはあるのに、さらにこんどの大役たいやくだ。ただ私わたしの財産ざいさんは遠とほくにあるため、いまここで分わけてやることができな。けちんぼうと思おもうかもしれないが、さしずめ、あの海賊かいぞくからぶん取とった品々しんざんでがまんしてくれ。もちろん、船ふねも一ひとそうつけてあげる。自由じゆうにおまえたちのものにしていい。そのかわり、いま手紙てがみを書かくから、それをかならずフリドンにわたすように。」

アフタンジルは兄弟に書くような気持でフリドンに手紙を書いた――。

「弟よ！ その後かわりはないかね？ 私はつらいこと、悲しいことをずいぶん経験したが、いまは大きいのだぞみをもつて、目的に近づこうとしている。ふかいあなにおちたライオンのように苦しんでいる男の愛する人をすくい出すたしかな道を見つけたのだ。かの女は魔法使いの摩天城に幽閉されている。これから決闘にのり出すわけだが、道はけっしてたいらではない。さいわい、敵の要塞にはいまカッジどもはいないけれど、おびただしい軍勢がまもりをかためている。

私には元気がもどってきた。心はよろこび勇んでいる。おまえと組んだら、だれがこれをうちやぶることができよう？ 思いついたことはすぐ実行する。ゆくてにあるじゃまものはたおれ、岩もろろのようにふみつぶされるだろう。

遠い旅へいそがなければならぬので、いまおまえに会うことはできない。とらわれの王女の苦しみを思うと、とちゅうの時間が一時間でも一分でもおしい。勝利の上は手をたずさえて帰り、ともに幸福をわけあおう。そこでおまえにたのむことにした――兄弟として、たすけてくれ！

おまえがつけてくれた従者たちはまことに賞讃にあたいする。私に忠実で、たてのようにならなくなった。もっともおまえの召使いたちには私のほめことばなどは必要がないだろう。むかしからことわざにもあるとおりだ。

——すぐれた人はすぐれた人を生む。〇

アフタンジルはこの手紙を従者たちにわたし、くわしいことは口づたえするように、念をいれて
いいつけた。

かれは別にかいでこぐ船を手に入れた。ファチマは声をあげて泣いた。かれもさすがに胸がせ
まった。ウセインも、家の子たちも、みんな涙をながしてさげんだ。

「あなたは私たちを火であたためてくださったさいました。いまお別れしては、まるで生きながらお墓に
はいるような気持です。どうしてなぐさめたらいいんでしょう！——

なみだで見送られて、アフタンジルは、いつもばらの花が咲きにおっている都、グランシヤロを
あとにして、海へ出ていった。

五、キヤラバンの道

洞窟宝库

海をわたって上陸すると、アフタンジルはただひとり海岸づたいに馬をとばした。もう春風がそよそよとふいていた。草木はみずみずしくなっていた。かに星座が高くのぼってきた。ばらはばらの上に重そうに首をかしげた。春のやわらかいかおりは騎士をうつとりとさせた。初雷が鳴り、それとともに水晶のようにわか雨がしぶきをあげた。

荒れ地のやぶの中ではとらやライオンと戦いながら、砂漠を過ぎ、知らぬ国々を越えていった。はるかに、洞窟のある岩山が見えてきた。アフタンジルはつぶやいた。

「さあ、もうじき会えるぞ！ きんぎ苦しみぬいてきた兄弟があすこで待つてはるはずだ。うれしいたよりでよろこばせてやりたいが、もしいかなかったらどうしよう？ 世界じゅうたずねまわったこ

とが、むだになっちまうじゃないか。そうすると、なにもかもおしまいだ！　タリエールはいるかしら？　私を忘れないかしら？」

タリエールの馬の足あとを見つつけようと、たえずあたりに気をくばりながら、草地を進んでいった。くらい森に近づいたところで、大声あげてタリエールの名を呼んでみた。するとこのとき、森の中からぴかりと一条の光がさしてきた。おどろいてふりかえると、かがやく剣をぬきはなつたすがたで、そこに兄弟が立っていた。

足もとは一ぴきのライオンがたおれていた。馬は見えなかった。剣からは血がしたたりおちていた。アフタンジルの呼び声を聞いて、タリエールは用心して身がまえたが、声の主が兄弟だとわかると、飛ぶようにかけてきた。

剣をなげすて、一語をも発せず、ただうれしさがいっぱい、かれはアフタンジルにだきついた。「もう運命の前にひれふしはしないぞ！」と、かれはさげんだ。

「とらわれの王女のゆくえがわかったんだよ。」と、アフタンジルはいった。「いったんはかれたように見えたが、ばらはまた花をつけたのだ！」

「おまえにまた会えただけでも、どんなにうれしいか。」と、タリエールはこたえた。「そのよろこびはとうてい口に出してはいえないくらいだ。もう私には薬はいらぬ。いっぺんで全快したよ！」

声はふるえて、ことばはとぎれた。王女のたよりはちよつとは信じられない、といった調子に見えたので、アフタンジルはいそいで王女の手紙をわたした。タリエールは手にとつて、それにくちびるをおしつけた。

シヨールのひもに見おぼえがあつた。タリエールはまさおな顔になり、目をとじて、地面にたおれた。まるで雷にうたれたかのように、そのまま身動きもしなかつた。

アフタンジルはおどろいてかれの顔をのぞいた。あまりのうれしさに息がたえたのだろうか？ にかいなみだにむせびながら、アフタンジルは頭をかきむしつた。

「友をこんなめにあわすとは、ばかでなければ気がいだい」と、かれはさげんだ。「よく燃えているまきに水をはねかければ、ほのおはいっそう強くなるにきまつてるじゃないか。よろこびにさいげんがなければ、心はそれにたえることができないわけた。いきなり本すじの話をもち出したばかりに、友の傷口に焼きごてをあててしまった。まったくまずいやりかたをした。むずかしいくふうにはまるでなれていなかつたからだ。いそがずに、すこしずつはしから話をほぐしていけば、こんなことにはならなかつたものを。」

タリエールはあしの葉かげに、じつとたおれている。アフタンジルは水をさがしにかけずりまわつた。水はない！ もとへもどつてきて、ライオンの死体から血をすくい、それをタリエールの

はだかの胸にかけ、それで口のあたりをしめしてやった。

タリエールはからだを起こし、目の前に友を見た。その目はあかるい光でかがやきはじめた。ア
フタンジルはほつとした。

春咲くばらも冬の霜にあえばしほみ、ひでりにあえばかれる。うぐいすのあまい声が、その上で
歌っていても、はなびらは寒さにくずれ、暑さに散る。人の心もちょうどそのようにたよりない。
よるこびの度合も悲しみの度合も知らない。幸福をさいなんでもらせて、生活はその心に傷をつ
ける。世の中を信ずる人は、自分に敵を見ているその人だけである！

タリエールは手紙をひらいて読んだ。かれはおそろしさに身ぶるいし、なみだでほおをぬらし
た。

「いまとなつても、まだおそろしいことや悲しいことがあるのか？」と、アフタンジルは友をしか
りつけた。「笑え！ 笑つて王女をとらわれからすくい出すのだ。ぐずぐずしているひまはない。
道は私を知っている。よるこび剪んで、カジュツチ城へ馬を飛ばそう。剣にものをいわせて、カッ
ジどもにおもい知らせてやるのだ！ 敵をふみつぶして、ようしやなく復讐してやるのだ！」

タリエールは王女のことをいろいろ聞きはじめた。かれの目の中で、光がやみにかわつた。ほお
に赤みがさしてきた。

「私はおまえにたいへんなかりができた。とても私には返せない。神がおまえにじゅうぶんむくいてくれるだろう。おまえのおこないをほめることも私にはできない。聖者がおまえの徳をたたえてくれるだろう。泉の水が花をよみがえらせるように、おまえは泣きぬれた私の目をかわかしてくれた。」

アスマートがどんなにかはればれすることだろう、と語りあいながら、ふたりは岩窟へと馬を走らせた。

岩窟の前では、ひとりアスマートが、下着だけのすがたで、もの思いに沈んでいた。かの女はふとひばりの歌のようなほがらかな歌声を聞いた。顔をあげると、タリエールがその友とつれだつて馬を走らせてくる。服を着ていないことも忘れて、かの女はふたりの方へかけよつた。いつもタリエールのなみだばかり見なれているので、このゆかいな歌にはひどくびっくりした。だから、よつぱらいのように足がもつれて、うまくかけられなかった。うれしいたよりを聞かされても、それを信ずることができなかつた。

ふたりの友は笑顔でいった。

「ずいぶん長いあいださがしまわつたが、やっととらわれの王女のゆくえをつきとめることができただよ。運命は私たちの苦しみをやわらげ、不幸から私たちをとき放してくれたのさ！」

アフタンジルは馬からとびおりた。アスマートはやなぎの杖よりもしなやかな手をのばして、なみだをほろほろこぼしながら、かれの顔に、首にキスした。

「はやく、はやく、王女さまのことを話してください！」

アフタンジルはネスタンの手紙をわたした。アスマートは王女の筆蹟をなつかしくたどっていった。だが、これがいいたよりだとは思われなかった。かの女はおそろしげに巻きものをながめながら、つぶやいた。

「こんな悲しいことが、ほんとにあるのでしょうか？」

「このたよりはよろこんでいいのです。」と、アフタンジルはこたえた。「太陽は私たちを照らし、空には雲もない。善はいつまでもさかえるが、悪の寿命は長いためしがありません！」

神に感謝のいのりをささげてから、一同は洞窟の中へはいった。アスマートのつくった食事をしながら、またひとしきりネスタンの話かはずんだ。だきあつては、うれしなみだにむせんだ。

「おどろいてはいけないよ、これはほんとの話なのだから。」と、念をおして、タリエールはアフタンジルの顔を見た。「いつかもういったとおり、私は怪物デフどもを退治して、この洞窟を占領した。ところが、ここには数知れない宝物がかくしてあつた。いままで、そんなものは一つもいらなかつたから、手をつけたこともなかつたが、これからはなにかの役にたつかもしれない。持てるだ

け、持っもつていいこうこうじゃじゃないか。」

アスマートもつきそつて、ふたりは洞窟どうくつの奥おくへはいつていつた。がんじょうなとびらがいくつもあつた。つきつきにこじあけた。へやは四十あつた。どのへやもまぶしいばかりきらきら光ひかつていた。ううずず高たかいい宝石ほうせきの山やまがやみにかがやいていた。真珠しんじゆ、金きん、ダイヤモンド——どの一つもボールくらの大おほきさがある世よにもまれなものとばかりであつた。

そこにはまた兵器庫へいきこのように、数かずかぎりもない武器ぶきが集あつめられ、かぼちゃの山やまのように、積つまれてあつた。なかで、とりわけ大おほきい一つの箱はこが目めについた。近ちかづいて見みると、そのふたにこう書かきつけてあつた——。

《この中なかには、よろい、かぶと、きれあじ無類むるいの剣けんなど、特とくに選えらばれた武器ぶきがはいつている。その所有権しよゆうけんについてカッジとデフとのあいだに争あそいがあつたが、裁判さいばんはデフの勝かちになつた。いわれなく、この書かきつけをやぶるものは嚴罰げんばつに処しよせられるであらう。》

かぎをちぎりすてて、一騎きう討うちちでも、戦鬪せんとうでも、敵てきの刃はがたたないような、みごとな武裝品ぶそうひん三組さんぐみをえらびとつた。かぶと、剣けん、くさりかたびらなど、いづれもローマの神々かみかみが身みにつけていたやうなものばかりであつた。武勇ぶゆうにおいてかれらにまさるものがあるだらうか？ かれらの肩かたあてやよろいをきりさくものがあるだらうか？ その反はん対たいに、かれらの剣けんはわらか紙かみのように鉄てつをたちきる

であろう！

「悪人どもがその息の根をとめるのも、もうじきだ。神は正しい道を私たちにさししめすだろう。」
そう決心して、ふたりはすっかり武装をととのえた。あとの一組はフリドンにわたすために、つなで荷づくりした。

金貨や寶石をすこしずつ身につけてから、とびらにはみんなかぎをかけ、入口を密閉した。
「これでよし！」と、アフタンジルはいった。「今夜はゆっくりやすんで、あしたの朝、みんなそろって出発だ！」

三騎士の顔あわせ

夜明けとともに二騎士はフリドンの国へと旅だった。はじめはアスマートをかわるがわるめいめいのくらへのせていたが、とちゆうで、金貨ひとつかみをはらって、第三の馬を手に入れることができた。アフタンジルはその幸運をよろこんだ。

見ると、放牧しているらしく、馬のむれがかけまわっている。もうここがフリドンの領地だとすれば、馬の持ち主はフリドンその人にちがいない。タリエールは友に相談した。

「ひとついたずらしてみようじゃないか。馬どもを追いかけてつかまえる。そのさわぎにおどろいて、おっとり刀で、部下をひきつれてフリドンがかけつける。ところが、くせものは私たちだとわかって、大笑いになる。うまくいっいたらおもしろいぜ。」

なるべくいい馬をえらんで追いかけて、なげなわをかけた。牧人たちにおおいそぎでまきの山に火をつけ、煙をあげて、さげびだした。

「いのちしらずめ！ おれたちの王さまの強いことを聞いていないのか？ たちまちまつ二つにされるんだぞ！」

騎士たちは、矢をはなっておどしながら、なおも馬どもを追いかけてまわした。フリドンは信号の煙を見、つづいて遠くのあわただしいさげび声を聞いた。身じたくしているところへ、牧人たちがかけこんだ。

「たいへんです。馬どろぼうがおそいました！ とても、強いやつらで、私どもの手におえません！」

フリドンはすぐ馬にまたがり、つむじ風のようにかけ出した。おともの部隊はともかれに追いつけなかった。だがフリドンは、かぶとのひさしにかくれて、ほとんど顔が見えないにもかかわらず、もう遠くから、馬どろぼうがなにものであるかを見やぶった。

「ごきげんよう、兄弟まうだい！」と、まずタリエールの方ほうから声をかけた。かれはかぶとをぬいで、にこにこした。「そのけんまくでは、私わたくしたちにひと太刀たちあびせるつもりと見える。お客きやくのもてなしかたを知らない、けちな主人しゅじんもあればあるもんだ！」

「そうおどかすもんじゃありませんよ。」といいながら、フリドンは馬うまをおりて、低くおじぎしうとした。

しかし二騎士ふたきしはそうさせないで、かれをあたたかくだいた。かれのけらいたちは二騎士ふたきしにキスした。

「とても胸むねがいたんで、別わかれているにはたえられません。」と、フリドンはさげんだ。「なんとかして、私わたくしのいのちを役やくだててください！」

三人さんにんはよろこびに顔かほをかがやかせながら、部隊ぶたいをしたがえて、フリドンの城しろに着ついた。かれはアファンジルを自分じぶんのとなりにまねき、いちばんとしようえのタリエールをきんらんまばゆい玉座たまざにすえた。フリドンには洞窟どうくつから持もってきた武器ぶぐひとそろえがわたされた。

「おまえにはもつとじゅうぶんなお礼らいをしなければならぬのだが、デフの宝物ほうぶつをとり出すひまがなかつたのでね。いまは一刻いっくもぐずぐずしてはいられないから。」と、タリエールはいった。

「とんでもない、私わたくしになんのおくりものがいりましよう！」と、フリドンはこたえた。

夜よになった。つかれた旅人たびびとたちのまぶたは重おもくかぶさった。

あくる朝あさ、客人きやくじんたちを浴場よくじやうに案内あんないした。フリドンはりっぱな衣裳いしやうをかれらにおくった。

「たいせつなお客きやくさまを朝あさはやくから起おきこして、さぞ氣きのきかないあるじだと思おもいでしよう。」

と、フリドンはいった。「しかし、おかれては一いだいじです！ カジエツチ城じやうまでは遠とほい道みちです。

カヅジどもが帰かへってきたら、もう私わたしたちに勝かちみはありません！ 私わたしはえりぬきの部隊ぶたいをつれてい

きます。城じやうを占領せんりやうするには戦士せんし三百名ひゃくさんめいが必要ひつようです。黒雲くろくもからいなすまがほとばしるように、守備兵しゆびへいを

おそつて、王女わうじよをつれ出ださなければなりません。私わたしはその城じやうのようすをよく知しっています。みかけ

石いしでたたまれた要塞ようさいで、その城壁じやまへきはまだ一度いども敵てきにやぶられたことはありません。近ちかづいたことを

さとられて、野戦やせんになったら、こっちの負まけです。だからあまりたくさんの軍隊ぐんたいではかえつて不利ふり

になります。小隊せうたいで、かれらに感かんづかれないように、こっそりとしのびよることがかんじん

なのです。」

フリドンはアスマートにも衣裳いしやうや真珠しんじゆなどをおくつて、ここに残のこっているようにすすめ、すぐ三

百人ひゃくにんの騎士隊きしたいの武装ぶさうにとりかかった。いずれも名なのある勇士ゆうしばかりで、どんなことにぶつかつても

さわがず、しんぼう強つよくそれをきりぬける腕うでをもっていた。この三百人さんひゃくにんがまるでひとりのように、

フリドンの指揮しきのもとにすばやく行動こうどうした。

部隊は出發した。海をわたって上陸すると、人里はなれたうらさびしい裏道を、ひるとなく夜となくすすんでいった。

ついにある日、フリドンは二騎士にいった。

「ガジェツチ城はもうすぐです。ただ、日が暮れるまで、待たなければなりません。敵に見つかつてはたいへんですから。」

すっかり暗くなつてから、休みなしで急行した。これを見たものもなく、聞いたものもなかった。けわしい岩山のいただきに、ものすごい城のそびえているのが目にはいった。がけの上から、番兵どもの呼びかわす声が伝わつてきた。

地下道の入口は一万の兵隊でまもられていた。月があかるく要塞を照らしていた。騎士たちは身づくろいしながら、ささやいた。

「進退のかけひきがうまければ、どんなむずかしい仕事にも負けやしない。大将の指揮がよければ、十万人だつて圧倒してしまふよ。」

摩天城の戦い

「私の考えはこうです。」と、フリドンは二騎士にいった。「ふつうのやりかたでは、この小部隊で城を攻めおとすことはできません。いくら勇気があつてもだめです。また兵糧攻めなどの手ぬるい方法では、いくらかかるかしれません。私は子どものときから、職業師のようななるわざをおおいにけいこしました。とんだり、はねたりはひじょうにとくいです。ぶらぶらゆれてはいる綱をへいきでわたることもできます。この技術は仲間からずいぶんうらやまれたものです。あの城壁のつぺんのぎざぎざの一つになげなわをかけて、するするとよじのぼることができるのは、おふたりではなくて、この私でしょう。そうして密林の中に、一本の通路をあげます。そこでたてをかまえ、じゆうぶんに武装して、城壁の上から中へとびおり、野原のつむじ風のように番兵をおそいます。番兵どもをかたづけて城門をひらく。あいつのろしをあげますから、それを見たら、すぐかかってくるべきです！」

「おまえの剣ははずかしめられたことがない。おまえの腕は手傷ひとつうけないだろう。だが、」と、アフタンジルはいった。「そのやりかたはひじょうにあぶないよ！ 要塞を注意してごらん。番兵どものたえず呼びかわしてる声が聞えるじゃないか。すこしでもあやしいもの音を耳に入れたら、すぐそこへかけつけて、おまえがかけた綱をたちきるにきまつてる。こちらのたくらみは見やぶられ、退却しなければならなくなる。おまえの考えが悪いというわけではないが、もつと怪

かにうまい方法がありますかね？」と、フリドンは聞いた。

「そんな方法がありますかね？」と、フリドンは聞いた。

「ないこともないよ。」と、アフタンジルはこたえた。「いちばんいいのは、しばらくのあいだ、そつと部隊をふせておくことだ。番兵どももふつうの旅人には気をゆるして、べつに手出しもしないだろうから、私が商人にばけて、らばを引いて城壁にむかう。荷物の中には剣その他の武器をかくしておく。もちろん、三人そろつて、いつてはまずい。うそがばれたらたいへんだからね。こうして市内へもぐりこんでから、身じたくしてやつらをきりまくる。神の助けがあれば、血は川となつて流れるだろう。門をまもっている兵隊をかたづけて、門をあけると、そこへ、さいごの打撃をあたるために、おまえたちがおしよせる。これならうまくいくと思うが、どうだろう？ 賛成してもらいたいね。」

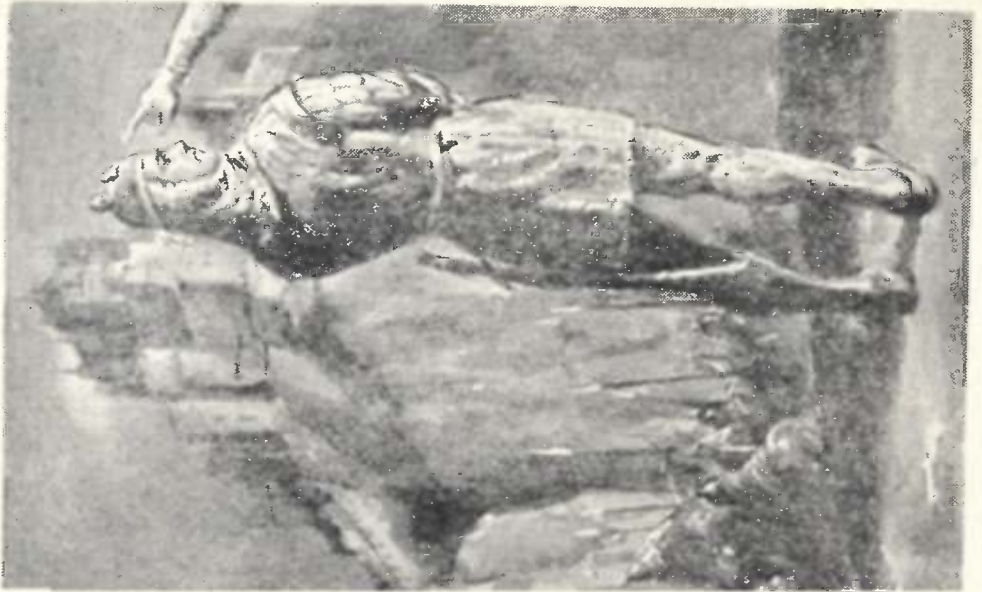
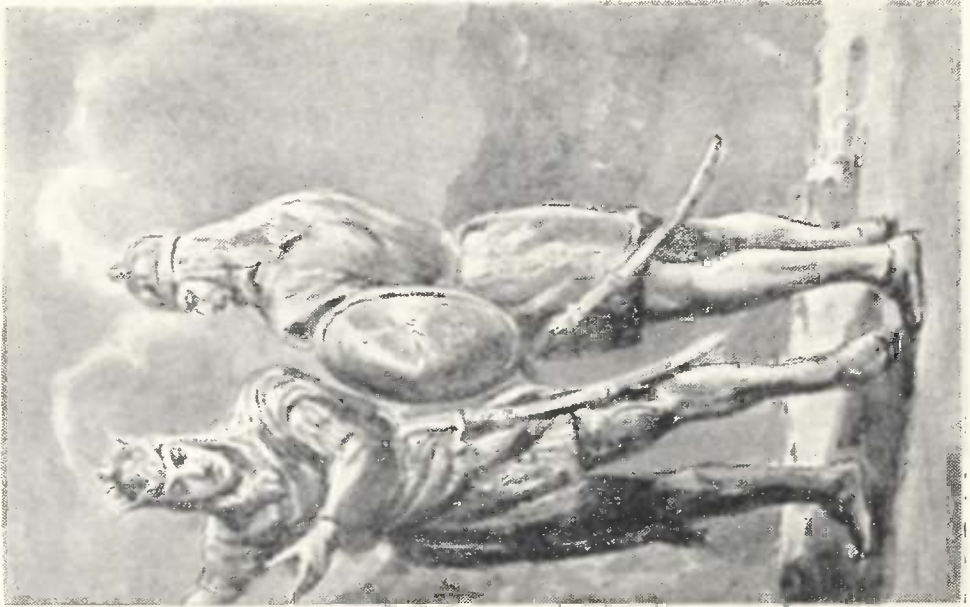
「ふたりの考えはじつに見あげたものだ。知恵といい、勇気といい、それいじょうのものは人間にのぞめないよ。だが……。」と、タリエールはいった。「かんじんなときには第三の友がおまえたちにも必要だ、ということを考えてもらいたいね。どんな場合でも私は役にたつはずだ。それに、戦いのもの音があの塔の上まで伝わったらどうだろう？ 塔から下を見おろして、いさましく戦っている人々の中に私を見つけてことができなかつたら、かの女は私のことをへなんてひきょうな！」

と思うにちがいない。そこで私の考かんがえだが、これはまず成功せいこううたがいなしだね！夜あけとともに、めいめいが百人ひゃくにんずつをしたがえて、正面しよめんから堂々どうどうとおしよせるのだ。敵は小人こじん数とあなどつて、城門じやもんから討うつて出るだろう。戦いくさいがはじまる。私わたくしたちはすばやく敵てきを半円形はんえんけいにとりかこみ、同時に一部いぶが三つの城門じやもんへ殺到ころつする。こうして道みちがひらけたら、あとともう、いつものとおり、勝利しょうりはこつちのものになるよ。」

「よし、それにきまつた！」と、フリドンはこたえた。「こうなると、あの足あしのはやい馬うまをあなたにおくつたのは、大失敗だいしつぱいでしたよ。カジエツチ城攻じやうせめに私わたしが加くわわると知しっていたら、あの馬うまはまずあなたの手てにははいらなかつたでしょうな！」

騎士きしたちは顔かほを見あわせて、大笑おほわらいした。じようだんをいったり、まじめな相談そうだんをしたりしているうちに、夜よはあけてきた。勇気ゆうきと決意けつぎがもりもりとあがつた。攻撃こうげきのためにいちばんいい馬うまをえらんだ。三人さんにんはそれぞれ百人ひゃくにんずつの騎兵きへいをしたがえた。かぶとのひもをしつかりむすびなおすと、すぐ城壁じやへきめざして軍ぐんをすすめた。

金色きんいろの朝日あさひにはえる三騎士さんきしのすがたは、世よにも美しく、りつばなものであつた。とりわけ《黒》にまたがったタリエールの顔かほからは、いまにも火花ひばなが飛はつするばかりに見みえた。この進軍しんぐんをなにしたとえることができようか？ 山間やまあいの急流きゅうりゅうは千年せんねんの巨岩きよがんをもつきくずす。だが海うみに合あつると、その軽快けいかい



な歩みは重く、おごそかになる。

戰場を三つに分けた。それぞれの部隊の前には目的とする城門がある。夜のあいだに偵察兵を出して、ようすはすっかりさぐつてある。城門に近くなると、みんな武器やたてをかくして、旅団のふうをよそおつて、列もばらばらにゆつくり馬を進めた。番兵どもはねほけまなこでそれを見て、別にあやしみもせず、さわぎもしなかった。城門のすぐ前にせまったところで、騎兵たちはいっせいにかぶとをかぶつた。

かれらは馬に拍車をあてて、いきなりとっかんに移つた。城門の前が大さわぎになつた。剣のひびき、さけび声。番兵どもはふいをつかれて、やたらにうろたえ、門をしめるのも忘れて、たいこをたたき、らっぱをふいた。

この朝、カッジどもにはもう一つ、おそろしい災厄がおちた。土星が太陽をかくし、地上にやみがおりてきた。まがつた玉のように空は重々しくかたむいた。

みるみる死体は山をきずき、山の上にまた山がかさなつた。タリエールのものでいかけ声は敵をふるえあがらせた。かれは敵のたてをきり、よろいをきり、くさりかたびらをきつた。みかたの部隊はときをあげて三方から市中になだれ入つた。城壁をこわし、上から大石をつきおとした。アフタンジルは破壊された場所をつきぬけて、フリドンに合体した。どこもかしこも血の海で

あった。敵は全滅した。友のすがたが見えないので、ふたりは要塞じゆうを大声あげて呼びまわった。

「タリエール！ どこにいる？ 返事しろ！」

だがこたえはなかった。もとへもどつて、こわされた城門のあたりをさがした。きりざかれたかぶとやよろいが散らばり、一万近い敵兵が冷たくなつてたおされていた。のびた死体にはきり傷が見え、くさりかたびらは寸断されていた。重い城門はちようつがいから引きぬかれ、がんじょうなかんぬきはこなこなになつていた。そこにも、ここにも、タリエールの大きい手のあとがしるされてあつた。

二騎士は地下道をくぐつて塔の方へすすんだ。《月》は自由になり、もはや悪龍の手にはかからないだろう！ タリエールはかぶとなしで、胸を胸に、首を首に、やさしく王女をだいて立つていた。天で木星が土星と相会うときは、ちようどこのようなものであるか。うれしなみだがあふれ、太陽の光の中で、ばらはあざやかに燃えていた。悲しみをふかく知つた心の中で、よろこびの火はもう消えることがないようにかがやいていた。タリエールは王女の上にかたむいて、くちびるをくちびるにかさねた。

アフタンジルはフリドンとともにネスタンにおじぎした。王女は感謝のことばをのべて、たいへ

H. Tadashi



んな力になつてくれたふたりに、兄弟のようにキスした。フリドンもアフタンジルもかの女とよろこびを分けあつた。

たがいに、泣いて勝利を祝つた。ライオンのように強くはあつたが、よろいもかぶともよくかれらに奉仕した。一カ所もきられたところがなかつた。敵はまさにライオンの前のやぎであつた。

要塞に攻め入つた三百人のうち、半数以上が戦死した。勝利のはなばなしは別として、フリドンもその他の人々もかれらの死を悲しみ、しばし黙祷した。城兵の生き残りは首をはねられ、おびただしい戦利品はみかたの手にはいつた。大つぶの真珠やルビー、またこはくやサファイアやエメラルドの山を、いく千という包みにして、らばやらくだの背につんだ。カジエツチ城の見はりのために、戦士六十名が残ることになつた。

「この勝利もまつたくファチマのおかげだ。会つてよくお礼をいわなければならぬ！」
そうきまると、ネスタンをかごにのせ、大キヤラバンは沿海国の都をさして出発した。

沿海国の会合

タリエールは沿海国の王さまに手紙を書いた。

《カジェツチ城を占領し、長いあいださがしていた王女をつれもどすことができずしたのは、あなたのおかげです。あつくお礼申しあげます。とりわけ、王女を母のように、またきょうだいのようにかばってくれたファチマの恩にたいし、なんでむくいることができましょうか？ ただむなしのことを書きつらねることは、私はこのみません。それよりも、一日もはやくあなたにお会いしたいと、父のもとへいそぐように、いそいでいます。とてもお国の都へ着くまで待ちきれない気持ちなので、とちゆうでお目にかかりたいとねがっています。

カジェツチ城はおくりものとして、あなたにさしあげます。信頼されるごけらい衆を城うけとりにおつかわしてください。

それから商人ウセインにその妻を私たちのところへ旅だたせるよう、おことづけねがいます。ネスタンのはかの女との再会をどんなによろこぶことでしょう。毎日、ファチマのことばかり話しては、待ちこがれています。》

使者はタリエールの手紙を沿海国王スルハフ・メリクのもとへとどけた。王さまはこれを読んでよろこんだ。すぐ旅のしたくをととのえて、馬のくらにまたがった。ファチマも王さまのおともをした。王女へのおくりものの織物や宝石をつんだキャラバンがあとにつづいた。

十日の旅の後、メリクの一行は三騎士の部隊に出会った。たがいに親しいあいさつかかわされ

た。

ファチマはネスタンを見ると、むがむちゆうになつて、なにやらさげびながら、雪のほおに、手に、足にキスした。

「やみを照らすおかた！　どうかあなたの召使いにしてください！　やっぱり悪いものはほろびて、善がさかえるんだわ！」

ネスタンはファチマをだいた。

「神は悲しみに消えていた心の火をまたもしてくださいました。」と、感謝をこめていった。「あたしはとらわれの身でしたが、いまはまた月となつて光りはじめました。春の日にあたつてばらが花咲くように。」

人が目をまわすような祝宴がひらかれた。うたげは一週間つづいた。部隊にかぞえきれないほどのおくりものが分配された。兵隊たちは砂利道を歩くように、金貨の上を歩いた。絹とビロイドが山のようにつまれた。メリクはタリエールにほのおのようにきらめくパール産のルビーでつくられた王冠をおくつた。これは世界で一、二を争うほどの貴重なかんむりであつた。それに金色にかがやく玉座がそえられた。

ネスタンにはめずらしい服がおくられた。かの女のからだからトルコ玉とギアチント石のじが

発するように見えた。にじの中におうばかりの顔を見て、だれもかれも人知れずため息した。ア
フタンジルとフリドンには、それぞれ別の型のすばらしいくらと、宝石をつらねた金糸ぬいの上着
がえらばれた。人々はこれをほめることばを知らなかった。

タリエールはメリクにいった。

「あなたのごしんせつなもてなしとみごとなおくりものは、私たちをこのうえなくよろこばせまし
た。この出会は生涯わすれないでしょう。あなたも末長く幸福でおくらしなさいますように！」

「私のことを思い出して、お近づきの機会を与えてくださったことを感謝しています。」と、沿海
国の王さまはいった。「それにしても、この国をおたちになつてから、なんで私をなぐさめてくだ
さいますか？」

タリエールはファチマにいった。

「あなたはネスタンときょうだいになりました。私はどうしてもあなたからかりたものをつっかり
お返しすることはできません。せめて、キャラバンではこんできたこの戦利品をぜんぶおさめてく
ださい。あなたのごしんせつにたいしては、もちろん、とるにもたりないものですけれど。」

「それはつれないおことばです！」と、ファチマは低くおじぎをしていった。「それはあたしと別
れるという意味でございましょう。あたしをそんな不幸におとさないでください！ 目さきのよろ

とびがなんになりましょう。あなたにはあたしの心の悲しみがお見えにならないのです！」
タリエールはメリクにいった。

「私たちの運命はまたしてもきびしいものです！　ここでお別れしては、ふえもことももう楽しくはありませんが、私たちはあなたのあたたかいお国を立ち去らなければならないのです。さいごに一つだけ、おねがいがあります。あらしにも波にもなれている船を一そう用だててください。」

「戦場でこの首をさえさしあげるつもりでいるものを、船などとはおやすいご用です！」と、王さまはこたえた。

こうして遠い航海にたえる船はしたてられた。タリエールの一行は船出した。人々は海岸に立つて、悲しみに胸をかきむしりながら、いつまでも船のあとを見送っていた。

海はファチマのながす涙ですつと深くなつたように見えた。

ムリガザンザリの相談

「たえずにぎやかな笑い声があがり、水晶にばら色のさんごがまじつたような楽しい歌声が海のはまでひろがっていった。三人の義兄弟は海をわたってフリドンの国に着いた。さつそく、やみの

本城をおとしいれたことを報じる使者がアスマートのもとへおくられた。

「……王女は私たちといっしょです。おたがいにずいぶんきびしい寒さを味わってきたが、いよいよこれからは新しい生活をたのしむことができます！」

ネスタンは長い道をかごにゆられていった。うりにいわれない不幸のあとで、騎士たちは子どものようにはしゃいでいた。ついにフリドンの領地へはいった。勇敢な戦士たちをかんげいする声は天地にとどろいた。

王宮の人々もこぞつて出むかえた。アスマートは気もそぞろにかけだして、ネスタンにだきついた。もはやおのをふるってもふたりのあいだをたちきけることはできないだろう。まったく、このようにあるじにつくした侍女がどこにいることか！

ネスタンはアスマートを離さないで、口に口を合わせた。

「あたしはまるで敵のようにおまえを苦しめました。」と、王女はいった。「これからは天の加護もあると思うけれど、おまえの愛情としっかりした心のもちかたにたいして、あたしとしてなんでもくいることができるだろうか？」

「この奇蹟を見ただけで、あたしはもうじゆうぶんです。」と、アスマートはこたえた。「王女さまが幸福なら、あたしもまた幸福なのです。召使いがあるじを愛することが許されるなら、世の中に

これいじょう、とうとい愛はございませんわ！」

フリドンはため息していった。

「私の部下は戦場にたおれて、神の国へと去った。みんなおしい勇士たちであった。かれらを失つて心の悲しみはかぎりない。しかし天上の樂園でかれらは高いおめぐみを受けることだろう！」

フリドンのほおをなみだがぬらした。戦士たちも泣いた。勝利の日のほの暗い思い出がよみがえつてきた。

「悲しみを忘れよう。苦しみにたえてきたまままでのことをいっさい忘れよう。」と、アフタンジュルはいった。「タリエールが王女をとらわれからすくい出して、すべてのなやみは終わったのだ。なげきよ、去れ！ もうなみだには用がない！」

フリドンの都、ムリガザンザリに着いた。音楽が広場いっぱいには鳴りわたっていた。らっぱの音にシンバルがこたえた。それらを圧して、いく万という市民のさけびが耳をつんぼにするばかりに高くひびいていた。警官たちは力ずくで群集をおしもどして、道をあけた。王宮のとりでにおしよせて、ひと目でも勇士たちを見せてくれと役人に談判している連中もあつた。

金色の帯をしめた衛兵たちが出てきて列をつくつた。遠くにフリドンの一行をみとめると、道にじゅうたんをしき、金貨をあられのようにまき散らした。群集は金貨をひろつた。

ブリドンの城の中に、エメラルドとルビーをちりばめた一對の玉座がもうけられた。そのとなり
にアフタンジルの玉座をおいた。人々はうつとりとして八方からこの美しい密客たちをながめた。

婚約者——タリエールとネスタンのために歌い手たちはあまい調子の聖歌を歌った。おくりもの
を持ってほうぼうから人々がお祝いにやってきた。そういう人々のためにブリドンは豪華な酒宴を
はった。

ブリドンは婚約のひと組に、あひるのたまごほどの大ききがある真珠を九つおくれた。昼をあざ
むくほどあかるい光をはなっていた。その前では、夜でも画家は人の顔を描くことができるであ
らう。また燃えるほのおのような寶石でつくられた首かざりもおくられた。

アフタンジルの前には、数名の召使いがやつとはこべるような大きいおぼんが持ち出された。お
ぼんの上には真珠のつぶが山のようにもりあげられてあった。

広間はピロッドと絹でいっぱいになっていた。そこでお祝いの宴会が八日間つづいた。昼も夜
も、ハーブ、ふえ、シンバルの音はたえなかつた。

タリエールはブリドンにいった。

「兄弟として天からさずかつたように、おまえはおしみなく私につくしてくれた。おまえは私の心
のいたでをなおす薬を手に入れてくれた。もし必要なら、私はいつだっておまえにこのいのちをさ

さげることを持ちかうよ。アフタンジルは私の苦しみをかき消してくれた。きたえられた友情には、二倍にも三倍にもしてむくいなければならぬ。かれの秘められたのぞみがなんであるか、おまえから聞いてみてくれないか？ かれが私のささえであったように、私もかれのささえとなるだろう！ 兄弟の役にたたないくらいなら、宮殿も牧場のこやも用がない。どうしたらかれの手助けができるか、まえもって知っておきたいのだ。私はかれといっしょにアラビアへいって、どんなことでも、かれのねがいをかなえてやらなければならぬ。万一かれが結婚式をあげないとすれば、私だつて自分の妻の夫ではない！」

フリドンはアフタンジルにこのことばをそのままつたえた。アフタンジルはにつこり笑つていった。

「病人でもないのに、薬のいるわけはあるまい？ チナチンはカッジどもにつかまりもしないし、かくべつの不幸も知らない。アラビアの王女として、なんの不足もなく暮らしている。人々はこの女をそんなけいしている。カッジであろうが地獄のおにどもであろうが、かの女を害する力はない。だから私には友の援助はいらないわけだ。タリエールによくつたえてくれ——長いあいだ待ちのぞんでいた会合のよろこびを私に一日もはやくあたえようとする気持はよくわかる。私のなやみに感じる友の心は目に見えるようだ。しかし、剣も必要でなく、雄弁も無用だとすれば、あとはただ神

の用心こころにまかせせるほか、なんにもすることはないじゃないか。それよりも私はかれが一日いちにちもはやくふるさとへ帰かえることを助たすけてやりたい。インドの玉座ぎやうざにのぼり、そばにネスタンのかがやきをえて、そねむものどもの息いきの根ねをとめることを助たすけてやりたい。そういうかねてののぞみをすっかりはたしてから、私はアラビアへ帰かえろう。たぶん、女王おうじよの胸むねのほのおはそのときすこしはしずまるだろうが、これとても一日いちにちをあらそう必要ひつようはないのだ。」

フリドンからアフタンジルのことを聞くと、タリエールはいった。

「どんな魔法まほうでも私わたしをひきとめることはできないよ。いったん死しんだものを、生き返かえらせてくれたのはアフタンジルだ。友情ゆうじょうをたいせつに思おもうかぎり、かれをささえずにはいられない。アフタンジルにそういつてくれ——私わたしにさからつてくれるなど。ロステワン王おうと会あわないうちは、私はけつして友ともとは別わかれない。まえに私わたしはけらいたちをきりすてて、インド王おうの怒いかりをつかつた。だからそのおゆるしを得えないうちは、インドへは帰かえれないのだ。あしたは朝あさはやく出で発ぱつする。私わたしの決心けつこんはてこでも動うごかない。女王おうじよの手てをもとめるために、かれと王おうさまとのあいだにいざこざがおこつたらたいへんだ。それが心配しんぱいだから、私わたしはなこうどのつもりで、王おうさまに会あいにいくのだ。」

フリドンはタリエールの決心けつこんをアフタンジルに告つげた。アフタンジルはこまった。どきまぎして、タリエールの前まへにいき、悲かなしげな目めをしていいだした。

「新しい罪でロステワンをまたおこらせたくないんだよ。私を養育してくれた人の気持ちをそこねることはできないのだ。おまえはだいぶ思いすごしてやしないか？ へたにたのんだら、かえって王さまにそつばをむかれるよ。かれはおそらく私のことを案じているにちがいない。帰ったら、すなおにあやまるのがいちばんだ。けらいが主人に剣をふりあげていいはずはない！ それにまた軍の大將が王女の手をもとめることは、あまりふさわしいことではないのじゃないか？ 王女だって、はずかしめられたように感じないものでもあるまい。そうになると、私はまた火の中になげこまれ、私の生涯はまっくらになる。こんどはだれが私をゆるすようにねがってくれることだろう？」

タリエールはしずかに友の肩をたたいていった。

「私はおまえの大きい心づくしにむくいる自分の順番がきた、と思っているだけだよ。不幸におちた人を見ずけるようなものは隣人ではない！ 運命にめぐまれない人から遠ざかるようなことは、人の道ではない。友としていつまでもおまえのことを心にかけてきてくれ。さもなければ、いつそ別れて、自分の道へいくほうがましだ。私はおまえの心と王女の心とが結ばれていることを知っている。私は王さまにも王女にも会いたくてたまらない。会ってもけつして遠まわしに話す必要はない。だって、お客として私をむかえたいじょう、すこしくらいのいい過ぎをとがめるわけではないじゃないか。私はロステワンにぎつくばらんというよ——美しい王女は強い勇士と結ばれるのがあ

たりまえだと。このような愛は、はなればなれになるべきではない！」

アフタンジルはついにタリエールの決心に負けた。かれは友の正しいことをみとめた。そこでフリドンはすぐにキャラバンの用意を命じ、これをまもる部隊の選抜にとりかかった。

キャラバンはアラビアに着く

不正を正し、悪の芽をかりとって、

神は世界に善をしめたまう、

私たちの心にはやさしく、まったきすがたもて、

かれは栄光の栄光にてかがやく。

聖ジオニシウスはこのようにおしえている。

キャラバンはすすみ、ネスタンはあたりをあかるく照らしながら、かごにゆられていった。いくさぎざぎで騎士たちは狩りをもよおした。どこかの町にはいると、人々は騎士たちの美しさに目をみはり、かんげいの声をあげて、あらそっておくりものをさし出した。

いく日もいく日も平野の道がつづいた。やがて水のない砂漠にさしかかった。眠りもせず、休息もしないで、砂漠を通りぬけて、山道へとまがった。けわしい岩がそそり立っていた。

「ここだ、私が死を待っていたところは。」と、タリエールはいった。「むこうに、私がなやみ苦しんでいた洞窟がある。立ちよって、アスマートに、とくいの野獸料理をごちそうしてもらおう。私はデフの宝物をみんなに分けてやるよ。」

騎士たちはおそろしい巨岩のかけにある洞窟へはいった。アスマートはしかの肉でごちそうをこしらえた。かれらは過ぎし日の不幸をしのび、今日の成功を語って、たのしい休息のときをすごした。

やがて三人は洞窟の奥へすすんだ。タリエールの案内にしたがって、金鉱をでも掘りだすようにして、宝庫をひらいた。その富はともかぞえつくされるものではなかった。これを手に入れた人は自分の運命を祝福しないではいられないだろう。

宝物のかがやきは人々のきもをうばった。タリエールはフリドンの部隊におしみなく分けてやった。それでもまだいくつかの宝庫は手もつけられないで残った。

タリエールはフリドンにいった。

「おまえからかりたものはとうてい返せないが、さいわいこの戦利品がある。私にはもう用がない。」

ものだ。きょうからはこれをおまえのものにしてくれ！」

フリドンは非難するようにタリエールの顔を見た。

「欲ばりは大損といえますからね。まあえんりよしておきましょう。あなたに見すてられたら、私ひとりでは心細い。敵が、たとえかしの大木のようにあっても、あなたなら、もみがらみたいに吹つとばすんですからね。」

けつきよく、宝物はタリエールの庫におさめられることになり、それをほこぶためにらくだの群が集められた。こうして大キヤラバンはまたアラビアへの旅をつづけた。

暑さが旅人たちを苦しめた。多くの日数がたつて、やがて遠くに建物や塔が見えてきた。青やみどりの服を着た人々がアフタンジルを見て、むちゅうになつてかんげいした。だれもかれも泣いていた。急使がロステワンのもとへおくられた。タリエールは書いた。

「遠いインドの国から偉大なお国へやつてきました。私はいつぞや、心ならずもあなたを苦しめたものであります。あるとき私はわるいわなにかけられたように考えて、いっさんに逃げだしたのでした。追いかけたごけらい衆は私のためにあるいは傷つき、あるいはたおれました。どうかおじひをもつて、むかしの私の罪をおゆるしくたしますように、心からおねがいます。私には特別のおみやげもございません。そのかわり、あなたの愛するアフタンジルを名誉においてお返し

たします。》

アラビア王はこの手紙を読んでたいそうよろこんだ。チナチンはまつげに水晶の玉をきらりと光らせた。

たいこの音が鳴りわたった。けらいたちは戦士の部隊といっしょになって、出むかえに急いだ。戦士はいずれも戦場で名をあげた人々であった。呼びだしに応じて、四方から完全武装した部隊が集まった。神の栄光をたたえて、声をかぎりにさげんだ。

「地上の悪をほろぼして、神意は勝った！」

アラビア王は馬をすすめた。

アフタンジルは不安のおももちでタリエールをかえり見た。

「遠くに、雲のようにほこりがまいあがつたじゃないか？ 私は気おくれして、だんだん胸さわきがひどくなる。あすこには私の養い親の王さまがいるはずだ。むかしの罪がおそろしい。どんなふうにして王さまの前に出て、その足もとにひれふしたらいいのか？ おまえなり、フリドンなりの考えを聞かせてくれ。」

「それではまず私が王さまに会おう。おまえはしばらくここにひかえていろ。」と、タリエールはこたえた。「おまえがはずかしがっていることを、私から王さまに申しあげる。なに、おまえはもう

すぐチナチンといっしょになれる。案じることはない！」

その忠告にしたがつて、アフタンジルはネスタンとともにその場に残り、タリエールはフリドンとともに馬を走らせた。

馬上の人を見て、ロステワンはすぐさとった。

「おや、あれはインドの王さまではないか！」

アラビア王はよろこんで、父がわが子をむかえるように、あたたかくかれをむかえた。タリエールはうやうやしくおじぎした。王さまはかれをだいて、キスした。

「見れば見るほどごりつぱだ。あたりがあかるくなつたような気がするよ！」

フリドンもおなじようにあいさつした。だがアフタンジルを待ちかねていることは、そのようすからも察しられた。

「失礼ですが、王さまにはなにかものたらぬように見うけられますよ。」と、タリエールはいった。「おそらくアフタンジルがまだすがたをあらわさぬからではないでしょうか？ それでしたら、もうじき部隊をつれてやってきますよ。私が罪のある総司令官といっしょにこなかつたことをとがめないでください。私はほんのなかだち役なので、けつして敵の使ではないのですから！ むこの草原の方ばかりごらんになっていないで、すこし休みましよう！」

軍隊にとりまかれて、かれらはこしをおろした。タリエールはあらためて王さまの顔を見た。

「アフタンジルの使いとしては、私はふさわしくないとおもいますが、ただかれの罪をよく知るものとして、おわびにあがったわけでございます。私はかれのおかげで命を助かりました。このフリドンともども、かれのために王さまにおねがいをいたします。アフタンジルの薬をさがそうとして、世界じゅうをめぐり歩きました。その苦しみはどんなにつらかったでしょう。長い不幸の物語はとも話しくせるものではありません！ そのあいだ、かれのさきえとなっていたものは、王女さまとの心のむすびつきでありました。しかし、火と燃える心を抱いて、別れ別れにならなければならぬとは、泣いても泣ききれないものがあつたでしょう。いまこそ王女さまを強きことライオンのごとく、意志のかたきこと岩のごときその人に、さしあげてください。私のことばがたりませんところは、いくえにもお察しくださいますように！ ……」

肩ぎぬをほどいて、首にきつく巻きつけ、子が父にたいするようにな、ひざまずいた。かれのことを聞いていた人々はふかく心を動かされた。

ロステワンはタリエールをじろりと見た。その目にはにがにがしい色があらわれた。

「インドの王さま！」と、かれはふきげんな調子でいった。「せっかくのよろこびにかげがさしたよ！ あなたはのっぴきならぬまわした戦法で私をくるしめる！ こうなれば、あなたのことばに

したがって、なにがおころうとも、たとえ私の娘が死ぬようなことになるうとも、あなたのたくらみをもんくなしに承認するよりほかはない。なるほど、司令官と肩をならべるような男は、娘には見つかるまい。いや、世界じゅうをさがしても、かれよりりっぱなむこはあるまい。娘はいまアラビアを支配している。チナチンは美しいばらだが、私は夏を過ぎた花だ。勇敢な騎士が娘のためにたしかなたてとなることはわるくはなからう。ただ、かりに、あなたがどれいをむこにすすめたとしても、私としてはことわることができないのだから、ほこりの感情を重んじれば、アフタンジルにそっぽをむかないわけにはいかない。アフタンジルはきらいです、会いたくもありませんよ、といわなければならぬ。なんにしても、ことがきまつたらうえは、さっそく結婚の勅令を出すでしょう！」

タリエールは王さまの足もとにひれふして、感謝のことは述べた。王さまはかれの礼儀正しさをほめた。

アフタンジルのよろこびを胸にえがきながら、フリドンは吉報を持って引返していったが、まもなく、かれをともなつてもどつてきた。アフタンジルはロステワンの前に出ると、きまりわるそうに目をふせた。王さまはかれの方へ歩みよつた。感動をかううじておししずめながら、口をかれに近づけた。アフタンジルはなみだをはらつて、王さまの足にとびついた。

「起きろ！」と、王さまはいった。「目的を達し、名譽をもつてもどつてきたのに、なにをはずか

しがることがあるか！」

王さまは兄弟のようにアフタンジルをだいた。

「おまえはあらゆる障害をこくふくして、私のなやみをとりのぞいてくれた。王女もおまえを待つている！ いけ、おまえの太陽のところへ！」

王さまは帰ってきたアフタンジルがまるでわが子のようにかわいかった。娘の美しさと権力はかれの威厳をかざるにふさわしいだろう。不幸をなめつくした後の楽しさの味はまたかくべつである。

ややあつてアフタンジルはロステワンにいった。

「私は月のようにかがやく人をつれてまいりました。なぜはやくごらんにならないのですか？ インドの王女をおまねきになれば、王宮の広間もま屋のようにあかるくなりますよ。」

王さまはネスタンのかごへ近づいて、おじぎした。王女はかごをおりながら、王さまのほめることを耳にした。

「この光りがやくおかたをたたえることばはどこにもない。私は、頭がぼうつとしちまつたよ。太陽と月の前には星々も光を失うが、もうきようからは、ばらもすみれも見える気はしなくなつたね！」

人々はネスタンを見ようとして、大波のようにおしよせた。

アフタンジルとチナチンの結婚

客たちもあるじも王宮へ着いた。チナチンは玉座をおりて、客たちをむかえた。めいめいはかの女に礼をして、服のはしにキスした。タリエールはチナチンにいった。

「アラビアの玉座に強いライオンと太陽がごいっしょになるところを、私は、ぜひ拝見したいのです！」

王女の手をとって、玉座へみちびいた。アフタンジルもつれていかれた。愛のほのおが燃えていることが、だれの目にもあざやかにうつった。

アフタンジルとならんで、チナチンはひどくどきまぎした。心臓の血がつめたくなり、顔がまっさおになった。

「これ、そんな気の小さいことでどうする！」と、父親はかの女をしかった。「愛は悪を正して、幸福へみちびくものだ、と聖者のおしえにもあるではないか！ 私はおまえたちの生活が千年ものさしではかられるように、といのっている。苦しみの順番がこないように、天が沈まない光でお

まあたちを照らすように、といのつている。私が灰になったときには、おまえたちの手で地面にまいてもらいたいのだ！」

王さまはけらいたちにむかい、アフタンジルをゆびさしていった。

「きょうからはかれがおまえたちのあるじだ！　かれがこの国をおさめるのだ。私にはもう老いと病氣しかない。それが運命のさばきなのだ。戦士たちよ！　いままで私につかえたとおりに、かれにつかえてくれ！」

指揮官と部隊は声をそろえてロステワンにこたえた。

「王家に忠誠をちかいます。うらぎりものには復讐します。私たちにはおそろしいものがあります。危険とみたら、すすんでこれをとりにしずめます！」

タリエールは王女にお祝いのことをさしのべた。

「長くごいっしょにおくらしなさいますように！　もろもろの悲しみはけむりのように消え失せました。あなたのだんなさまは私にとってきょうだいよりも近い人です。ですから、あなたとも私ばかりきょうだいなのです。あなたに敵対するものがあれば、私はいつでもこの剣で制裁してやります！」

玉座にはアフタンジル、そのとなりにタリエールがすわった。チナチンとネスタンは人々の目をうばった。二つの太陽が天から地上におりてきたかのように思われた。

祝宴がひらかれた。いく千という牛やひつじが料理された。料理のほかにも、おわんにもさらにも燃えたつ寶石が山のようにもられた。

「えんりよなしに楽しむように！」

音楽がたえまなしに演奏された。あな倉からはこび出された酒は川のようにながれた。昼も夜もなかった。不具者たちには、太陽のようにおしみなく、大つぶの真珠がばらまかれた。ふつうの人は高価な織物や金貨があたえられた。

結婚を祝う人々があとからあとときりもなく王宮にやってきた。おくりものの山々はますます高くなっていた。ロステワンはまるで召使いのように客たちをむかえ、客たちにサーヴィスした。王さまからのおくりものはその豪華さで人々をおどろかせた。

タリエールとネスタンには世界じゅうの宝物をささげてもおしくない気がした。だつて、きょうからは、自分の生みの娘とそのむこのきょうだいになったのだから。いく千という熟したすももの大きさがあつた真珠、いく千という山の斜面のような横腹をもつりっぱな馬……とうていここには書ききれない。

フリドンには寶石入りの箱九つ、くらつきの黒馬九頭がおくられた。

新夫婦のテーブルはひとときわにぎやかであつた。人々がよつたあとに、また別の人々がかわつて

よった。タリエールもずいぶん飲んだが、ほかの人のようにはよいつぶれなかった。かれはロステワンにいった。

「いつまでもおそばにいて、幸福を分けていただきたいのですが、もうお別れしなければなりません。インドは敵の手に落ちて、その牧場にされているとことです。これから帰って、勇気と知恵をふるって、敵を追いはらわなければならぬのです。ぐずぐずしてはいただけません。神の加護があれば、またお目にかかることもできましょう！」

「ためらいは人々に光栄をもたらしません！」と、王さまはいった。「お考えのとおりにやりなさい。ハタイ人を罰するために、アフタンジルをつけてあげる。名剣とじょうぶなたてもさしあげよう。」
アフタンジルはタリエールに愛と友情をちかつかつた。

「その心ざしはありがたいが、おまえはチナチンに誠実でなければならぬ。」と、タルエールは友にいった。「おまえはかの女と別れてはならないのだ。仲よく、いっしょにくらしなさい！」

「そのことには承服できないね！」と、アフタンジルはこたえた。「もしおまえがひとり出ていくとすれば、それは女にひかれて、友情のちかいをやぶった！」と、私を非難するにひどい。不幸に友を見ずるものは、自分が不幸になげくだろう、といわれてるじゃないか。」

「友と別れて、なんで楽しいことがあるらう？」と、タリエールはいった。「私は心からねがついて

たことを口に出したのだが、それほどまでにいうなら、また長い道をとみにいくことにしよう。」
アフタンジルはすぐ出陣の命令を出した。八万の騎兵が集まった。戦士も馬もホラズムの武器で
かためられていた。

ネスタンはチナチンをだいた。ばらのはなびらのような口と口とが合わさった。それを見て、人
人は運命のせつなさに泣いた。

「おたがいによるこびの中でお会いすることができませんでしたわね！」と、ネスタンはいった。
「愛する人をあなたから引きはなして、遠い国へいかなければならないことになりました。あたし
の手紙にはきつとご返事くださいね。あなたのことはいつまでも忘れませんわ。あなたもあたしの
ために心の火をともしてくださいますように！」

「あなたがここからお立ちになるときが、あたしの不幸な生活がはじまるときですわ。」と、チナ
チンはこたえた。「お墓がひらいてもいい。あたしにはこの世の楽しみなど用がないのです。ただ
なみだがかれないかぎり、あなたのおしあわせをいのつておりますわ。」

またきあい、またキスした。チナチンはネスタンから目をはずすことができなかつた。その日
を見ると、ネスタンの胸はいたましくしめつけられた。

ロステワンはふかい悲しみにとぎされた。いくらがまんしようとしても、ついため息がもれた。

お湯がわいてふきこぼれるときのようになみだがほおをつたわってながれた。王さまはタリエールのほおにやさしくキスして、別れのあいさつをのべた。

「もう二十年若かつたらねえ。私もあなたといっしょにどんな遠くのはてまでもいくんだがな！ 私たちによるこびをもつてきてくれたその同じ人が、私たちをこのようななげきに沈めるとは、さして世の中とはわからないものさ。」

タリエールも泣いて王さまに別れをつげた。見送りの人々も泣いた。かれらのながす涙でゆるだちのあとのように野原はしめつた。

インド平定

大軍は動いた。そのあとに荷物をいっばいつんだ車隊がつづいた。八万の騎兵部隊の先頭に立つのはフリドンとアフタンジルとタリエールであった。三つの心臓は一つのように鼓動し、三人の前に目的もまた一つであった。

十三週間戦つた。世界じゅうに三騎士に敵するものはいなかった。相手はすくなからぬいたでをこうむつた。そのあいだ三騎士は野にテントをはり、谷に休息し、食事のときには乳ではなくて、

酒を飲んだ。

目的ははたされた。七つの領土はタリエールとネスタンの手にもどった。不幸は忘れられて、よろこびがそれにかわった。いのちのにがさを知らない人は、いのちのあまさのねうちがわからないだろう。

結婚式と戴冠式とがいっしょになった。このことを告げるらっぱの音は、国じゅうに鳴りひびいた。

「わがきみに光栄あれ！」

いたるところで、そういう声があがった。宝庫のかぎはタリエールに手わたされた。

アフタンジルとフリドンには二つの玉座がもうけられた。人々はかれらをほめたたえ、また過ぎ去った日々のできごとについて話を聞いた。

数知れぬ召使いたちはごちそうのしたくをととのえた。王さまとしての結婚式があげられた。その盛大なもようは後の世までも語りぐさになっている！ いたるところから集まった人とおくりもので、広大な王宮もうずまった。貧しい人々や不具者たちのためには宝庫がひらかれた。王宮の高官たちはテーブルの前でさかずきをあげて、アフタンジルとフリドンに感謝のことはをのべた。

「私たちに生活のよろこびがもどりましたのは、すべておふたりのおかげです？　どんなおことは

でも、私たちはそれをあるじの命令として聞くでしょう。」

タリエールはアスマートにいった。

「おまえは私たちのなやみをなやんでくれた。おまえは世界のどんな人でもなし得ないようなことを、よくなしとげた。私はせめてものお礼として、インドの七分の一の領地をおまえにおくりたい。私のけらいではあるが、おまえはこの領主さままだ！ 気にいった人をだんなにえらんで、末長く栄えておくれ！」

アスマートはひれふして、涙にむせんだ。

「なんとという身にあまるしあわせでしょう！ 私はいつまでもあなたのどれいですわ！」

三人の義兄弟は客たちにかこまれて楽しい毎日をおくっていたが、タリエールはアフタンジルがしだいに沈みがちになってきたことに気づいた。かれはそのわけを察した。

「なんだって兄弟にかくしてるんだね？」と、タリエールはいった。「七つの悲しみというが、八つめの悲しみにとりつかれたんだらう？ 私たちの友情に運命がやきもちを焼いてきたのさ。えんりよしないで、チナチンのもとへ帰るがいいよ。」

ロステワンへのおみやげとして、金糸縫いの上着と、ねうちをはかることもできないほどの寶石入りの箱がさし出された。

「王さまによろしくいつてくれ！」

アフタンジルは心細そうにこたえた。

「いよいよお別れかね！」

ネスタンはチナチンにめずらしいヴェールをおくつた。それは世界の人がまだ一度も見ることがない織物でつくられていた。また、それを身につけている人の名譽をまもるといふ大つぶのダイヤモンドをおくつた。それは夜になると太陽のようにかがやいて、どこからでも目につくであろう。

別れはつらかった。火よりもあつい苦痛が三人の胸を焼いた。アフタンジルはふかいたため息をつき、

「生活は、私にとっては地獄だ！」とさげんだ。

フリドンとつれだつて同じ道を帰つたが、それも長いことではなかった。やがてめいめいはめいめいの道へと別れていった。

こうして、多くの苦しみも悲しみも成功によつて終りを告げ、アフタンジルはその故国で、人の世の花を咲かせることができた。

タリエール、アフタンジル、そしてフリドン——この三人の主人公は三つのめぐまれた國をまもり、たがいにいつたりきたりして、その親交をあため、ときには力をあわせて、そむくものを必

殺の剣でこらし、敵の領土をめしあげて、国のさかいをひろげていった。そしてその財宝を、雪あらしが粉雪をふりまくように、やもめにも、みなし子にも、貧しい人々にも、おしみなく分けあたえると同時に、一方では、国の中でも、ずるいおおかみがやぎとなれあって、小さいこひつじにさえ母親の乳をすわせないので見ると、そういう敵をようしやなくうちほろぼした。

むすびのことは

夜のねむりのゆめのような、

物語のひとまきは終った。

その王さまたちは世を去った。

これが世のうつりかわりである！

永世を考えれば、

地上のいのちはみじかい。

ルスタヴィの名もないメスフ人、

私がこの歌をつくった。

いつも太陽を道づれとする、

ゲルジアの王、ダヴィドのために、

その宮廷のおきてを重んじながら、

私はこの賛歌をつづった。

つむじ風のようにかけめぐって、

かれは東をうち、西をしたがえ、

不信のともがらをはき清めて、

新しい国土をかためる。

ダヴィドの大きなはたらきについて、

よく歌いあげることができらるうか？

遠い国々の、よその王さまたちについて、

ほめたたえられる強い王さまたちの、

その大きなはたらきについて、

私はこの物語をくみたてた。

それが歌いこまれているとしたら、
私はいささかのほこりをもつだろう。

この世界はたよらない、

地上のみちはけわしい。

ほんのまばたきのように、

いのちははかない。

なにをあわててさがすのか？

どんなかべをも運命はつきやぶる、

天の世紀も地上の生涯も、

すなおな人にはつらくはない。

ホネリはアミランをうたい、

たくみな筆をふるって、

世にきこえたシヤフテリは
アブドル・メシヤの功績をうたい、
つかれを知らぬツモグヴェリは
ジラルゲートの光榮をうたった。
なみだにぬれてルスタヴェリは
いまタリエールの歌をうたった。

シヤフテリ——十二世紀のグルジアの詩人、その作「アブドル・メシヤ」は断片的
に今日に伝わっている。

ダヴィド——（ダヴィド・ソスラニ）グルジア女王タマラの第二の夫、一二〇七年
死す。

ツモグヴェリ——十二世紀のグルジアの作家、その作「ジラルゲチアニ」は伝わっ
ていない。

ホネリ——ルスタヴェリの先輩で、「アミラン・ダレジャニアニ」の作者。

メスフ人——グルジア南部の一地方メスヘチアに住むグルジア民族の一つ。
ルスタヴィ——メスヘチアの村。古代グルジアのもつとも文化のひらけたところ。

「虎の皮を着た勇士」

おわり

解^{かい}

説^{せつ}

原作者^{げんさくしや}と作品^{さくひん}について

那^な須^す辰^{たつ}造^{ぞう}



ルスタヴェリ

この世界名作全集^{せかいめいさくぜんしゅう}のために袋先生^{かぶせんせい}が、シヨター・ルスタヴェリの「虎の皮を着た勇士^{とらかわきをかいたゆうし}」をお訳^{おやく}しくださることになりました。この全集^{ぜんしゅう}によって、わが国^{くに}では初めて紹介^{しょうかい}される作品^{さくひん}なのです。

この「虎の皮^{とらかわ}を着^きた勇士^{ゆうし}」(Vitязi v bar, soroi shkure) は、ロシアのむかしの作品^{さくひん}で

す。一一八七年カごろに作つくられたということですから、おおよそいまから七百七十年もむかしだと思おもえばよろしい。作者さくしやは、シヨター・ルスタヴェリ (Shota Rustaveli) で、グルジアという国の詩人しじんでありました。袋先生かぶせんせいがまえがきの中なかにお書かきになっているとおり、この人ひとのことは、くわしいことはわかりません。

グルジアという国くには、いまのソヴィエト連邦れんぽうでは、グルジア共和国きょうわこくとよばれています。地ち図ずをひらいてごらんなさい。ソヴィエトは、ヨーロッパの東ひがしに、ひろびろとひろがっていますね。その南みなみには、大きな二つの海うみがありますね。一つは黒海こくかい、一つは裏海うりかい。この二つの海うみにはさまれて、ロシア大平原たいへいげんとアジアとをつないでいる地方ちほうが、グルジアなのです。ここは、またコーカシアともよばれています。

グルジア人じんは、ロシア人じんとおなじスラヴ民族みんぞくなのです。なにしろロシアはひろいので、東ひがしと西にしと、北きたと南みなみとでは、すこしずつ人種じんしゆ的てきにも、使つかっていることばもちがっていて、ずつと古い時代じだいには、いくつかの国くにに分わかれていました。グルジア国こくは、紀元前きげんぜん数百年すうねんもむかしからつづいていたのだそうですが、ルスタヴェリがで出たころに、コーカシアぜんたいを統一とういつして、たいそうさかえました。

地図を見てもわかるとおり、この地方は、アジアとヨーロッパのあいだにかけられた橋のようなところですから、たえず異民族の侵入をうけて、苦しみつづけました。イランや、アラビアや、インドの文明が、ロシアのどこよりも早くグルジアにつたわってきました。

七百七十年まえといえ、ヨーロッパでは、騎士が活躍していた時代です。十字軍の遠征がたびたびおこなわれていた時代です。ヨーロッパを中心にして書かれた歴史の本を読むと、なんだかヨーロッパが世界でいちばんすすんでいたような感じをうけますが、十字軍の時代には、いまのスペインにあつたサラセン国（アラビア人の国）や、アジアのアラビアなどのほらが、ヨーロッパ諸国よりも文明がすすんでいたものです。

また、ローマのキリスト教会が二つに割れて、その一つは、黒海の出入口にあるビザンチン（いまのイスタンブール）にあつて、ここでも高い文化をもっていました。

で、グルジアは、そういうひらけた国の文化や文明をどしどしとり入れて、りっぱな国になつていたのです。

ルスタヴェリは、グルジアのメスヘチア地方に生まれ、ビザンチンにいつてギリシアの哲学や詩をまなびました。そして、そのころグルジアを治めていたタマラ女王につかえ、女王のい

をも愛し、自分の国を愛するとともに世界の国々と手をつなぐ、というひろい心があったからこそ、世界の国々がまだ人間性や国際性に目ざめない時代に、グルジアはルスタヴェリのような大詩人を生むことができたのでしよう。

みなさんはやがて、十九世紀からさかんになったロシアの文学をお読みになることでしう。プーシキンや、ツルゲーネフや、ドストエーフスキーや、トルストイや、ゴーゴリや、チエーホフなどの作品を読んで、むねをうたれるにちがいありません。ロシアの文学は、世界のどこの国の文学にも見られないくらい深刻です。たましいの問題、生命の問題、社会を立てなおす問題に、ロシアの作家たちはしんけんし苦しめ、しんけんし悩んでいます。ロシアの小説や戯曲にえがかれているロシア人は、生活になんの希望もなくあきらめきつていて、そこぬけのお人よしかと思ふと、たちまちものすごい残酷性をあらわし、神を信じ人を信じるのものがけ、そのかわり人を憎むのものがけ、というふうにあらわされています。

こういう国民性になったのも、長いあいだ異民族に支配されて、いじめつけられたからだといわれています。ルスタヴェリからいくらかのちに、東洋の蒙古の大軍がロシアを征服し、都會も村もたたきこわして、荒野にしてしまいました。さらにそののち、やはり東洋のタタール

人がロシアを征服して、二百年あまりも支配をつづけました。タタール人の支配は、それはそれはひどいものでした。ロシア人は、自由をうばわれたばかりか、生きる希望もなく、まっくらな気持ちで生きつづけました。文化もうしなりました。みじめな生活をつづけました。

だが、ほんとうのロシア人は——いや斯拉ヴ人は、とても明かなくて、強くて、心はやさしく、若い力にみちているのです。無智な農民のあいだにつたわってきた民謡のうつくしき、民話のゆたかさは、世界一といつてもいいくらいです。また、「プイリーナ」という古代の歌物語もありました。これは、フィンランドの「カレワラ」や、ノルウェーの「サガ」や、イギリスの「ベオウルフ」のように、じつに雄壮な叙事詩なのです。また、中世には、ちやうどドイツの「ニーベルンゲンの歌」や、フランスの「ローランの歌」のような、「イゴリー侵入の歌」があつて、これは「ローランの歌」(第九卷)にまさるともおとらない大叙事詩なのです。でも、中世の騎士物語はたいいてい、だれが作つたともわからないのですが、ほとんどおなじ時代に「虎の皮を着た勇士」ほどの作品を、ひとりの力で作りあげたルスタヴェリは、じつにたいした詩人だったといつていいでしょう。

グルジア人は、この歌物語を心から愛しました。蒙古人の軍隊がグルジアに侵入したとき、

国内はすっかり荒され、都も町も村もぜんぶ焼きつくされ、グルジア人はみじめなありさまになつてしまいました。そののち数百年間、暗い時代がつづきました。が、グルジア人は、自分たちのいちばんの宝である「虎の皮を着た勇士」を、口から口へと歌いつづけてきたのです。どんなに苦しいときにも、この作品は、グルジア人のたましいを護り、勇氣づけました。生きる力をあたえました。この歌の中のいろいろなことばから、人々は生きる知恵をおしえられ、愛と、友情と、勇氣と、忍耐と、人間らしさとを守りつづけました。

この作品がずつとのちに本になつたとき、教会ではきびしい命令を出して、すっかり川に投げこんだことがあります。が、それでもグルジア人はこの作品を語りつたえたのです。ほんとうに、こういう作品こそ、民衆とともに生きた文学だといえましょう。

世界名作集 (113)

虎の窟 (著者)

N. D. C. 983



昭和三十年九月二十五日 初版発行
昭和三十一年十一月三十日 二刷発行

定価 二〇〇円

(毛糸製本)

著者 袋 一 平

発行者 野間 省 一

印刷者 長久保 慶 一

印刷所 東京都新宿区市谷加賀町一ノ二二
大日本印刷株式会社

東京都(小石川扇区内)文京区音羽町三ノ一九
発行所 株式会社 大日本雄弁会講談社

振替口座 電話 (94) 代表
東京三九三〇 大塚 三三三〇
三三三二

落丁本・乱丁本はお取りかえいたしません。

PRINTED IN JAPAN



(さしえ・有岡一郎)



(さしえ・高島華宵)

世界名作全集 (64) 怪盗ルパン (3)

原作・ルブラン
保篠龍緒 訳

「あつ、死んでゐる。」

ダイヤ王ケスルバツハの心臓のま上に、血のしたたるすゑどい刃のあと！ 8、1、3のたつた三つの数字からまき起る怪事件のかずかず。ルパン、パリ警視庁の名刑事課長ルノルマン、怪公爵セルニンの三人が、三巴になつて必死にとこうとする8、1、3のなぞ。最後のページまで息もつかせぬ、世界探偵小説の大傑作。

世界名作全集 (65) 勇士ラチプレシス 袋 原作・ブンブル 一平 訳

リエルワールド城の若君ラチプレシスは神々からふしぎな力を与へられた勇士で、数々の試練をへて美しいライムドータ姫と結ばれてゐた。またラトヴィアの人民たちも神々から守られ豊かな自然に恵まれて幸福な日々を送つてゐた。しかし、その平和も悪魔によつて破られ、ドイツ十字軍の手で人民はしいたげられた。今こそラチプレシスの立つ時が来たのである。ラトヴィアのすぐれた民族伝説。



(さしえ・三芳悌吉)



(さしえ・遠山陽子)

世界名作全集 (66) 秘密の花園

原作・バーネット
岡上鈴江訳

十才の時父母に死にわかれ、英国ヨークシャー在住のおじのやしき
にひきとられた意地つぱりでひねくれた少女メリーと、同じやしき
に人目をさけて暗い生活をおくっている病身のいとこコリン少年と
が、美しい自然や素朴なかざりけのない友人の愛情によって明かるさ
をとりもどし、みずから生きぬく強い信念をいだくようになる。小
公子、小公女でおなじみのバーネット女史の明かるい家庭小説。

世界名作全集 (67) 飛ぶ教室

原作・ケストナー
植田敏郎訳

ドイツのジギスムントの学校で、クリスマスに上演される「飛ぶ
教室」の劇を中心に、主人公ジョニー少年とその学友たちがまき起
す友情とユーモアの物語。拳闘の世界選手権をめざして、一年じゆ
うおなかをすかしているマチアス、ちびで弱むしなウリー、絵のう
まい首席生徒ターラー、配するに情け深く正義感の強い舎監先生、
はげ頭の校長先生など、これは明かるくゆかいな学校小説だ。



(さしえ・林 唯一)



(さしえ・松田 稔)

世界名作全集 (76) クオ・ヴァ・ディス

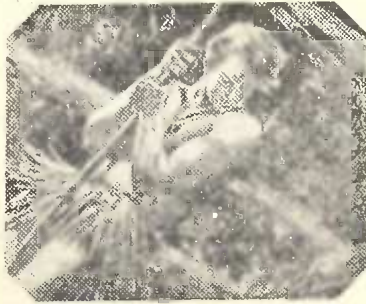
原作・シェン
キヴィッチ
大木 惇 夫 訳

ヴィニキウスは若さと力にみちた典型的なローマ武人で貴族であつた。そうして、古いローマの神々に仕え華美と淫乱の宮廷に入りしていた。しかし、ある時、キリスト教徒の美少女リギアに会い、気高い姿にうたれて深く愛し、やがて、かの女の清純な心を通してキリストの愛と平和と恵みの教えに目覚めさせられ、皇帝ネロのあらゆる迫害にも抗して固く結ばれていく。ノーベル賞受賞の名作。

世界名作全集 (77) 王女ナスカ

原作・スターリング
岸 なみ 訳

なぜ人は憎みあうのだろう。なぜ人は戦わねばならぬのだろう。やさしいナスカ姫の小さな胸の中には、いつもこの難問がうずまいていた。小さな女王を圧迫して実権をにぎろうとする公爵夫人、女王の愛と平和への悲願にそむいて敵国に走る將軍たち……。しかしすべての障害は、女王の愛と明智と勇氣の前についえさる。人間愛につらぬかれた感動物語。



(さしえ・笹鹿 彪)



(さしえ・三輪 孝)

世界名作全集 (78)

あらしが丘

原作・E・フロンテ
山主敏子訳

あらしが丘と呼ばれる屋敷の主人公に拾われた孤児ヒースクリフが、その家の息子に虐待されて成長し、やがて娘のキャサリンと愛しあうが、それも隣家の息子にうばわれ、復讐を誓って家出する。数年後、富を得て帰るが、キャサリンへの純愛はかわらず、病死したキャサリンの後を追って自らも死んでいく。十九世紀のイギリスの有名な三人姉妹の一人フロンテが書いた世界文学史に名高い傑作

世界名作全集 (79)

ターザン物語

原作・パローズ
塩谷太郎訳

ターザンとはどんな人間か、どうして恐ろしい猛獣をつぎつぎとたおして、ジャングルの王者となりえたのか、この物語はアフリカの大密林を背景に、自然児ターザンの活躍を描きつつ、その疑問に明快な解答を与える。手に汗にぎるようなスリルと冒険にみちたこのターザン物語は、全世界の人々に熱読愛読され、すでに五十六カ国で二千五百万部も発行され、すばらしい人気を得た傑作。



(さしえ・池田和夫)



(さしえ・斎藤五百枝)

世界名作全集 (101) 日本神話物語

原作・日本古典
佐藤一英編著

これはわれわれの祖先がえがいた大きな夢であり、美しく勇ましい神々の物語である。七色に輝く天の浮橋に立つイザナギ、イザナミの二神の国生みにはじまり、童話のように明かるく楽しいオオクニヌシの話、あらあらしいふるまいのなかにもどこかさびしく涙ぐましいスサノオの一生。海の宮殿へ釣り針をさがしに行く海彦山彦の兄弟など、だれもが一どは読まなければならぬ神話物語。

世界名作全集 (102) ジェイン・エア

原作・ブロンテ
阿部知二訳

イギリスの片いなかに生まれた少女ジェインは、幼いころ父母をうしない、金持のおばリード夫人の家にひきとられたが、いじめられてこの家を追われ、孤児学院に入れられる。しかしここでも悪校長に苦しめられるが、ジェインは同じような境遇の娘たちの友情や、天使のようなテンプル先生によって、しだいに温い心をとりもどし、やがて自分の道を求めて社会へ出て行く。清純な香り高い名作。



(さしえ・関川まもる)



(さしえ・古賀五十夫)

世界名作全集 (103) ポンペイ最後の日

原作・リットン
白川 渥 訳

ヴェスヴィアス山の大噴火によつて、百年の栄華を一しゆんにして、地下数十尺の下に埋没されたポンペイ市を舞台に、エジプト生まれの怪僧アルバセスと、ギリシア貴族のグロークスが、かれんなイオーネをめぐるつてのあらそいをえがく。それにめくらの花売り娘ニディアの純情をちりばめ、背景にあらたに起つたキリスト教と、偶像崇拜との宗教闘争をおりませた興味あふれる名作。

世界名作全集 (104) 砂漠の女王

原作・ブノワ
小宮 尊 史 訳

神秘と恐怖の国、サハラ砂漠の探検にでかけたフランスの二将校が、ふしぎな男にみちびかれて、砂漠の美しい女王アンチネアのとりにこなる。女王は白人への復讐として砂漠を旅する白人の男を誘惑し、死体をミイラにして、秘密の広間にかざっている。女王に心ひかれて同行の大尉を殺した中尉が、女王の侍女に救けられ死の砂漠を脱出するまで、ふしぎな魔境を舞台に息づまる冒険の連続！



(さしえ・谷 俊彦)



(さしえ・松野一夫)

世界名作全集 (105) ジキル博士とハイド

原作・ステファンソン
岩田良吉訳

医師ジキル博士は、自分の性格に善と悪との二重性があるのを知り、ある日、ふしぎな薬を調合する。その薬によって紳士ジキル博士は、みにくい悪人ハイド氏となり、夜の町をさまよう。つぎつぎにおこる怪奇な事件。善人ジキル博士と、悪人ハイド氏とのふしぎな同一人物。だが、その結果はどうなっただろうか。他にロンドンを舞台にフロリゼル公子の冒険をえがく「自殺クラブ」を収む。

世界名作全集 (106) ベン・ハー物語

原作・ウオーレス
松本恵子訳

ローマ帝国の压制下、暗殺者の罪に問われて、財産をとりられ、どれいにされたユダヤの貴族ベン・ハーが、ローマ人への復讐に燃えて同志を集め、ローマをたおそうとくわだてる。しかし、予言者の告げによってあらわれた新しいユダヤの王イエスに会い、やがて精神の王国にはいり、キリストの教えに生きるようになるまで、压制、復讐、栄光の道を行く青年の活躍！



(さしえ・沢田重隆)



(さしえ・松田 稔)

世界名作全集 (107) **海の勇者**

原作・ユートゴ
斎藤正直訳

波荒い英仏海峡の一孤島「魔法使いの家」とよばれる一けん家に、どこからともなく移住して来た少年ジリアットは、たくましい漁師として成長するが、たまたま密輸業の悪船長のたくらみによって、魔の暗礁に衝突した蒸気船デューランド号の機関ひきあげに単身のりこんで、大暴風雨や、大だこと戦う。そしてみごとに成功するが、しかし、大自然の中に展開する愛と冒険の物語。

世界名作全集 (108) **ハジババの冒険**

原作・モリヤ
宮本哲訳

主人公ハジ・ババは、ベルシアの理髪師のむすこであるが、生まれつき勇気に富み、人情にあつく、しかもやさしい心の持ち主。強盗に捕らわれてその道案内をさせられるとちゆう、脱出し、あるときはたばこ屋に、あるときははたはつ僧に、また憲兵になつて戦争に出て大活躍する。エキゾチックなベルシアを舞台に展開するユーモアとスリルにあふれた傑作。総天然色映画化。

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
二	ドリトル先生航海記	アルプスの少女	源平盛衰記	ジャングル・ブック	シエクスピア名作集	ハックルベリーの冒険	ロビン・フッドの冒険	十五少年漂流記	家な銃	三遊記	西遊記	クオレ	ガリバール旅行記	家なき子	ロビンソン漂流記	アンクル・トム物語	トム・ソーヤの冒険	小公女	小公女	鉄仮面	乞食王	巖窟	宝島	あ
都物語	都物語	都物語	都物語	都物語	都物語	都物語	都物語	都物語	都物語	都物語	都物語	都物語	都物語	都物語	都物語	都物語	都物語	都物語	都物語	都物語	都物語	都物語	都物語	都物語
50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26
八	ギリシア神話	魔境千パン	怪盗ルパン	牧場の少女	家族ロビンソン	ジャングル・ブック	サイラス・マーナー	モヒカン族の最後	海底旅行	ホメルス物語	ウイゼルム・テル	わんぱく少年	紅はこべ	ドン・キホーテ	愛の王子	アーサー王物語	ジャングル・ブック	若草物語	義経物語	覆面の騎士	ソロモンの洞窟	即興詩人	三國志	怪盗ルパン
犬伝物語	犬伝物語	犬伝物語	犬伝物語	犬伝物語	犬伝物語	犬伝物語	犬伝物語	犬伝物語	犬伝物語	犬伝物語	犬伝物語	犬伝物語	犬伝物語	犬伝物語	犬伝物語	犬伝物語	犬伝物語	犬伝物語	犬伝物語	犬伝物語	犬伝物語	犬伝物語	犬伝物語	犬伝物語
75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51
十字軍の騎士	旧約物語	名探偵ルッコック	ゼンダ城のとりこ	弓張の少女	サーカスの少女	白い犬	大尉の教	飛ぶ花	秘密の花園	勇士ラチブレンス	怪盗ルパン	子じか物	海の子ロマン	あしながおじさん	ノートルダムのおむし男	黄金の妖	愛の妖精	ジャンヌ・ダルク	オリバー・ツイスト	水滸伝物語	名探偵ホームズ	黒馬	太閤	パンビ
100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76
ライオン	シエクスピア名作集	捕鯨少年ピーター	森の兄弟	王子チャイルド	孤児デヴィッド	タザン物語	雨月物語	日向が丘の少女	黒いチューリップ	新約物語	八人のいとこ	ターザン物語	怪盗ルパン	白鯨	ニルスのおしぎ旅行	揚子江の少年	シートの動物記	ノンニの冒険	隊長ブーリ	赤毛のアン	タザン物語	あらしが丘	王女ナリス	クオ・ヴァディス
101	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
日本神話物語	ジェイン・エア	ポンベイ最後の日	砂漠の女王	ジギル博士とハイド	ベン・ハー物語	海の勇者	ハジ・ババの冒険	ローランの歌	膝栗毛物語	失われた世界	怪盗ルパン	虎の皮を着た勇士	地底旅行	以下続刊										

3258

La



秋 沢宏 篇

443 / 1



25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
二都物語	ドリトル先生航海記	アルプスの少女	源平盛衰記	ジャングル・ブック	シエクスピア名作集	ハックルベリーの冒険	ロビン・フッドの冒険	十五少年漂流記	家な銚子娘	三遊記	西遊記	クロレ	ガリバー旅行記	家なき子	ロビンソン漂流記	アンクル・トム物語	トム・ソーヤの冒険	小公女	小公女	鉄仮面	乞食王	巖窟	宝島	あ	あ
50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	
八犬伝物語	グリシア神話	魔境千	怪盗ルパン(2)	牧場の少年	家族ロビンソン	ジャングル・ブック(3)	サイラス・マーナー	モヒカン族の最後	海底旅行	ホメルロス物語	ウイムヘルム・テル	わんぱく少年	紅はこべ	ドン・キホーテ	愛の王	アーサー王物語	ジャングル・ブック(2)	若草物語	義経	獲面の騎士	ソロモンの洞窟	即興詩	三国志	怪盗ルパン	
75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	
十字軍の騎士	旧約物語	名探偵ルッコック	ゼンダ城のとりこ	弓張の少女	サーカスの少女	白の園	大尉の教室	飛ぶ花	秘密の花園	勇士ラチアレンス(3)	怪盗ルパン(3)	子じか	海の子ども	あしながおじさん	ノートルダムのおむし男	黄金の妖精	愛の妖	ジャンヌ・ダルク	オリバー・ツイスト	水滸伝物語	名探偵ホームズ	黒馬	太閤	パンピ	
100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	
ライラック咲く家	シエクスピア名作集(2)	捕鯨少年ピーター	森の兄弟	王子チャールズ	孤児デヴィッド	タザン物語(3)	雨月物語	日向が丘の少女	黒いチューリップ	新約物語	八人のいとこ	ターザン物語(2)	怪盗ルパン(4)	白鯨	ニルスのふしぎな旅行	揚子江の少年	ノントンの動物記	隊長ブーリ	赤毛のアン	赤毛のアン物語	ターザン物語	あらしが丘	女王ナリス	クオ・ヴァディス	
						114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101						
						地底旅行	虎の皮を着た勇士	怪盗ルパン(5)	失われた世界	膝栗毛物語	ローランの歌	ハジ・ババの冒険	海の勇者	ベン・ハー物語	ジギル博士とハイド	砂漠の女王	ボンベイ最後の日	ジェイン・エア	日本神話						

以下続刊

自由分売 定価各 200円

送料32円

3258

La



秋 沢宏 篇

443 / 1



定価200円

講談社発行